

異世界転移した種付けおじさんのテイワット冒険記

黒胡椒サラミ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらすじはタイトルそのままです。ずっと書きたかった原神エロ小説に挑戦。他の連載もあるので、更新は不定期になると思われます。

目次

冒険の始まり【アンバーメス堕ち】	1
モンドの城下町と教会【アンバー調教】	14
蜘蛛に囚われた娘【バーバラメス堕ち】	28
簡単なお仕事【アンバー&バーバラ調教】	42
茂みの向こう【バーバラ調教&○○○登場】	53
元素視覚【アンバーイチャラブ&ノエルメス堕ち】	65
世界への感謝【バーバラ&アンバー&ノエル4P】	78
かけがえのない友情【蛍調教】	86
堕ちる幸福【蛍メス堕ち】	95
とつかえひつかえ【とつかえひつかえ】	108

冒険の始まり【アンバーメス墮ち】

「いやあ、元気になってよかったね、おじさん！ あんなどころで人が倒れてるなんて、びっくりしたよー」

「はっはっは、何もかもアンバーちゃんのおかげだよ。食べ物わけてくれてありがとうね」

「任せて！ 困っている人を助けるのも、偵察騎士の役目だから！」

そう言うと、アンバーちゃんは白い歯を見せて胸を張る。ああ、本当にいい子だ。この子に助けられて良かったと、心の底から思う。

僕は一か月くらい前に、この「テイワット」という謎の世界に迷いこんだ。

自分で言うのも何だが、僕はそれなりにオツサンである。特別な事など何もない。それが普通に日本で暮らしていたある日、なんか「神」みたいなのに出会った。白く長い髪で、ああ、これは人間じゃないなとすぐに分かるような美女で、フワフワと宙に浮いていた。

——どうして、このようなただの人間……というかオツサンが……？

その「神」は不思議そうに首を傾げていたが、急に「まあいい」とか偉そうに言うと、僕を次元の裂け目みたいなところに叩きこんでしまった。そして暗闇の中を飛ばされているような感覚がして、気が付いたら「この世界」の森の中にいたというわけだ。

それから昼夜を数えて約一月、何とかサバイバルしてきたけれど、食べる物が尽きて飢え死に仕掛けていたところに、彼女——「モンド」の偵察騎士であるアンバーちゃんに救われた。本当に彼女には、いくら感謝してもしきれない。

「アンバーちゃんのくれた鳥肉の漬け焼き、すっごく美味しかったよ。あれだけお腹が空いてたのがウソみたいさ」

「へへへっ、そうでしょ？ あれはモンドの名物料理なんだ！ どんなに疲れていても、あれさえ食べれば元気いっぱいだよ」

「ふん……」

元気いっぱいというレベルではない。満腹になっただけでなく、全

身に負っていた細かい擦り傷なんか、一発で全部治ってしまった。まるでRPGの回復薬でも使われたように、すーっと消えた。前々から思っていたが、やはりこの世界は、僕がいた地球とは物理法則やなんか色々違うようだ。住んでいる動物も、僕が知っているイノシシなんかの他にも、明らかにモンスタージミタ奴らがいる。

「でもおじさん、ずうつとペコペコだったのに、そのお腹は可笑しいね。まるで太鼓みたい」

「——ん？ はははっ、これでも結構やつれたんだよ？」

アンバーちゃんが指摘したように、僕はちよつと小太り体形だ。しかもサバイバルしているうちに服がビリビリに破けてしまったので、今は上半身裸に膝下が千切れたズボンだけという、野人みたいな酷い格好である。男の身体に慣れていないアンバーちゃんは、最初は初心な少女らしく、頬を赤らめて目を逸らしていたのだが、ちよつとは慣れて打ち解けてきたようである。

でも、今の彼女のからかいの言葉も、快活そうな笑顔も、気恥ずかしさを誤魔化そうとしている部分があるのは否めない。耳の上が少し赤くなっているのがその証拠だ。

「こっちのほうに歩けば森を抜けられるし、モンドのお城も見えてくるはずだから——」

アンバーちゃんは、偵察騎士らしいしつかりとした足取りで森の中を進み、僕を先導してくれる。僕は彼女の背後から、ウサギ耳のような赤いリボンがぴこぴこと揺れる様子と、革製のコルセットのような鎧に包まれた細い腰や、健康的な長い脚のシルエツト、ホットパンツとニーハイソックスの隙間に見えるムチムチとした太ももをさり気なく観察していた。

アンバーちゃんは、その名の通り琥珀色の瞳が綺麗な、とても可愛い美少女だ。こんな若くて可愛い子が「偵察騎士」とは。これから向かう「モンド」とはどういう場所なのだろう。そんなことをぼんやり考えていると、急にアンバーちゃんが緊迫した声を出して、僕をその場におしとどめた。

「——しっ！ ……おじさん、止まって」

「……………？ どうしたの、アンバーちゃん」

「まずい……………ヒルチャールの群れがいる……………」

「ヒルチャール……………？」

アンバーちゃんは苔むした岩の陰に隠れるようにしながら、前方の様子をうかがっている。僕もそっと彼女の背後に近づいて、アンバーちゃんが見えているものを見た。

「あいつらか……………」

アンバーちゃんがヒルチャールと呼んだ生物を、僕も知っていた。この世界に来て、アンバーちゃんという「人間」に初めて会う前に、何度も何度も遭遇した奴らだ。人間のように二足歩行し、角の生えた仮面を付けていて、手にはこん棒や弓矢なんかの武器を持っている。理解できない言語を喋るが、明らかにこちらに敵対心を抱いて襲ってくる。僕の服がボロボロになってしまったのも、ほとんどあいつらが原因だ。

「数は二十くらい……………？ 大型のヒルチャールもいる……………。どうやらここはあいつらの集落みたい。こんなにもモンドに近い場所に、こんな大きな集落があるなんて……………」

アンバーちゃんは騎士らしい凛々しい顔になっている。いつの間にか、彼女はどこかから取り出した弓に矢をつがえていた。しかし、相手の数は多い。戦うべきか、迂回するべきか、彼女は迷っているようだ。独り言のように、彼女は言った。

「……………ううん、やっぱり回り道しよう。時間はかかるけど、おじさんを危険な目に遭わせるわけにいかないし……………」

それから彼女は、僕を振り向くと、このまま引き返して別のルートを取ろうと言った。当然、ここではアンバーちゃんがリーダーだ。僕は彼女の判断に逆らうような真似はしない。僕は黙ってうなずくと、身をかがめたまま、アンバーちゃんと森の奥に引き返した。

あのヒルチャールの集落さえ無ければ、アンバーちゃんの目算では、太陽が沈む前にモンドに到着できていたらしい。しかし予定外の迂回を強いられたことで、段々と陽が傾き始めた。森の中は暗くなる

のも早い。少しずつ足元が怪しくなり、さらに慎重に進まざるを得なくなる。ヒルチャールの集落を発見してから、アンバーちゃんの口数も少なくなった。

そして、いよいよ夜が訪れて、そろそろ寢床の心配をしなければならなくなった時、僕らは二つ目のヒルチャールの集落に遭遇した。アンバーちゃんは、こめかみに汗を浮かべてつぶやいた。

「ウソ……。さつきより大きい……」

集落にはいくつもの篝火が燃えている。縄文人が暮らしてる竪穴式住居っぽい家や、もつと立派な高床式倉庫みたいな家もあった。見張り台もあって、弓を持ったヒルチャールが警備していた。

これだけの規模の拠点の前には、アンバーちゃんに迷う余地は無かった。ここは撤退以外にあり得ない。しかし、すぐに引き返そうと焦ったためか、アンバーちゃんは足元の小枝を踏んずけて折ってしまった。かすかだが、ハツキリとした音が闇夜に響く。見張り台にいたヒルチャールが、こつちを向いた。

「※%&\$#!」

「——!! 走って、おじさん!!」

気付かれた。そう思った時にはアンバーちゃんは僕の肩を押していた。僕に逃げろと言ったアンバーちゃんは、逆にヒルチャールたちに自分の身体を晒すように、前に出ていた。

「おじさん！ 逃げて!!」

アンバーちゃんの意図が、僕にも分かった。彼女は自分を犠牲にして、民間人である僕を逃がそうとしているのだ。

「早く!!」

その間にも、拠点内のヒルチャールの動きが慌ただしくなる。石の矢じりがついた矢が、空気を切り裂いてこちらに飛んできた。

「おいでっ、ウサギ伯爵っ!!」

アンバーちゃんが叫ぶと、何もない場所から、手品のように大きなウサギ人形が現れる。ウサギ人形は一人でひよこひよここと歩き、その動きに釣られ、何匹かのヒルチャールがそつちに向かった。アンバーちゃんは瞬く間に二本の矢を放ち、見張り台から二匹のヒルチャール

を射落とす。その時ちょうど、別のヒルチャールのこん棒に殴られたウサギ人形が、周囲のヒルチャールを巻き込んで自爆した。一瞬だけ、星空の底が紅く染まった。

アンバーちゃんは弓使いだ。多勢の敵に対しては、離れた場所に隠れて相手を減らしていくのが、戦術としては上策だろう。しかし、彼女は敢えて目立つ場所に自分を晒し、矢を放ちながら拠点中央の広場に向かって歩いている。やはりこれは、僕の逃亡を助けるための動きだ。

敵に居場所がバレてからここまでの時間は、きつと一分も無かつたはずだ。その間に、アンバーちゃんは6体のヒルチャールを仕留めていた。——でも、敵はまだまだいる。その上、奥からやって来るヒルチャールは、既にアンバーちゃんが倒したものよりずっと巨体だ。さらに奥には、杖を持ってフワフワと浮く得体のしれないヤツもいる。それでも、アンバーちゃんの偵察騎士としての責任感や誇りが、彼女を前に進ませるのだろう。アンバーちゃんは、もう一度大きな声で「逃げて、おじさん」と叫んだ。

「——なっ!?! アビス教団!!」

巨大なヒルチャールが突進してくる。それと同時に、奥にいたフワフワしたヤツが、アンバーちゃんの斜め後ろにワープして出現した。

どちらを射るべきか、一瞬迷ったアンバーちゃんの手と足が止まる。そして、その一瞬が致命的だ。このタイミングでは、彼女は大型ヒルチャールの突進を避けることはできない。よしんば避け得たとしても、フワフワしたヤツが空中に召還した鋭いつララが、彼女の胸を射抜くだろう。

アンバーちゃんは、子どもみたいな泣きそうな顔になり、それから僕のほうに、「ちゃんと逃げてね」と案じているような顔を向けた。——そして、そんな彼女の琥珀色の瞳が、大きく見開く。

「おじさっ——キヤアっ!?!」

アンバーちゃんの指示に従わず、物陰から出て走り寄った僕は、彼女を乱暴に突き飛ばしていた。倒れたアンバーちゃんの身体が土埃を立てる。すぐに上半身を起こした彼女は、もう一度僕を呼んだ。

「おじさんっ!!」

返事をする暇は無かった。大型ヒルチャールの巨体は、既に僕の十センチほど手前にある。暴走するマイクロバスくらいの迫力。直撃すれば挽き肉コースだ。アンバーちゃんの目にも、一瞬あとに跳ね飛ばされる僕の姿が映っていたはずだ。

「……………え?」

でも、僕は吹っ飛ばされなかった。アンバーちゃんがぼかんとしている。凄まじい衝撃が身体に伝わったが、僕の身体は原型を保ち、しっかりと地面に立っている。

「&%#\$%?!」

ヒルチャールのほうも面食らったようだ。

不思議な力が地面から脚を伝ってきて、僕の身体は硬く、重くなった。そう、ただのオツサンである僕が、一か月もこの森でサバイバルすることができたのは、ひとえにこの力のおかげだ。

「お、おじさんも神の目を……………元素の力が使えるの? ——!!」

アンバーちゃんは呆然と呟いてから、思い出したように地面に膝立ちになり、弓を引き搾った。そして狙いすました矢を、フワフワしたヤツ目掛けて放った。バリアーのようなものが、その矢をはじく。しかし、フワフワしたヤツの動きは一瞬止まり、隙が生まれた。

その時、僕の目とアンバーちゃんの目が合った気がした。アイコンタクトというのだろうか、僕は咄嗟に、アンバーちゃんが言いたいことを理解した。大型ヒルチャールを止めていた僕は、大きく横に飛んで転がっていた。

「——雨のような、矢をつ!!」

「##&%\$%&#!」

アンバーちゃんが、空に向かって矢を放つ。それから一拍遅れて、炎をまとった大量の矢が、ヒルチャールたちの頭上に降り注いできた。

==

「なるほど……………これは元素っていうのか」

ボス格を失ったことで勢いを失ったヒルチャールたちは、アンバー

ちやんの縦横無尽の活躍で全滅した。ヒルチャールたちは死体も残さず、黒い煙のようなものを上げて消えていった。やはりあれは普通の生物ではないのだろうか。

とにかく僕は、僕ら二人以外はいなくなったヒルチャールの拠点で、さつき僕が使った力について、アンバーちゃんから講義を受けていた。

「うん、そうだよおじさん。岩の元素の力だね。……もしかして、元素を知らなかったの？ この世界の人なのに？ 知らなかったのに、あんな風に使いこなしてたの？」

アンバーちゃんの矢継ぎ早の質問を、僕は曖昧に誤魔化した。そんなことより、アンバーちゃんが無事でよかったと僕は言った。

「う、うん……。おじさんのお陰だよ。ありがとうおじさん。……—えへへっ、わたしは偵察騎士なのに、逆におじさんに助けられちゃったね」

アンバーちゃんは、はにかんだ笑顔を見せながら、頬つぺたをポリポリと指で搔いた。僕も彼女に微笑んだ。協力して危機を乗り越えたことで、二人の距離は一気に縮まった感じた。

「でも、これからどうしよう……。もう本格的に夜になっちゃった」「今から町にたどり着くのは無理そうかい？」

「うん……。夜は魔物も手強くなるから、あまりうかつに移動しないほうがいいと思う」

「そうか……」

それじゃあと僕は提案した。もうこのあたりに危険な存在は居なさそうだし、ここでキャンプしてはどうかと。

「え、ここに……」

「ヒルチャールたちの家を使うのは抵抗感があるかもしれないけど、野宿するよりは全然いいと思うんだ」

「うくん、確かにそうかも。ここで朝を待ったほうが、安全に帰るには確実かも……」

「どうだい？」

「……—うん、おじさん、そうしよっか」

腕組していたアンバーちゃんが顔を上げる。決まりだ。

「なら、一番清潔そうな家を使わせてもらおうとしようか。ちよつと見て回ってくるよ」

「お願い、おじさん。わたしはその間に、火を起こして晩御飯を用意しておくね」

そんなこんなで、僕はこのヒルチャールの拠点で、アンバーちゃんと一夜を過ごすこととなったのだ。

＝

「——あつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡ おつ、おじさん♡ おじさん♡ ああ♡ や、やめて♡ ずぼずぼしないで♡ どうして、こんな♡」

——で、アンバーちゃんの手料理をたらふく食べてから、僕はヒルチャールの家の中で、アンバーちゃんと真っ裸で抱き合っていた。

僕は床に胡坐をかき、アンバーちゃんの瑞々しく健康的な身体を抱っこして、ついさつきまで処女だったおマンコの中に、ずっぷりチンポをハメこんでいる。細い腰をガツシリ掴んでアンバーちゃんの身体を揺すってあげると、彼女はとても可愛らしい声で鳴いた。

「いあ♡ ん♡ あ♡ お♡ お♡ お♡」

「アンバーちゃん、おじさんのチンポ気持ちイイかい？ おじさんはアンバーちゃんのおマンコ、とっても気持ちイイよ」

「おつ、おじさん♡ これ、なに♡ わたし♡ おじさん♡ 何されてるの♡」

「これはセックスだよ。生ハメセックス。アンバーちゃんに、色々助けてもらったお礼をしてあげたかったんだ」

「せ、セックス？♡ それ♡ えっちなことだよね♡ そんな♡♡ どうしてわたし♡ おじさんとセックス♡ ——うう♡」

チンポで奥を小突いてやると、アンバーちゃんは僕の背中をぎゅうつと抱き締めて、白い喉をのけ反らせる。

僕はあくまでただのオッサンだが、「こっち」のほうには若干の覚えがある。アンバーちゃんは、困惑しながらも淫らに喘いでいた。幼さの残る少女の外見をしていても、彼女の身体はしっかりとメスなの

だ。

「おじさんっ♡ あっ♡ えっちだめっ♡ おチンチンだめっ♡」

「はははっ、そう言ってるけど、アンバーちゃんも気持ち良いんだよね？ アンバーちゃんのおマンコ、さっきまでギチギチだったのに、もうトロトロに絡みついてきてるよ？ おじさんのチンポ美味しいんだらう？」

「そんなことっ♡ ないいいっ♡♡」

アンバーちゃんは強情を張っているけれど、身体は正直だ。彼女は気付いているのだろうか。今さかんに腰を振っているのは、僕のほうじゃなくて彼女自身だということに。本能が命じるまま、アンバーちゃんは淫らに腰を使いだして、おマンコでも精一杯チンポに媚びている。

純粋なアンバーちゃんは、警戒心というものが皆無だったから、こういう体勢に持ち込むのは難しくなかった。夕食の席でさり気なくボディタッチしてセクハラしても、太ももや胸の谷間を視姦しても、彼女はニコニコ笑っていた。そんな無防備な調子では、今後いつ悪い男に騙され、ハメ堕とされるか分からない。そうなる前に、僕が僕のチンポで、僕の女に堕としてあげようと思ったのだ。

案の定アンバーちゃんは処女で、チンポを挿入されて最初は痛がっていたけれど、もうだいぶんこなれてきていた。生死の境を潜り抜けたことで、アンバーちゃんのみスとしての繁殖本能も昂っていたのだろう。彼女のおマンコは、初めての男である僕のチンポのカタチを覚えようと一生懸命だ。

「ほらアンバーちゃん、イヤイヤばかりしてないで、ちゃんとチンポを感じるんだ」

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ——お、チンポ？♡ あっ♡」

「そう、チンポ。君のおマンコに入ってるやつさ。これで君は、大人の女になったんだ」

「おっ♡ おんなっ♡ わたし、おじさんにつ♡ おんなにされたのっ？!♡」

「うん。だからしつかりチンポ感じなさい。ゆっくり突いてあげるか

ら、どう感じるか、ちゃんと言葉で言いなさい」

「——ああっ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ トントント♡ おくっ♡
トントンされてるっ♡」

「そこがポルチオだ。女の子はここで一番気持ち良くなれるんだ。最初は難しいけど、しつかり奥イキできるようになるまで、僕が教え込んであげる」

「——あっ♡ んいいいっ♡」

アンバーちゃんは歯を食いしばる。僕の背中にアンバーちゃんの爪が突き立って、線状に血がにじむ。その痛みも、今の僕にはチンポを硬くする興奮材料だ。

アンバーちゃんは処女を卒業したばかりだ。膣内を責めるだけじゃなく、乳首やクリなどの性感帯も刺激することを忘れない。特にクリトリスの刺激は、性感に慣れていないアンバーちゃんにも分かりやすいはずだ。アンバーちゃんには、このまま僕専用のメスになってもらうけど、彼女にもできるだけ楽しく気持ち良くなって欲しい。

「おじさんっ♡ そこっ♡ お股のとこっ♡ 指で押されるのっ♡
へんだよっ♡」

「ここはクリトリスっていうんだ。これからおじさんのチンポが無い時は、ここを弄ったりして寂しさを紛らわせなさい。そうやって、どんどんエッチな身体になっていこうね」

「ああっ♡ いっ♡ いっ♡ いっ♡ いっ♡ えっちな子に、なるっ♡ わたしっ♡ おじさんにつ♡ えっちな子にされちゃうっ♡」

「エッチなアンバーちゃんはとっても魅力的だよ。おっぱいもプルプル震えてとつてもエロいし、おじさんのチンポ、もう出ちやいそうだよ」

「で、でるっ?♡ なっ、なにがっ?♡」

「今から分かるよ、アンバーちゃん。おじさんのチンポから何かが出てきたら、お腹の奥にぎゅゅって力を入れるんだ。いいね?」

「うんっ♡ うんっ♡」

「その時に、おじさんのメスになるって約束するのを忘れないように」

「わ、わかったよっ♡ 約束するっ♡ メスになるっ♡ だからっ♡
もつと気持ちよくしてっ♡ もつとせつくす教えてっ♡」

抗いようのない快樂に負けたアンバーちゃんは、すごく魅力的だった。もう既に、明るく輝く太陽のようなアンバーちゃんの可愛さの中に、オスの欲望を煽るメスとしての色が混じり始めている。アンバーちゃんは僕のチンポによって、少女という蛹から、大人の女へと羽化していく。上気した肌も、琥珀の瞳に灯った暗い情欲の光も、何もかもがとんでもなくエロい。そんなアンバーちゃんを抱きしめていると、この子のお腹の中に、自分の種をまき散らして孕ませたいという欲求が抑えられない。

「うう……っ！ 射精する……！ 出すぞアンバーちゃん！ 一か月溜めた濃いザーメン、アンバーちゃんのお腹の中に全部出すぞ!!」

「だ、出してっ♡ 出してっ♡ 出してえっ♡」

「うおおおっ!! で、出るっ!! 特濃ザーメン出るっ!! 孕めっ!!
孕めアンバーっ!!」

「ああっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああああっ♡♡♡ んんうううう
うううっ♡♡♡ な、なんか出てるううううううっ♡♡ 入ってきて
るううううううっ♡♡♡」

「おっ！ おっ！ おっ！ 射精止まらねえ……!! 小便みたいに出
てる……!! マンコ締まる……!! いいぞアンバー……!」

サバイバルしていた一か月、僕はオナニーすらしていなかったの
で、金タマに溜まった精液の量は相当のものだった。まず塊のような
重たい精液がドボおつと大量に出て、それからびゆるびゆると、無限
に射精が始まった。アンバーちゃんのお腹の中で、僕のチンポが脈
打っている。彼女の可愛いおへそに手のひらを置くと、その奥でドク
ドクと精液が満ちているのが感じ取れた。そして、そんな僕の手
に、アンバーちゃんの小さな手のひらが重なる。アンバーちゃんの手は
柔らかく、とても暖かかった。

「おじさん……。これでわたしは、おじさんのメスになったんだよね
……っ！」

「そうだアンバー……。お前はこれからずっと、おじさんのチンポに

服従するんだ……」

「ん……」

僕の非道な宣告に対し、アンバーちゃんは返事をする代わりに、目を閉じて唇を突き出した。僕というオスに支配されることを、彼女は受け入れたのだ。僕はアンバーちゃんの桃色の唇に、僕自身の唇を与えてやる。アンバーちゃんとのファーストキスは、彼女が僕のメス穴に堕ちた記念の、誓いのキスになった。

(何だかんだ、この世界も悪くなさそうだな……)

僕はアンバーちゃんと唇を貪り合いながら、頭の中でぼんやりと考えていた。これだけ魅力的な女の子がこの世界にもいるなら、僕はその子たちと出会い、自分のチンポで彼女たちにメスとしての悦びを教えてあげるだけだ。

僕はそう決意しつつ、アンバーの——この世界における僕の最初のメスとなった少女の腰を強く抱き寄せ、彼女にさらなる快樂を教えるべく、再び腰を揺らし始めた。

|| ||

「ほらアンバー、朝だぞ。そろそろチンポから離れるんだ」

「んう ♡ んむう ♡ じゆるう…… ♡ おじひやま…… ♡ じゆるるう…… ♡」

「そんなにフェエラが気に入ったのか？ みつともないチンポ顔になって……。つい昨日まで処女だったって信じられないぞ？ ほら、朝になつたから出発しよう。チンポから離れて服を着なさい」

結局僕らは、ヒルチャールの拠点で一晩中セックスし続けてしまった。僕は一か月溜まったザーメンを、全てアンバーに吐き出して、子宮や膣の内部、白い肌に塗りたいかった。

ザーメンまみれになったアンバーは、太陽が昇ったというのに、まだチンポをしゃぶり続けている。その瞳には、大きなハートマークが浮かんでいた。

「町に到着したら、また嫌って言うほどチンポくれてやる。だから今

は出発するぞ?」

「んじゅ……♡ おじひやま……♡ おじひやま……♡」

「あくあ、仕方ないなあ」

慣れない世界にテンションが上がって、最初から少し飛ばし過ぎたかもしれない。やれやれと後頭部を掻きながら、僕は微笑んだ。

墮としたメスのカラダの面倒は、しっかりと見てやらなければならぬ。それが男の務めである。僕はアンバーをチンポから無理やり引きはがすと、彼女を仰向けに押し倒して、種付けプレスの体勢で、ぐずぐずになったマンコにチンポをぶち込んだ。

「はおおおお♡♡ おじひやまつ♡ ひゅごっ♡ おじひやまちゃんぽ♡ ひゅごしゅぎりゅよお♡♡♡」

アンバーのメス声が、再びヒルチャールの拠点に響き始める。

もう一泊くらいは、こうやってアンバーをハメ回してから出発してもいい。僕はそう思っていた。

こうして、僕のテイワットにおける生活は、本格的に幕を開けたのだ。

モンドの城下町と教会【アンバー調教】

「おじさま、紹介するね。この人はジン団長だよ。モンドを守る西風騎士団の代理団長で、とっても頼れる人なんだよ。——ジン団長、この人は、わたしが森で会ったおじさま。長旅をしていて道に迷っちゃったんだって」

「ほう……では、あなたも『旅人』というわけか」

アンバーが紹介してくれた金髪の凛々しい女性——ジン団長は、そうつぶやくと、僕の姿を上から下までじろじろと眺めた。僕が見ているのに気付くと、彼女はコホンと咳払いをして、僕に詫びた。

「すみません、不躰な事をしてしまいました。——……ただ、あなたのその服装は……」

「こちらこそ申し訳ありませんジン団長。一か月も森の中をさ迷っていたので、この通りボロボロのみっともない格好で」

「おじさまは悪くないよ！ おじさまの服を調達してからにしたほうがいいかなって迷ったけど、先にジン団長に話をしておいたほうが、身元も証明できるし、色々と便利だと思ったの、わたしが」
「なるほど、そういうことか」

アンバーの説明に、ジン団長は納得した様子で頷いた。

「もちろん、我々西風騎士団は、全ての民の味方だ。それが旅人であろうと関係ない。それに、アンバーが保証する人物なら安心だ。あなたの身元証明は、西風騎士団が引き受けましょう」

ジン団長は、こちらを安心させるような柔らかい微笑みを浮かべながら、落ち着いた声で宣言した。幸運にもアンバーという少女と知り合う事ができたが、この世界の戸籍も無い状態でどうしたらよいか、その不安が無いわけではなかったので、この展開は素直にありがたい。

「ジン団長、ありがとうございます。恩に着ます」

「なに、お互い様ですよ。……せつかくだし、騎士団の予備の装備を着られますか？」

「え、良いんですか？」

「まあ……そのほうが、我々としても」

ジン団長は言葉を濁した。だが確かに、いつまでもこんな半裸のオッサンに街中をうろつかれては、この街の治安を司っているであろう彼女には、都合が悪かろう。なので、僕はとことん騎士団の厚意に甘えることにした。

「良かった。——じゃあアンバー、彼の面倒は……」

「うん、わたしに任せて」

「頼む。彼が住むところも、見つけてあげてくれ」

「うん、それも私の家があるから大丈夫」

「そうか。………え？」

「じゃあ行こ！ おじさま！」

「おいおい、腕を引つ張るなよ」

アンバーは、僕の腕を抱え込むようにすると、部屋の外に引つ張っていった。

「私の家……？ 一緒に住むつもりなのか？ まさかな」

そして、騎士団のお古から適当に着るものを見繕ってもらい、どうにか身なりを整えた僕は、アンバーと共にモンドの街中に出た。

「それじゃあおじさま、改めて、この偵察騎士のアンバーが、西風騎士団を代表してこの街を案内してあげる」

「おお、頼むぞアンバー」

「ふふっ♡」

騎士団の建物を出ると、僕はアンバーの案内によって、このモンドの街の主要なスポットを見て回った。アンバーは、まるで僕の恋人のように、ニコニコ顔で腕を組み、肩に頬ずりしそうな勢いですり寄ってきていた。そんなアンバーに、僕は釘を刺す。

「おいアンバー、あんまり露骨に僕に近寄ったらダメだぞ」

「え……どうして？」

「そんな悲しそうな顔するな。——でも、お前の知り合いとかに見られたら、ちよっとマズいんだ」

「そうなの？」

そうなのだ。アンバーは既に僕のメスだが、あまり大っぴらにベタ

ベタとして、以前までの彼女を良く知る人間などに警戒されたら、それはそれで厄介だ。特にさつき会ったジン団長には見られたくない。——いずれ、彼女も僕のメスに墮とすためにも。

そこまで詳しく説明しなかったが、アンバーは素直に僕の命令に従った。腕を組んで密着するのをやめて、少し離れて前を歩きます。でも、彼女は時々僕のほうを振り返って、はにかむように笑う。——ああ、なんて可愛いんだろう。

湖に浮かぶモンド城とその城下町は、風神バルバトスに見守られているのだという。高台の上には、立派な城と大きな神像が見える。牧歌的なレンガ造りの街並みには穏やかな風が吹き、いくつもの風車が回っていた。

「アンバーちゃん、こんにちは。あら、その人はだあれ？」

「こんにちはおばさん。この人は、最近この街に引っ越してきた旅人さんだよ。わたしが騎士団代表として、この街を案内してあげてるの」

アンバーと共に街を見て回っていると、彼女は多くの住人に話しかけられていた。街の人にも慕われているのだ。それだけに、さつきの指示はやはり正しかったと思った。

下町に降りて、アンバーの行きつけの食堂や、雑貨屋などの基本的施設を見て回り、それから冒険者協会なるものにも案内された。

「星と深淵を目指せ！——あら、アンバーさん、こんにちは冒険者協会に御用ですか？」

冒険者協会は、モンド以外の全国に施設を置く組織だという。僕は別に冒険で身を立てるつもりは無かったが、受付のキャサリンという女性が美人だったので、登録するだけはしておいた。

「そうなの？ おじさまはきつと才能があると思うよ？」

アンバーはそう言うが、しばらく安全で文明的な場所で過ごしたい。この街から出て別の場所に行くとかそういうことは、もうちょっと落ち着いてから考えよう。

「それにしても、なんだかあちこち壊れてるんだな。まるで嵐でもあったみたいだ」

「うん……ちよつと前に色々あったんだ。その時も、おじさまみたいな『旅人』が、モンドの街を救ってくれたんだよ」

『旅人』……？ そう言えば、ジン団長もそんな感じの話を……」

「うん。その子はおじさんじゃなくて、蛸っていう女の子だけだね」
「ほう……」

突然この街に現れ、様々な問題を解決していった身元不明の少女。なんだか、気になるものがある。僕がこの世界に飛ばされてきたことと、何か関係があるのだろうか。

「はいっ、それじゃあここが、今日の最終目的地だよ！」

「——ん？」

アンバーに言われて、僕は顔を上げた。高台にある城にも訪れていない。まだまだ街の半分も案内してもらっていない感じがだ。それなのに最終目的地とはいったい。僕の目の前には、これと言った特徴の無いレンガ造りのアパートのような建物があった。

「……は？」

「えへへ……。私の、お家……」

この路地には人氣が無い。アンバーはつつつと僕に近寄ると、再び腕を組んで、胸の谷間を僕に押し当ててきた。

「そういうことか……。やれやれ……朝もチンポくれてやったろ？
もうお腹空いたのか？」

「うん……♡ おじさまチンポで、お腹いっぱいにして欲しいよ……♡」

発情したメスは、これだから仕方ない。だがしかし、アンバーにチンポの味を教え込んだのは僕なのだから、その責任は取らなければならぬ。アンバーが発散するメスのフェロモンにあてられて、僕のチンポもズボンの中でギチギチに硬くなっていた。

「わかったわかった。それじゃあお邪魔させてもらうよ。欲しがりなアンバーのマンコに、たっぷりチンポしてあげる」

「ふあ……♡ お願いします……♡ あ……でも……♡」
「ん？」

「お邪魔しますなんて言わないで……♡ ここは今日から、おじさま

の家なんだからあ……♡」

アンバーは、もうすつかり僕の可愛いお嫁さんだ。その潤んだ琥珀色の瞳を見ていると、チンポがイラついてしょうがない。僕はアンバーを、僕と彼女の愛の素で犯してハメ殺すべく、ひよいと彼女をお姫様抱っこに持ち上げると、一緒に玄関の扉をくぐった。

||

「あ、おっ♡ おっ♡ おっ♡ おっ♡ おじしやまチンポっ♡
しゅごいよおっ♡ おじしやまのおチンポっ♡ わたしのおマンコにぴったりいっ♡ ——んいっ♡♡」

「アンバーのマンコも凄いぞ！ 僕のモノを全部飲み込んで、吸い付いてくるっ！ 誰がご主人様なのか、ちゃんと覚えてるんだなっ！」

「——うんっ♡ おじしやまはっ♡ アンバーのご主人しやまっ♡
アンバーは、おじしやまのおんなで、メスなのおっ♡」

若い子は本当に覚えが早い。アンバーの乱れようは、ついこの前まで処女だったとは思えない。彼女はしつかり膣内で感じる術を習得し、ポルチオやGスポットをチンポで突かれる悦びを身に付けていた。

僕は今、アンバーの部屋の入り口の、玄関の扉のすぐ裏で、立ちバツクで彼女を犯していた。あれだけチンポを煽られて、オスがいつまでもガマンできるはずが無い。部屋のドアをくぐった瞬間、僕はアンバーをレイプした。玄関わきの壁に彼女を押し付けて、ホットパンツの隙間から強引にチンポをねじ込み、小柄なアンバーのつま先が持ち上がるくらい、乱暴に腰を打ち付けた。

「うおおおっ!! 出すぞアンバー!! 子宮で精液飲め!! 一滴もこぼすな!!」

「はいっ♡ はいいっ♡ だして♡ セーえき♡ おじさまのあついの♡ ちよーだいいっ♡♡♡」

「おおおおお——っ!! おっ!!! おおおっ!! おお……!!」

「——あっ♡ うっ♡ あああ……♡♡♡ 出てるよお……♡♡」

「ふう——ふう——ふう……。ちゃんとイケたか？ アンバー」

「うん……♡ わたし……おじさまチンポで……ちゃんと奥イキした

……♡ ……えへへ。嬉しいな……♡」

ちやんと躡けてやれば、メスはチンポに愛情を持つものだ。アンバーは幸福そうなト口顔で、子宮内部に広がる熱に震えている。僕はしばらくアンバーの尻に恥骨を密着させて、彼女と一緒に事後の余韻を味わっていた。

「おじさま……♡ おっぱいで挟めばいいの……？ こう……？ あっ♡ ぴくぴくしてる……♡ これがさつきまで、わたしの中に……♡」

「そうだアンバー。そのまま涎を垂らして、上下に擦るんだ。それで亀頭の先を舌で舐めたり、つついたり……そうそう、いいぞ……おお……」

「んちゅっ♡ ちゅうっ♡ おじさま気持ち良さそう……♡」

墮としたメスには、本番以外の性技も教え込む。服を脱ぎ捨てた僕は、アンバーの部屋の椅子に座り、まるで自分がこの部屋の主であるかのようにふんぞり返って、股の間に跪いたアンバーに、パイズリフェラ奉仕をさせていた。

アンバーの胸は、ちょうど僕の手のひらに収まるくらいのお椀型の美乳だ。発展途上で、迫力はやや不足しているが、そんな年端も行かない少女にエロいことをさせているという背徳感と征服感がたまらない。従って、僕のチンポはついさつき発射したにも関わらずガチガチだった。

アンバーは、自分の奉仕で僕が気持ち良さそうにしているのが嬉しいらしく、目だけで微笑みながら、口をすぼめて亀頭を吸いつつ、一生懸命パイズリしている。ああ、この子はいつか絶対孕ませよう。このおっぱいから、本当に母乳が出るようにしてやろう。この無駄な脂肪の無いお腹をぽっこりと膨らませ、僕の子どもを産ませよう。そう思うと、金タマの中で新鮮な精子がぎゅるぎゅると生産されていく。そして僕は予告無しで、アンバーの口内をザーメンまみれにすべく、欲望を解き放った。

「——きゃっ！——んうっ♡ あむっ♡」

突然びゅるびゅると噴き出てきた精液に驚いて、アンバーは一瞬亀

頭から口を離した。その瞬間に飛び散った粘っこいオス汁が、彼女の胸と顔を白く穢す。それでも、アンバーはすぐに亀頭にかぶりつき、ちゅうちゅうと音を立て、チンポをストローに金タマの中身を吸い出し始めた。

「ぐ………！ おお………！！」

僕は背もたれに体重を預け、椅子の肘掛を強く握りしめ、僕専用のメスとなった少女が与えてくれる、腰が溶けそうなくらいの快樂に打ち震えていた。

「……んくっ♡ ……んくっ♡ ……んくっ♡ ——ぷはあ……♡

ご馳走様、おじさま♡」

「ああ………」

「おじさまのチンポ、まだビクビクしてるよ。気持ち良かったね……♡」

アンバーは、そのリンゴのような頬をピトリと竿に当て、すりすりと愛おしそうに頬ずりしている。末恐ろしいと思わざるを得ない。ちよつと経験を積んだだけでこうなら、将来はどんなサクキュバスに成長してしまうのだろうか。せいぜい翻弄されないようにしなければなど、僕は苦笑した。

「え？ 可愛い女の子がいるところを知らないか？」

僕がそれについて尋ねると、アンバーは目を丸くした。

僕らは今、アンバーのベッドの上で、抱き合ってシーツにくるまっている。あれから僕は、この部屋の至る所でアンバーを犯し、部屋中に僕のザーメンの匂いをマーキングした。最後にベッドで正常位で繋がってから、今はピロートークの時間だ。

そんな時間にさっきの問いかけは、あまりにも露骨過ぎたかもしれない。アンバーは怒るかと思ったけれど、僕の予想に反し、彼女はしようがないなあと言って微笑んだ。

「おじさま、わたし以外の女の子も、わたしみたいにメスにしちやうつもりなんだね……♡ ……うん、分かってるよ。——え？ それは嫌

「だけど……わたしはもう、おじさまに逆らえないんだもん……♡ おじさまに、わたしの他にメスがいても、我慢するよ!」

アンバーはそう言うと、僕の胸にぐりぐりと額を押し付け、各所にキスをしてキスマークを付けていく。そしてどうやら気が済むと、僕の質問に答えはじめた。

「うくん……可愛い人……美人な人……。このモンドだと、やつぱりジン団長かなあ!」

やはりそうか。一度会っただけだが、彼女の容姿は抜群だった。アンバーもそうだが、鍛えられた騎士の身体は、引き締まっかけていて服の上からでもソソる。しかも「元素」というファクターがあるせいかな、単なる筋肉ダルマというわけでもない。奇跡的なバランスの上になり立つたスタイルだ。あの凛々しい顔をチンポで歪ませ、僕のザーメン中出しを懇願するくらいまで調教できれば、さぞ心地良いだろう。

「ジン団長はね、ああ見えて可愛いところもあるんだよ。あとはねえ、騎士団だとリサさんが美人で有名だよ!」

「リサさん?」
「うん、普段は図書館にいるの。おっぱいがすごく大きいの!」

ふむ、それは聞き捨てならない。

「あとは……クレーちゃんはいくら何でも小さすぎるし……騎士団メイドのノエルさんとか? ああ、あと西風教会のシスターさん。美人な人ばかりだよ!」

なかなか適格なところを突いてくる。メイドやシスターという単語は、それだけでオスの煩惱を煽る響きを持つ。何にしても、手近なところで騎士団や教会周辺を見て回るとしよう。

「ここから遠いけど、璃月にも美人さんが多いんだって!」

「璃月……それは?」

「モンドの隣の国で、岩神様の領地なの!」

アンバーの説明によると、そこにはモンドと違った文化があり、仙人などもいるそう。仙人……仙女か。こんな世界に来たからには、人間以外の美女を抱くというのも、男の本懐と言えるかもしれない。

このテイワットには、他にも雷神や氷神など、各種の「元素」にち

なんだ神が住む国々があつて、それぞれに特色ある文明を築いている
そうだ。

「なるほど……この世界も広いんだなあ。——ん？ アンバー？」

「……すう、……すう」

「寝たのか……」

各地の美女の話から、いつの間にかこの世界の様々な文物にまで話
が及んで、アンバーは喋りつかれてしまったようだ。考えてみれば、
出会った時にも一晩中ぶっ続けでセックスしたりもしたし、疲労がた
まっていたのだろう。アンバーの安らかな寝顔を見ると、僕も
段々眠たくなってきた。

「お休み、アンバー」

「ん……おじさま……」

そして僕は、アンバーの頭の下に枕代わりに腕を差し込むと、アン
バーを抱き包むようにして眠った。

||

数日後、僕はアンバーと一緒にモンドの高台にある西風教会の建物
にやってきた。前にいた世界では信仰とは無縁のところになっていた僕だ
が、この世界では、神様というのは実在する。それも、前いた世界よ
りも、もっと人々に身近な存在として。

初めて訪れた西風教会は、信仰の場らしい荘厳で清浄な空気に満ち
ていた。並んでいる長椅子には、熱心に祈りを唱える人が座ってい
る。煩惱の塊である僕などは、ここに長居すれば下手をすれば浄化さ
れてしまうかもしれない。そんな冗談めかしたことを思いながら、僕
はアンバーと共に適当な椅子に腰かけ、それとなく目当ての人物を探
した。

僕がここに探しに来たのは、バーバラちゃんという名のシスター
だ。その子はアンバーと親しくしている友達で、なんとモンドの「ア
イドル」として崇められているようだ。その「アイドル」というのは、
神の偶像とかいう意味でのそれではなく、歌ったり踊ったりする例の
アレだ。

まさかこの世界にもアイドルがいるとは思わなかった。しかもモ

ンドにファンクラブまで存在するというバーバラちゃんに、ぜひともお目にかかりたい。そう思って教会まで来たのだが、ちよつと探したけれど見当たらない。

「今日はいないのかな……？」

僕がそうつぶやいた時、何とその本人に、横合いから声をかけられた。

「西風教会にようこそ。——アンバー、久しぶり」

「あ、ば、バーバラ！」

「ふふつ、どうしてそんなに驚いているの？ あなたのリボンが見えたから、私に会いに来てくれたのかなって思って、話しかけちゃった。

——ねえ、最近騎士団をお休みしていたんですって？ 風邪だって聞いたけど、大丈夫なの？」

「う、うん、もう治ったよ。全然平気」

「私に言ってくれたら、治しに部屋まで行ったのに……」

アンバーは咄嗟に嘘をついた。彼女が数日騎士団の仕事を休み、僕がこうして教会を訪ねるまでに日数がかかったのは、その間、僕らはアンバーの部屋で、ほとんど一日中生ハメセックスを繰り返していたからだ。

その調教によって、アンバーはさらに僕のチンポにメロメロのメスになった。彼女は今も、何食わぬ顔で友達であるバーバラちゃんと会話しているが、その子宮内には、今朝注ぎ込んだばかりの僕のザーメンがパンパンに詰め込まれている。アンバーが太ももをモジモジとさせているのは、ホットパンツの下で、そのザーメンがマンコから染み出てきているからだろう。

初めて目にしたバーバラちゃんは確かに可愛い。アイドルというのも納得の容姿、スタイルだ。それにもまして、澄んだ声の響きが素晴らしい。でも、彼女は知らないのだ。風邪で休んでいた同年代の友達、僕というオッサンに部屋で一日中ハメ回され、チンポで泣かされはしたくないメス声をあげていたことを。大切な女友達の子宮の中に、新鮮なオッサンザーメンがうようよと泳ぎまわっていることを。

「あなたはアンバーの付き添いですか？」

「——ん？ あ、ああ、ええ。そうですよ」

いけないいけない。ついつい妄想にふけってしまっていた。僕は微笑みで心の中の煩惱を覆い隠すと、できるだけ人畜無害な顔でバーバラちゃんに自己紹介した。

「初めまして、バーバラちゃん。僕はこの間彼女に助けられた旅人です。今はアンバー……ちゃんの部屋で同棲していると公言するわけには

いくら何でも、アンバーの部屋で同棲していると公言するわけにはいかない。都合よくアンバーの部屋の隣が空き室になっていたので、僕はそこを借りることにしていた。

「あ……そうですか、あなたが。ジンから——いえ、ジン団長から聞いています」

バーバラちゃんは身体の前で手を重ね、ペこりと丁寧な頭を下げた。

バーバラちゃんは、元居た世界のナース服とシスター服を融合したような服を着ている。胸元には白と青の大きなリボンがあつて、袖がダボつとした感じで可愛らしい。スカートの下から伸びる華奢な脚も、真つ白なタイツで覆われている。とても清楚な雰囲気なのに、肩が丸出しになっているのが、そこはかとなくエロい。

彼女の目はサファイアのように澄んだ青で、淡い金色の髪は、両サイドでまとめられ緩くカールしている。僕と同じ人間だと考えるのもおこがましい、整った愛らしい見た目の美少女だ。——実に、チンポで墮とし甲斐のありそうな。

「あの……」

「——ん？ おっと、失礼。ちよつと考え事をして」

うくむ、この子を見ると、どうしても邪念が膨れ上がって誤魔化しきれないな。そもそも、友達の隣に座っている謎のオッサンという時点で、バーバラちゃんから見た僕の怪しさはマックスのはずだ。警戒心を抱かせないようにしないと。

僕は出来る限り快活を装って、明るい声でしゃべり始めた。

「いやあ、実は今日アンバーちゃんにここに連れてきてもらったのは、バーバラちゃんをお願いしたいことがあつたからなんです」

「私にお願い……？ 何でしょう」

「バーバラちゃんは、怪我人や病人の治療なんかもされると聞きました」

「はい、そうです」

バーバラちゃんは水の元素魔術による、怪我などの治療を得意とする。彼女が「アイドル」を目指したのも、モンドの人々に元気と癒しを届けたいと思ったからなのだろう。——そう、彼女は本当に純粋で優しい良い子なのである。だからこそ、僕のような人間に付け込まれる隙が生まれる。

僕は自分の表情を深刻そうなものに切り替えて、今度は出来るだけ沈んだ声で話した。

「実は……僕が森をさ迷っているところをアンバーちゃんに助けてもらったのは、さっきお話した通りなんですが……」

「はい」

「どうも、自分がどこから来たのか、自分がどこに住んでいた誰なのか、全く思い出せないんです」

「えっ……」

そう、実は僕は、このモンドに来る前の全てについて忘れてしまった、いわゆる記憶喪失者なのだ。——ということにしたほうが、色々説明が省けて良い。それにこうやって、目の前の優しい女の子の同情も買える。

「そうだったんですか……それは、辛かったですね」

バーバラちゃんが眉をひそめて表情を暗くしているのは、僕と違って演技ではない。目の端で彼女の様子をうかがいながら、僕はさらに嘆き続けた。

「帰る家がどこなのか……家族はいたのか……そんなことすら分からなくて」

「……………」

「もしかしたら、治療魔術の得意なバーバラちゃんなら、僕の記憶を戻してくれるかもしれないと思ったんです」

「……………」

バーバラちゃんが息をのむ音が聞こえた。優しい彼女は、目の前の哀れなオッサンのことをどう思ったのだろう。うつむいている僕には、彼女の表情は読み取れない。しかし、しばらくそうしていると、僕の前にすうつと誰かが近づいた気配がして、爽やかな風のような、清らかな水のような香りが、僕の鼻に漂ってきた。かと思うと、青い光が僕の周囲を包み、次の瞬間、僕の体内からふわっと活力が湧き起こって来た。

「……………どうですか？　いまかけられる魔術をかけてみたんですが」「う……………おお……………こ、これは……………」

これは凄い。治療魔術とはこういうものなのか。肌についていた細かい傷やシミが、嘘のように消え失せた。それだけじゃない。視覚も聴覚も以前よりクリアになった気がする。口の中にあった口内炎も取れた。そして、精力も完全回復だ。ズボンの下でチンポがギンギンになって、僕は咄嗟にそれを隠すため、よりおおげさにうづくまつた。

「ど、どうしたんですか？　治療魔術で、逆に苦しみだすなんて……………」

「う、うう……………！　頭がっ……………!!」

「頭が痛いんですか?!」

「割れる……………！　うああ……………っ!」

「おじさまっ!　おじさま大丈夫っ!」

機転を利かせ、僕はバーバラちゃんの動揺を逆に利用した。頭部を押さえ、さも苦しんでいるという振りをする。アンバーまでも、僕の迫真の演技を見て慌てふためいていた。

「はあ……………はあ……………はあ……………。ど、どうやらダメみたいです。全然何も思い出せない」

脂汗にまみれ、目の端に涙まで浮かべた僕に対し、バーバラちゃんは何か言葉をかけようとして、口に出せずに飲み込んだ。彼女の手は、胸の前できゅっと握りしめられている。彼女は僕の記憶喪失に対し、ある種の「責任」を感じ始めたのだ。

僕の背中をさすりながら、アンバーが言った。

「おじさま、今日は帰ろう？ きつと他に方法が見つかるよ。ごめんね、バーバラ、教会でうるさくしちゃって……。わたしたち、もう帰るから。おじさまは、わたしが面倒を見てるから、バーバラは気にしないで」

彼女に演技は求めているから素なのだろうが、今のアンバーの台詞は、まさにファインプレーだ。「気にしないで」と言ったところで――いや、言われればなおさら、バーバラちゃんのようなタイプは気に病むものだ。

僕は長椅子から立ち上がると、アンバーに支えられるような格好で、トボトボと教会の外に向かって歩いた。

そして、そんな僕の後姿を、バーバラちゃんはずっと見ていたに違いない。

記憶喪失を治す手がかりを見つけたと、あまり眠っていない様子のバーバラちゃんが、息巻いて僕の部屋を訪ねてきたのは、それから数日後だった。

蜘蛛に囚われた娘【バーバラメス墮ち】

「んう……♡ あ……♡ ふ……♡」

琥珀色の瞳の少女が、一人自室の椅子に座り机に突っ伏して、切なげな吐息を漏らしている。履いていたホットパンツは下ろされており、右の足首にかかっている。アンバーは股を緩く開き、下着に手を差し込んで、指でくちゆくちゆと秘部を弄っていた。

「あ……♡ あ……♡ あ……♡」

そうしていると性感が高まってくるが、どうしてもイけない。ひたすら下腹部の苦しい切なさが折り重なっていくばかりで、欲求不満が解消されることはない。絶頂までには高い高い壁があつて、一人ではどうしてもそれを越えられないのだ。

「おチンポ……♡ おチンポ欲しいよお……♡ おじさまあ……♡」

蕩けた声で相手を呼んでも、この部屋にいるのはアンバー一人だけである。彼女が呼んでいる「おじさま」は、今は隣の自室にいる。

耳を澄ますと、アンバーには聞こえる。壁を貫いて、アンバーではないもう一人の少女が、男に鳴かされている声。その声の主は、今のアンバーとは真逆に、叫んでも叫んでも許されることなく、止めどない絶頂に襲われている。イってもイっても終わりが見えない快樂の底なし沼に、全身をどっぴり引き込まれている最中だ。

「バーバラ……♡ ごめん……♡ ごめんね……♡」

墮とされている大切な友人に許しを請うだけの心が、アンバーには残っていた。しかしそれは束の間で、アンバーはすぐに、自分もあの子のように、おじさまに泣き叫ぶくらいイカされたいと思った。

「おじさま……♡ わたしにもおチンポしてえ……♡」

友人のイキ声を聞いて濡れそぼったマンコを、くちゆくちゆといじる。気持ちイイ。気持ちイイけどイけない。どんなにクリトリスをイジメても、Gスポットのあたりを指で引っ搔いてみても、おじさまが教えてくれた快樂には程遠い。

次はわたしの番だ。バーバラが墮ちたら、次はわたしがたくさんお

チンポしてもらおう。それからあとは、バーバラとおマンコを並べて、順番に繰り返し種付けレイプしてもらうのだ。そうすれば、とても幸せな気持ちになれるに違いない。アンバーは、ついさつき友人に許しを請うたことを忘れ、彼女も早くおじさまのメスになればいいの
にと思った。

||

「ふう、バーバラちゃん、ちよつと休憩しようか。イキ過ぎて疲れたよね?」

「——ふっ、——ふっ、——ふっ、——ふっ」

「あく、猿ぐつわは苦しかったかい? ごめんね。でも、バーバラちゃんが叫ぶからいけないんだよ? 大人しくするって約束できるなら外してあげる。——いいかい? うん、それじゃあ外すよ」

「——ぷはっ! ——はあっ! ——はあっ! ——も、もうゆるむてっ」

「ん? 許す? 何を許して欲しいの?」

「もうやめてっ、アソコぐりぐりするの、やめてえっ」

「アソコっておマンコのこと? ぐりぐりっこれ?」

「——あっ! おっ! うっううう~~~~っ!?!?」

「! もうやらあっ! いう~~~~っ!?!? ——あっっ!?!」

♡ おっっ!!♡ あうううっ!?!♡♡」

愛液でびしょびしょの白タイツ越しにおマンコをイジメてあげると、ベッドに拘束されたバーバラちゃんの腰がくねる。バーバラちゃんが僕の部屋を訪ねてきてから、もう何時間くらい経っただろうか。それからずっと、僕は彼女のおマンコに、僕好みのイキ癖を仕込んでいた。

僕が教会でついた嘘を信じたバーバラちゃんは、僕の記憶喪失を治す手がかりを見つけたと言って、図書館で探してきたらしい資料を両手いっぱい抱え、息を切らしてこの部屋にやって来た。そんな健気なバーバラちゃんを前にすれば、自分のメスに墮れたいと思うのは僕だけじゃないはずだ。

それに、バーバラちゃんは自分の意志で、自分の脚で僕の部屋の中

に入った。これはもう、レイプされても文句は言えないだろう。男一人で暮らしていると分かっている室内に、若い娘が一人で入ったのだから、それはセックスを同意したのと同じことだ。

僕はバーバラちゃんをベッドに押し倒した。「きっとこれでおじさまの記憶喪失を治してあげられます」と、僕に希望を語るバーバラちゃんの健気な励まし顔が、裏切られた恐怖と絶望に染まるのは、とても悲しかった。おかげで僕のチンポは、はち切れそうなくらいバキバキに勃起した。

「——た、たすけてアンバーっ、たすけてお父さん！」

僕はバーバラちゃんの両手両足をロープで縛り、それをベッドに結び付けて拘束した。彼女が元素魔術の使い手でも、その細腕ではロープを引きちぎることはできない。あとは僕の思うままだ。

「——いやあっ！ たすけてっ！ たすけてジン！ お姉ちゃん!!」

バーバラちゃんは、大声で助けを求めている。顔立ちや衣装と相まって、まさに囚われのお姫様っていう感じだ。

でもゴメンね、バーバラちゃん。アンバーは僕のメスだし、こんな下町の片隅には、きつとお父さんもジン団長も君を助けに来ないんだ。だから、君が頼れるのは僕だけなんだよ。それを今から教えてあげる。君が舌を噛んだりしないように、念のため猿ぐつわをかますけど、酷いことはしないから安心して。

僕はバーバラちゃんのスカートの下に手を入れると、彼女の心を解きほぐすため、優しく愛撫し始めた。

「——はあっ……、はあっ……、はあっ……——おっ、おじさま……もう……許して……」

そしてそれから数時間、僕のねちっこい責めを受けて、バーバラちゃんもだいぶ素直になってきた。猿ぐつわを取っても、最初みたいに叫んだりしない。弱弱い声で、繰り返す僕に許しを請うだけだ。可愛い泣き顔がとってもソソる。

ワンピース型のスカートがめくれあがっているせいで、バーバラちゃんの鼠径部まで覆う白タイツと、その下に透ける白いショーツが僕には丸見えだ。バーバラちゃんの清純さを象徴するようなその白

い布たちは、今はおマンコから染み出たいやらしい液体でぐしよぐしよに濡れている。僕はその液体を指で掬い取ると、バーバラちゃんの目の前に見せつけた。

「バーバラちゃん、ほら、糸を引いちやってるよ？　これは何だい？　おじさんに教えてくれる？」

「……っ」

「真っ赤な顔で目をつぶってもダメだよ。バーバラちゃんは治療師さなんだから、人間の身体には詳しいよね？　じゃあこれはなあに？」

「……ひつく……うう……」

「泣いてもダメ。バーバラちゃんと言えないならおじさんが言っただけ。これはバーバラちゃんのおマンコから漏れた、バーバラちゃんの愛液だよ。バーバラちゃんの身体が、おじさんとエッチしたがってる証拠さ。バーバラちゃんは、こうして無理やり男の人に触られて、エッチしたくなっちゃういやらしい子なんだ」

僕は厳しい表情で、バーバラちゃんに事実を突きつけていく。教会のシスターとして、アイドルとして街の皆から慕われているけど、本当のバーバラちゃんは、とってもいやらしいスケベな子なんだと。

でもバーバラちゃんには、まだ僕の言葉に抗う気力が残っていた。彼女は泣きながらも、ぶんぶんと首を振って否定する。

「違う……っ、違うよお……っ」

「うくん、強情だなあ。なら……」

「——ひっ♡」

「もうしばらくおマンコの刑だからね？　ちよつとだけ本気出すから、イキ死んじやったりしないですよ」

「ほ、本気？　そんな——やめ——あうううっ!?!♡♡♡」

僕はバーバラちゃんの股間に手を添えると、さつきより三割増しくらいのテクで彼女のマンコをイジメた。バーバラちゃんの腰はすぐに浮き上がり、手足を拘束するロープがギチリと鳴る。白タイツはもう太ももまでぐっしよりだ。実際、バーバラちゃんにはちよつとマゾっ気があるのかもしれない。やっぱりこの子も、僕のようなオスが

カラダを管理してあげないと危なっかしい。

「ひいつ♡おっ♡あうううっ♡♡やっ♡あっ♡あっ♡
あっ♡うううううううううう♡♡」

僕は右手で手マンしつつ、左手でバーバラちゃんの胸のリボンを解いた。そして彼女のワンピース型の衣装を脱がせていく。露わになった彼女のおっぱいは、アンバーよりも少し小ぶりだ。真っ白な肌に、ピンク色の乳首が映えている。僕は左手でバーバラちゃんのおっぱいを包むと、コリをほぐすように柔らかく愛撫し始めた。

部屋の中には、バーバラちゃんのメス声と、ロープとベッドのスプリングが軋む音が聞こえている。よく耳を澄ませば、その中にはおまんこから鳴るぐちゅぐちゅという音も混じっている。バーバラちゃんという最高の楽器を使って奏でるメロディは、僕のチンポをさらに煽り立て硬くする。早く挿入してあげたいけれど、それはバーバラちゃんももっと素直になっただらだ。

「いうううううううううううっ?!?!♡♡♡♡」

バーバラちゃんはイった。彼女は今日まで、絶頂という感覚すら知らなかったようだ。軽いオナニーすら、怖くてしたことが無かったのだという。そんな初心な子が、僕のようなオッサンの本気責めに耐えられるはずがない。バーバラちゃんは段々とイきやすくなり、しまいには僕が指でおまんこの内側をちよつと押すだけで、腰をビクンビクンと震わせるようになった。

「バーバラちゃん、おじさんこんなにエッチな身体の子は見たことがないよ」

「ハア……ハア……ハア……ハア……ハア……」

「バーバラちゃんも分かってきたでしょ？ バーバラちゃんはおじさんにスケベされるために生まれてきたんだって」

「……………くっ」

「欲しかったら欲しいって言ってごらん？ そうしたら、バーバラちゃんをもっと気持ち良くできるモノをあげるよ」

「……………」

しかし、さらに一時間くらい責めても、バーバラちゃんはまだ素直

になれなかった。彼女はきゅつと唇を引き結んで、僕から顔を背けている。言葉の端々から、彼女がジン団長の妹だということが分かったけれど、そうしていると、お姉さんと同じような気丈さも見て取れる。その気丈さを発揮して、バーバラちゃんは最後の最後で墮ちるのを堪えている感じだ。

「なるほどね……」

これは少し、方針を転換しなければならぬかもしれない。

僕は一旦バーバラちゃんから手を離すと、着ていた服を脱ぎ捨てた。

「な……に？ それ……」

バーバラちゃんが目を見開いたのは無理もない。教会でだけが人の治療に当たる彼女でも、臨戦態勢になった男のペニスを目撃したことは無かったはずだ。ズボンから解放された僕のチンポは、腹にくつつくくらい反り返り、目の前のメスに早く挿入させろと訴えるかのように、粘っこいカウパーを垂らしながらズクンズクンと脈動していた。「バーバラちゃんのおマンコにぶつ刺して、二人で一緒に気持ち良くなるためのものだよ」

「おチンチン……？ そんな……そんな大きいの……」

「違うよ、チンポさ」

バーバラちゃんはいいつから目を離せないでいる。それも仕方ない。彼女は天性のメスの素質を持っている。勃起したオスのチンポを見せられて、身体が発情しないわけがないのだ。

「バーバラちゃん、こいつが欲しくなったらいつでも言うんだ」

「え……？」

「バーバラちゃんが挿れてくださいってお願いしたら、僕はいつでも挿入してあげる。欲しくなったら、『おじさんの女になるから、チンポ挿れてください』って、心の底からお願ひするんだ」

「そ、そんなの……お願ひするわけ……」

「どうかな？」

「……？ な、なにするの……？」

バーバラちゃんの表情が、より深い恐怖に染まる。僕がバーバラ

ちゃんに、黒い布で目隠しをしたからだ。

僕はバーバラちゃんのおへその下に手のひらを置いた。僕は手のひらで彼女のお腹を温めながら、ごく柔らかい動きでマッサージし始めた。

「……………?! — あっ!♡」

そのまま、お腹や腰、太ももを、ゆつくりとした動きでマッサージする。段々とバーバラちゃんの様子が変わり始めた。

「な——につ、これっ♡ おなかのおくがっ♡ ——へんっ♡ ざわざわするっ♡」

手マンよりもずっと間接的で弱い刺激。しかし、彼女の性感帯だけでなく、身体全体の感覚を目覚めさせるような動き。血流を活発にし、リラックスさせ、触覚を鋭敏にさせていく。

「は——っ♡ あ——っ♡ んう——っ♡」

だが、直接的な愛撫が伴わなければ、バーバラちゃんは決していけない。内側に熱が溜まり、感覚が高まっていくだけで、それを放出する術が彼女にはない。彼女が絶頂するためには、自ら僕のチンポをおねだりする以外にないのだ。

僕はそうやって、さらに何時間もバーバラちゃんを責めた。

「はあ——っ♡ はあ——っ♡ はあ——っ♡ んうっ♡」

部屋の中はさつきよりも静かになった。バーバラちゃんの呼吸は荒いが、手マンしていた時のように滅茶苦茶に喘いではない。

「んっ——♡ はあ——っ♡ はあ——っ♡ はあ——っ♡」

僕も無言だ。バーバラちゃんが何か言うまで、僕も彼女に言葉をかけないことにした。目隠しされたバーバラちゃんは、ただただ、自分の肌の上を這い回る僕の手の感触に集中するしかない。

「——あっ♡ そ、そこっ♡ ——っ!」

太ももの内側を触っていた僕の手が、おマンコの近くを滑っていくと、バーバラちゃんは危うくおねだりしかけて口をつぐんだ。きつとおマンコやクリトリスを思いつきり弄って欲しいのだろう。そうして思いつきりイかせて欲しいのだろう。でもダメだ。これは僕とバーバラちゃんの根競べなのだ。

「——あっ♡——ひっ♡——ううっ♡」

バーバラちゃんの身体はポカポカに火照り、汗まみれになって輝いて見える。とつても美味しそうだ。これぐらいの「味見」は良いかと思いい、両腕を上あげたバーバラちゃんの腋を、べろりと舌で舐めてみた。

「——あううううっ♡♡♡」

バーバラちゃんはガチンと歯を食いしばり、全身を弓なりにのけ反らせた。危ない危ない。これでいきそうになるなんて、バーバラちゃんも相当キマってきている。もつと繊細に、羽でくすぐるように優しく扱わないと。

バーバラちゃんに突っ込む瞬間が待ち遠しくてたまらない。小ぶりなおっぱいの頂点では、ピンク色の乳首が僕に握りつぶして欲しそうにピンピンに尖ってぷるぷると震えている。きつとおマンコの中身も半熟卵の黄身みたいにとろとろだろう。

僕はそうやって、しっこく静かに丁寧に、バーバラちゃんの身体をほぐしていった。そして、窓から差し込む太陽が紅くなり始めたころ

「い、イかせてっ、イかせてくりやさいっ」

ついにバーバラちゃんは、朦朧とした瞳と呂律の回らない舌で懇願しだした。

バーバラちゃんの身体はどろどろで、ベッドシートはバーバラちゃんの体液でぐちよぐちよだ。汗に涙に愛液に——ひよつとしたらおしっこも混じっているかもしれない。

「おじひやまっ、おマンコ」いじってくりやさいっ」

一度口にしてしまったら、もう後戻りできない。皆のアイドルであるバーバラちゃんは、涙まみれの顔で、とつても無様に僕におねだりを繰り返した。

「おじひやまっ♡ バーバラのおマンコにつ、おじひやまのゆびをくりやひやいっ♡ いっぱいぐりぐりして、イかせてほしいのおっ！

♡」

「……指じゃだめだよ。分かってるでしょっ？」

「——ひっ——ぐっ」

「……言えないなら、続きをしようか。安心して、バーバラちゃんが素直になれるまで、僕は何日でも付き合っただけあげる」

「そ、そんなにやっ、——あっ♡」

僕はマッサージを再開した。バーバラちゃんは、ようやく下半身が快樂の泥の中に浸かったというところだろうか。しかしここで手を緩めてはならない。頭のとっぺんまで完全に、二度と浮き上がれないように徹底的に沈めなければ。

「おねがいひまひゅっ♡ いかひえてっ♡ バーバラをいかひえてえっ!!♡♡」

バーバラちゃんが泣こうが喚こうが、僕は耳を貸さない。「チンポをください」の一言があるまで、絶対に許さない。ごめんねバーバラちゃん。これは君が立派な僕のメスになるために必要なことなんだ。全部君のためなんだ。だからどうか、厳しいおじさんを許してほしい。

「つらいのっ♡ ——もうむりっ♡ イきたいよおっ♡ ——うぐっ、ぐすっ。おじひやまあっ♡ たすけてえっ♡」

そうだ。君が頼りにできるのは僕だけだ。お父さんもジン団長も助けに来ない。君を助けられるのは僕だけだ。だから、身も心も僕にゆだねるんだ。

「ああっ♡ おじひやまっ♡ おじひやまっ♡ おじひやまっ♡ おじひやまどこっ♡ なんりえ何も言っくりえないのおっ♡ おじひやまあっ♡ バーバラをたしゆけてえっ!!」

そして、さらに時間が経ち、バーバラちゃんが泣き叫び疲れたころ、僕は彼女の目隠しを解いてやった。

「あ……っ♡ おじひやま……♡」

脳をぐずぐずに蕩かされた彼女の目には、僕の姿が親鳥のように映っていたのだろうか。バーバラちゃんは潤んだ瞳を輝かせると、僕が差し伸べた手に頬ずりしてきた。——その瞳と、親愛の情が籠ったその仕草を見れば分かる。もう彼女の心は折れ、堕ちていた。

「——はう……♡ おじひや、おじさま……♡」

「なんだい、バーバラちゃん」

「バーバラに……おじさまのおチンポください……♡」

「よく言えたね。良い子だよ、バーバラちゃん」

「おじさまぁ……♡」

素直になつたバーバラちゃんは、前にも増して魅力的だ。少しだけ幼くなつたみたい、ゴロゴロと僕に甘えてくる。待っててね。ご褒美に、今すぐチンポをおマンコにぶっ刺してあげるからね。僕はバーバラちゃんを拘束していたロープを解いてあげると、彼女の白タイトの股間部分を引き裂いた。

そして僕は、バーバラちゃんのおマンコに膨れ上がった亀頭をあてがった。十分に濡れているとはいえ、ぴっちりとしじが閉じた清らかな乙女の秘所と、僕のグロチンポはどう見ても不釣り合いだ。バーバラちゃんは胸のあたりできゅつと拳を握りしめ、目をつぶつて震えた。

「怖いのかい？ バーバラちゃん。怖かつたらおじさんの身体に抱き着きなさい。心配いらぬよ。ちよつとだけ痛いかもしれないけど、すぐにヨガらせてメスにしてあげるからね。いくよ——」

僕はバーバラちゃんのくびれた腰を掴むと、僕のほうに向かって引き寄せた。チンポとマンコがキスをする。バーバラちゃんのスジマんに、僕のグロチンポの先がめり込んでいく。暖かい。

「うあ……いつ——」

「おお……」

僕は思わずうなつていた。処女マンに半ば無理やり亀頭をねじ込む瞬間というのは、どうしてこんなに心が満たされるのだろう。バーバラちゃんの眉を寄せた痛そうな表情も、彼女が現在進行形で僕のメスになっている証だと思ふと興奮する。油断するとすぐに射精してしまいそうだ。

「はあ——っ♡ はあ——っ♡ はあ——っ♡」

バーバラちゃんは痛みを耐えるように深い呼吸を繰り返す。それでも、何時間も執拗に前戯したおかげで、僕のチンポは少しずつ彼女の中に入つていった。入り口はともキツイが、中はふわとろの極上

マンコだ。このマンコにも僕のチンポを隅々まで覚え込ませて、僕無しでは生きられないカラダにしてあげよう。

バーバラちゃんのマンコの具合を堪能しながら少し進むと、亀頭が何か障害物に行き当たった。奥でもう一度狭くなっているような感覚は、彼女の処女膜だ。

「バーバラちゃん、おじさんのチンポが、バーバラちゃんの処女膜に届いたよ」

「ハア……♡ ハア……♡ そ、それって……」

「そういうこと。おじさんの女になる瞬間を、よく味わってね」

「——あつ！♡ ——んっ！ ぎい……っ！」

「ああ……！ 分かるかいバーバラちゃん……！ チンポがメリメリって、君の膜をこじ開けてるよ……！ 分かるだろう……！」

「——！ ——！」

バーバラちゃんは、シーツを掴んで苦しそうに悶えながらも、僕の問いかけに首を何度も縦に振った。僕はことさらゆっくりと腰を前に進め、少女から女になっていくバーバラちゃんの様子を凝視して、心のアルバムに刻み付けた。

「バーバラ」

「……はい、おじさま」

今やこの世界における僕の二人目のメスとなったバーバラは、はらはらと涙を零していた。彼女はもう処女じゃない。女の子にとって一番大切なものを、彼女は僕に捧げたのだ。彼女の涙は、無垢な少女であった自分への別れの涙だろう。

「動くぞ」

モノにしたメスには、それに見合った喜びを与える。それが僕のポリシーだ。僕は、処女喪失して裂傷を負ったバーバラの膣内が、これ以上傷つかないよう気を使いながら、ゆっくりと腰を前後させはじめる。彼女のマンコを僕のチンポになじませ、膣内でメスイキできるように準備を整えてやるのだ。

「——んっ、——んっ、——んっ、——んっ」

バーバラの表情を見つつ、ペースを考えてやる。ごくごくスローな

ピストンなら、今の彼女でもさほど痛みなく受け入れられるようだ。そうやって腰を振りつつ、結合部の上でむき出しになっているクリトリスを愛撫してやる。それを根気よく続けていると、バーバラの声に甘い音色が混じり始めてきた。

「——あつ♡ ——んうっ♡」

「バーバラ、おじさんのチンポで感じてるのか？」

「わ、わかりませんっ♡ でも、なんだかつ♡」

「腰が浮いてるよ？ もう膣内で感じられるようになったんだね。やっぱりバーバラはスケベな子だ」

「ち——ちがつ♡ 私——っ♡」

「いいんだよ、もつとスケベになりなさい。ありのままの自分を受け入れて、素直になるんだ。そうすればもつともつと気持ち良くなれるからね」

「そ、そうなんですかつ♡」

「そうさ。だから正直に、どこがイイのか言っごらん」

「は、はいっ♡ ——んああつ♡ ——そ、それっ♡ いまおじさまのおチンポにひつかかれたところっ♡ なんだかつ♡ ビリビリきますうっ♡」

ピストンはゆっくりでも、女の子に快感を与えることはできる。僕はバーバラが感じる部分を探り当て、そこを重点的に亀頭で突き、力りでかき削った。さらに数十分後には、バーバラは、立派にオスのチンポでヨがるメスへと成長していた。

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡ おじさまっ♡ おじさまっ♡」

自分が気持ち良くなれる角度を模索していたらそうなったのだろう。僕の腰振りに合わせて、バーバラちゃんは自分でも腰をくねらせ始めていた。シーツを握りしめていた手は、縋り付くように僕の首の後ろに回されている。

「おじさまっ♡ おじさまっ♡ ——何かヘンですっ♡ 奥がつ♡

ぞわぞわしてっ♡ 何か、何か来るっ♡ 今までのと違うっ♡」

「いいぞバーバラ！ 我慢するな！ そのままイけ!! 膣イキしろっ!!」

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡ こ、こわいよおつ♡ おじさま♡ 私、こわいつ♡ ぎゅってしてっ♡ バーバラのこと抱き締めてっ♡」

「ああー、もちろんだ！」

「あつ♡ あつ♡ あつ♡ ああ……っ♡ ダメえ……っ♡ これ、絶対にダメだよ……っ♡ おじさまに無理やりえっちされてるのに……♡ 抱き締められて安心しちゃう……♡ おじさまの背中、おつきくてたくましいよお……♡ ダメエ……♡♡」

「バーバラ！ 子宮降りてきたぞ！ もうイクんだな!! いいぞ、このままアクメしろ！ 僕もお前の子宮の中に、ザーメンたくさん出してやるぞ!!」

ザーメンという単語の意味を、彼女が理解したのかどうかは分からない。でも、バーバラの脚は、まるで本能に命じられたように僕の腰に絡みつき、マンコも激しい収縮を始めた。僕らは恋人のように抱き締め合って、一緒に果てに向かって昇り詰めていった。そして、ひときわ強い力でバーバラのマンコが締まったと思うと、彼女は今までよりもオクターブ高い声で絶叫した。

「イ、くうううううっ~~~~~~~~っ!!!♡♡♡♡♡」

「僕も出す！ 出るぞバーバラ!! おおおおおっ!!!」

「ハア——っ♡ いっ♡ ~~~~~♡♡♡♡♡」

僕の遺伝子情報が、聖女のように清らかな乙女の中に吐き出されていく。ぴゅっぴゅと遠慮しがちにではなく、どぼどぼ、どぼどぼと無遠慮に、まるでその白濁で、彼女の魂を自分の色に染め変えようとしていているように。

「おじさまが……♡ おじさまが入ってくる……♡ 私の中に、おじさまが……♡」

バーバラは目を見開いて、熱に浮かされたように繰り返していた。瞳の奥では、いくつもの星がチカチカと瞬いている。彼女もこれで理解しただろう。今日から自分の主人が誰になったのか。彼女が持てる慈愛や献身の心を、誰に捧げるべきなのか。

射精が終わると、僕はバーバラにチンポをハメ込んだまま、彼女の

顎を手で持ち上げた。するとバーバラは当然のように、唇を突き出してキス顔になる。

「ん……♡　ちゅ……♡　ハア……♡」

バーバラは僕に誓いの口づけを捧げた。

今日から彼女は、西風教会の牧師ではなく、モンドの人々のアイドルでもなく、僕だけの女になったのだ。

簡単なお仕事【アンバー&バーバラ調教】

森のサバイバル生活を抜け出して、モンド城の城下町に住むようになってから2週間くらい経過した。僕はその間、メス堕ちさせた二人の美少女——アンバーとバーバラを精力的に調教していたのだが、自分よりずっと年下の彼女たちのヒモになっているだけでは、なんとなく格好がつかない。そこで、生活資金を稼ぐための方法を探してみることにした。

それをアンバーに話してみると、「だったら冒険者がいいよ！　ね、そうしょ！」と彼女はしきりに僕に勧める。どうやら、アンバーは初対面の時に、僕が彼女をヒルチャールから助けたことを覚えていて、僕に冒険者の才能があると思込んでいるようなのだ。

僕としては、室内で安全な事務仕事なんかをしたかったのだが、僕にはこの世界の文字すら読めない。——そう言えば言葉が通じているのはどうしてだろうと思っただけで、そこは僕をこの世界に放り込んだ例の「神」か何かが配慮してくれたんじゃないだろうか。とにかく、僕にできそうなのは身体を使う仕事だけだったので、アンバーの進める冒険者というのは、案外妥当なのかなと考えなおした。

それに、オツサンが部屋に引きこもって、毎日のように少女を連れ込んでいる状態は悪目立ちする。今後のためにも、僕に冒険者としての適性があるのかどうか試しておこう。そう思った僕は、冒険者協会のキャサリンさんに仕事を斡旋してもらい、久々に城下町の外に出てきたのだ。

しかしもちろん、仕事といっても大した奴じゃない。スイートフラワーとかいう、そこら辺の野原に自生している花を集めてくるだけの簡単な仕事だ。この花は、料理とかに日常的に使われているのだそうで、食堂や道具屋なんかに卸すため、いつでも必要とされているのだという。

「いやあ、改めて眺めてみると、なんていうか感動的な風景だなあ」

「風立ちの地」という場所からさらに北に行った高台の上に、僕はキャンプを張っていた。午前中いっぱい歩き回ったお陰で、既にス

イトトフラワーはそれなりの量を集めることができた。今はキャンプに戻り、休憩がてら、湖に浮かぶモンドの城を眺めている。その後、後に広がる雄大な自然といい、元居た世界では決して見られない光景である。

「バーバラもそう思うよね？」

「——あつ♡ はっ♡ はいっ♡ おじさまっ♡」

「こちらこちらバーバラ、適当に返事するんじゃない。チンポばかり感じてないで、ちゃんと景色も見るんだ」

「——あつ♡ あつ♡ あつ♡ あつ♡ そ、そんなっ♡ 無理っ♡」

「仕方ないなあ……。ああ、そろそろザーメン出すよ。子宮で飲んで。

——うっ!!!」

青空の下で雄大な自然に囲まれて、僕専用の美少女のメス穴に射精する——なんて贅沢な時間だろう。

言い忘れていたが、僕は一人でここに来たのではない。アンバーとバーバラの二人も一緒に連れてきていた。今は丸裸にしたバーバラを四つん這いにし、バックから突いて性処理オナホになってもらっている真っ最中だ。

「ハア……。♡ ハア……。♡ ハア……。♡ またナカに出されちゃった

……。♡ どうしよう……。♡ バーバラ、おじさまのおチンポで出されるたびに、エッチな子になっちゃってる……。♡ ——んうっ♡ ——

あ♡ 抜けちゃう……。♡」

バーバラからチンポを抜くと、「ちゅぽん♡」といういやらしい音がして、マンコの入り口が閉まる。バーバラのマンコは、初めて犯した時と変わらない瑞々しい外見を保っている。その割れ目から、僕の濃厚オス汁がドロリと垂れてくる様子は、この雄大な自然に勝るとも劣らない絶景だ。

墮としてから徹底調教したおかげで、バーバラのマンコは、もうすっかり素直に僕のチンポを受け入れるようになっていた。それどころか、マン肉がむちゅうつと媚びるように吸い付いてきて、いったん挿入したらなかなか離してくれない。

「こんなお外でえっちなんで、おじさま最低だよ……。誰かに見ら

れちゃったらどうするの……?」

「ははは、こんなところに誰も来ないよ。それに、そんなこと言ってるくせに、バーバラも興奮してただろ?」

「違うもん……♡ —— あ……♡ おじさまのおチンポ汚れてる……♡ お掃除するね♡」

草地に座ったバーバラは、僕のほうに向き直ると髪をかき上げ、まだバキバキにそそり立っているオスの象徴に舌を這わせ始めた。僕は慈しむ表情で、立派なメス奴隷に成長したバーバラを見下ろし、彼女の頭を優しく撫でた。

「れー……っ♡ れろ……♡ んちゅう……♡ おチンポ、すっごいビクビクしてる……♡ バーバラのおマンコにいっっぱい出したのに、まだ足りないの……?♡ しょうがないおチンポだね……♡」

バーバラは、チンポに優しくあやすように話しかけながら、丁寧な舌の動きで竿や亀頭、カリの段差に付着した体液を舐めとっていく。その仕草は、自分を支配するチンポへの尊敬と忠誠、愛情に満ちていた。

「うおお……! バーバラ、もう一発出そうだ……! 顔にぶっかけていいか……?」

「——ふふ♡ 許可なんかなくても、どうせかけるんだよね♡ ——ちゅう♡ ……本当は、アイドルの顔にせーしなんかかけたらダメなんだよ? でも……おじさまのせーしなら、いいよ♡ ちゆるう……っ♡♡ 手でしてあげるから、だしていいよ♡ だしちやえ♡」
「ああ……金髪美少女に手コキされながら亀頭吸われるのやべえ! 出る……! ぶっかけるぞバーバラ! ——ううっ!!!」
「ぎゃあっ♡」

ほびゆつと音を立てて発射されたザーメンを、バーバラはその綺麗な顔で受け止めた。屋外射精の解放感に促され、次から次へと精液が出てくる。バーバラは草地にザーメンが落ちないように、両手を受け皿にし、あくんと口を開けていた。

こんな清らかで優しい子を、自分の黄ばんだオス汁で穢す背徳感。性について何も知らない天使のようだったバーバラを、ここまで自分

好みに調教したという達成感と征服感。それだけでももう無限に射精できる。バーバラの手に乗りきらなかった精液は、彼女の胸の谷間を汚し、お腹の周りに降りかかり、正座している太ももへと落ちていく。「はあっ——はあっ——はあっ——」

「おじさま、もう出ない？ 射精お疲れ様でした♡ じゆる……♡」
「ああ……バーバラが僕のザーメン飲んで……！ えつろ……！」

バーバラは僕が見下ろしている前で、手のひらにこんもりと載ったザーメンを飲んだ。それから身体に付着した分まで指で掬い、可愛い舌でペロペロと舐めとっていく。しかし、バーバラの小さなお腹に収まりきるには、僕の精液は大量過ぎた。彼女はなんとか全てを飲み切ると、愛らしいげっぷをした。

「けふっ……。やだ、恥ずかしい……」

「バーバラ！ バーバラ！」

「きゃっ！ お、おじさま、また興奮したの？ 一回休憩しよっ？」

「我慢できるわけないだろ！ バーバラがエロ過ぎてチンポ破裂しちゃうだー！」

「もう、しょうがないなあ……」

僕はバーバラに正面から挑みかかり、ふんふんと鼻息を荒くして、彼女の胸に顔を埋めた。そして柔らかいおっぱいを揉みながら頬ずりする。バーバラは僕を受け入れるように、慈愛に満ちた仕草で僕の頭を抱きしめた。

そんな風に、僕らがモンド城の見える高台でいつまでもイチヤイチャとサカリ合っていると、周囲の見回りに行っていたアンバーが戻って来た。

「あく、おじさまったら、またバーバラとエッチしてる……」

「あ、おかえりアンバー」

「——あっ♡ あっ♡ あっ♡ おじさまっ♡ すごいよおっ♡」

「バーバラ気持ち良さそう……。バーバラもすっかりおじさまのメスだね」

「アンバーも混ざりなさい。二人並べてハメてあげるよ」

「うんっ♡」

アンバーはぽいぽいとその辺に服を脱ぎ捨て、僕とバーバラのセックスに途中参入した。晴れた屋外での、美少女との生ハメ3P。前の世界なら警察がうるさくて中々できないが、テイワットならば滅多なことでは問題にならない。この世界に来て良かったと改めて思いながら、僕はバーバラのマンコでチンポを抜きつつ、アンバーに全身をペロペロと舐めてもらった。その後は、四つん這いにした二人のお尻を並べてマンコ比べだ。

「二人ともすべすべのお尻だね。おマンコもとっても美味しそうで、どっちから食べようかおじさん迷っちゃうよ」

「え〜！そこは当然わたしだよ？わたしはバーバラがおじさまにエッチしてもらってる間、ちゃんと偵察してきたんだよ？——

あっ♡ おじさまの指っ♡ おマンコくちゅくちゅされてるっ♡」

「アンバーのマンコは、指が千切れそうなくらいぎゅうぎゅうで、ほじり甲斐のあるキツマンだし……」

「おじさま♡ バーバラのアイドルおマンコ気持ちイイよ♡ アイドルなおじさまのメスにされちゃったエッチなおマンコ♡ まだまだ全然セーし出され足りないよ♡ ——んうっ♡ おじさまの指、太くてゴツゴツ……っ♡」

「バーバラのマンコはふわとろで、子宮口がしゃぶりついてくるのが気持ちイイしなあ……うくん、迷うなあ」

僕は両手を使い二人を同時手マンし、最初にどっちにハメようか悩んだ。どっちも甲乙つけがたいハメ頃マンコだ。アンバーとバーバラはメス声の二重奏を奏でながら、「ぜひとも私を先に使ってください♡」とお尻を振り、僕をいやらしく誘っている。マンコの上では綺麗なお尻の穴がヒクヒクと疼いていて、どうせならここも使いたい。

僕に突っ込んでもらいたがっている穴が四つ。しかし結局、僕のチンポは一本しかないのだ。

「決めた、最初はアンバーから使ってあげる。」

「やったあっ♡ たくさんおチンポしてね♡」

「むう〜」

「ほら、バーバラもむくれない。順番にチンポしてハメ殺してあげるから、それまでおじさんの指チンポで我慢するんだ」

「——!!♡♡ ——ひあっ♡♡ あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

「おじさまっ♡ わたしにも早く……♡ ——あっ♡♡ チンポきたあっ♡♡」

それから僕らは人間であることを忘れて、三匹の動物になりきって交尾しまくった。アンバーに一発目の精液を注いだあとは、すぐにバーバラのマンコにチンポを挿入する。僕のチンポはどっちかのマンコに入りっぱなしだ。

二人のマンコに交互に入れて、その味の違いを楽しんだあとは、アンバーを草原に仰向けに寝かせ、その上にバーバラを四つん這いにさせた。密着させた二人のおマンコのあいだにチンポを挟めば、美少女とチンポのサンドイッチの出来上がりだ。恥丘と恥丘のあいだをズリズリと往復して射精し、二人の滑らかな肌を同時に穢したかと思えば、気まぐれにどっちかのマンコに挿入する。快楽で脳が蕩けた二人は、やがて互いに舌を交わらせ、両手の指を絡ませて、さらなる友情を深めていた。

そんな楽しい青空セックスも、日が傾いてくれば、残念ながらお開きだ。モンドの気候は穏やかだが、夜まで裸で外にいれば、流石に冷える。夕食もとらなければならぬ。僕らは着替えるため、テントの中に移動した。

「それでおじさま、冒険者はやっていけそうかな?」

「うーん、どうなんだろうなあ。戦闘も素人だし、あまり自信は無いなあ」

「えー、そうかなあ。今日もスライムを一人で倒してたし……初めてであれだけ戦えるなら、わたしは絶対向いてると思うな」

「うーん」

夕食後、僕らは焚火の周りで食後の雑談をしていた。倒れた木に腰を下ろす僕の両隣に、アンバーとバーバラが座っている。二人ともすっかり僕に信頼を寄せたように、僕の肩に頭を預けるようにしていた。アンバーとバーバラはフル装備ではなく最低限の衣服だけ身に

着けているので、そこかしこで肌が触れている。この服の下には、さつきまで僕が犯しまくった身体があるのだなあと思うと、全裸よりもかえってエロい気さえした。

それはともかくとして、アンバーはやっぱり僕に冒険者をやらせたいようだ。

「本当は、わたしと同じ西風騎士団に入ってほしいんだけど……」

どこから来たのか分からない旅人では、それは困難だろう。しかし、僕の少し前にモンドに現れた「蛍」という女の子は、色々と功績を残して「荣誉騎士」の称号までもらったそうだ。でも、僕がそうなれるとは思わない。

僕が煮え切らない表情をしていると、バーバラが提案した。

「じゃあ、私と一緒に西風教会で働くのはどうかな」

「教会かあ……」

それはさらにどうかと思う。僕は風神バルバトスの信者ではない。なのに教会で働くというのは、信義というものに欠ける気がする。

「おじさまって、そういうのを気にする人だったんだ……ちよつと意外。じゃあ、私のマネージャーとして働くのは？」

「マネージャー？」

「うんっ。前からやってみたかったんだ。皆に元気を届けるために、テイワットのあちこちを旅して歌を届けるの。そしたら手伝ってもらう人が必要でしょ？」

バーバラは僕のメスになったけれど、歌でみんなを癒したいという思いは失っていない。本質的には、彼女は清らかな天使のままだ。そして今の彼女の提案は、つまりアイドルの地方巡業——ドサ回りというやつか。それは悪くないかもしれない。バーバラが圧倒的に可愛いのは事実だし、上手くやれば路銀を稼ぐのは難しくないだろう。西風教会に所属する彼女と一緒になら、あちこち移動する口実も立つだろうし、そこにアンバーも護衛として来てもらえば……。

「おじさま、何を考えてるの？」

「……………」

「バーバラ、おじさま黙っちゃったね」

「うん……」

しかし、教会のお偉いさんとかは許可してくれるだろうか。それにアンバーは比較的自由なようだが、バーバラは良いところのお嬢様らしい。彼女の家族が許すとは思えない。——あれ？ そういえば、バーバラのお姉さんって……。

「——ん？」

ズボンを触られる感触がして、僕は思考を中止した。股間を見下ろすと、両隣に座っていたはずのバーバラとアンバーが僕の股の間に動き、ベルトを外してズボンを下ろしにかかっていた。彼女たちのしたようにさせていると、下ろされたズボンからぼろんと肉棒が零れ出す。アンバーが感心したように、もしくは呆れたように言った。

「おじさまのおチンポ、ふにやふにやだね。いつもおつきいから、この形は初めて見るかも」

「——あつ♡ でも、もう大きくなってきたよ、アンバー」

それは仕方ない。美少女二人に至近距離から眺められれば、勃起するのは当然である。

「ははは、せつかくだから、二人で一緒にしゃぶってみるかい？」

「うん……♡」

「はい♡ おじさま……♡」

そして、アンバーとバーバラによる、ダブルフェラ奉仕が始まった。ムクムクと大きくなっていくチンポの不思議に見惚れながら、二人は僕の指示に従い、竿や亀頭、玉にまで舌を這わせる。

「そうだアンバー、チンポの先の割れ目を、舌でグリグリ押すんだ。——うおっ!! おお……上手だぞ……。バーバラはそのまま玉をしゃぶれ。丁寧丁寧に……」

「んむ♡ ちゅっ♡ ちゅうっ♡」

「じゅるるっ♡ ちゅぽっ♡ ちゅろろろっ♡」

「二人とも最高だ……チンポ喜んでるぞ」

僕はリラックスした姿勢で、二人の奉仕に身を任せていた。

幻想的な星空の下、パチパチと弾ける焚火の炎が、アンバーとバーバラのフェラ顔を闇の中に照らし出している。昼は無邪気で天真爛

漫なアンバーも、天使のように清純で輝いているバーバラも、どこか妖艶で淫らな雰囲気を持っている。チンポを覚えたメスというのは、どんなに若くてもこうなるものなのだろうか。

二人の舌はとても暖かい。にゆるにゆる、ヌルヌルと僕のペニスを這い回って、途切れない甘い快樂を与えてくれる。自分たちの処女膜を突き破って女にしてくれた僕のチンポに、最大限の愛情と敬意と畏怖を持っていると分かる丁寧な動作。甘い甘いキャンディを舐めるように、それでいて最高級の繊細なガラス製品を扱うように、まだ拙い技を尽くして精一杯奉仕している。

静かな夜に、美少女たちがぴちやぴちやとペニスを舐めしやぶる音だけが聞こえる。

こんな極上の快樂に、いつまでも耐えられるわけがない。

「——うっ!! ああっ!! で、出るっ!! うおおっ!!」

発射の瞬間、僕の背筋を電流が走り抜けた。その時、アンバーとバーバラは両サイドから竿に舌を這わせ、龟头を手のひらで責めていた。凄い勢いで噴き出たザーメンが二人の手のひらにびしゃりとしたきつけられ、それが跳ね返って、アンバーの黒髪とバーバラの金髪に降りかかっていく。

「おじひやま……♡ きもひいい……?♡ もつろらして……♡ さいごまれらして……♡」

「おじひやまのおひんぼ、びゅーびゅーしてる……♡ すごいにおい……♡ もつろぺろぺろしてあげるから♡ もつろびゅーびゅーして……♡」

「うっ! おっ! おお……!」

少女の命ともいえる髪を汚されても、彼女たちは僕の射精が収まるまで、献身的に舌を動かしていた。僕はオットセイのような情けない声を出しながら、ずっと年下の少女たちによる極上のフェラ責めによって、腰が溶けるほどの快樂を味わっていた。

「バーバラ、おじさまのが、髪にいっぱいいついてるよ?」

「ふふ、それはアンバーもだよ。私たち、おじさまの匂いでいっぱいだね——ひゃんっ♡ もう、なに? くすぐったいよ!」

「顔についたの、舐めてあげる」

アンバーとバーバラはイチヤイチヤとむつまみあっている。その光景を見ていると、今しがた射精した僕のチンポは、既に復活してバキバキになっていた。というか、そもそもバーバラの回復魔術があるから、夜通し射精しようと思えばできるのだ。

そして、僕が欲望でギラついた目で見ていることに、二人は気が付いた。

「あ……♡ おじさまのおチンポ、怒ってる……♡ おじさま、またわたくしたちに、おチンポ入れたいの……?♡」

アンバーは片手で自分の胸を揉むようにし、もう片方の手を股間に差し入れ、僕を煽る仕草をした。

「おじさま、我慢しないでね……♡ 私たちを押し倒して無理やりえっちしたくなったら、いつでもそうしていいんだよ……♡ 私たちは、おじさまのおチンポに逆らえないメスなんだから……♡」

バーバラはうるうるとした瞳で、胸の谷間を見せつけるような格好で、僕の近くに口を寄せてささやいた。

二人とも、ちよつとチンポを覚えたくらいで、こういう生意気なメスガキ仕草をとるようじゃ、先が思いやられる。他のオスに盗られないうように、徹底に躑けてザーメンでマーキングしなければ。

僕は怒りに満ちた顔で二人の腰を掴むと、強引にテントの中に引つ張っていった。そして真っ暗なテントの中で二人の服を無理やり剥ぎ取り、手探りで彼女たちの身体を貪りだす。

「——あおっ♡ おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡ おゝゝゝゝつっ♡♡♡♡
♡ おじひやましゅごいっ♡♡ おじひやまチンポしゅごいよおっ♡♡」

「あっ♡ んううっ♡♡ いっ♡ ひっ♡♡ ごめんなひやいっ♡♡
おチンポおこらひえてごめんなひやいっ♡♡ だからごちゅごちゅしないりええっ♡♡ おマンコの奥ぶたないでえっ♡♡♡」

「——ひっ♡ うっ♡♡ しよこっ♡ おひりのあなっ♡♡ おじひやまの指っ♡♡ アンバーのおひりにはいつてるっ♡♡ ダメっ♡♡
きたないよおっ♡♡ きたないのに、なんかビリビリくるうっ♡♡

「もっろ♡ もっろおマンコしてくりやしやいつ♡♡ えっちなバー
バラにおチンポ様でおしおきしてくりやひやいつ♡♡ なかでいっ
ぱいだして、おじひやまのおいが取れないようにしてくりやひや
いつ♡♡♡ ———んいいいっ!!♡♡♡♡ で、でてるうっ
っ♡♡♡」

淫肉と淫肉を打ち付け合い、互いの体液でドロドロになりながら、
僕ら三人は、様々な形で交わった。誰がご主人様なのか、彼女たちの
身体と心の所有権を誰が持っているのか、僕は改めて彼女たちに教え
こみ、夜通しメス声を上げさせた。

茂みの向こう【バーバラ調教&〇〇〇登場】

さて、色々あったが、このテイワットでの生活にもかなり慣れてきた。科学技術的な面では元居た世界に当然劣るけど、それと引き換えに元素魔術というものがあるからか、食料とか衛生の水準なんかは決して低くない。というかむしろ快適だ。

僕はアンバーやバーバラとイチャイチャしつつ、彼女たちに元素の手ほどきやこの世界について教えてもらったりしながら、生活費程度は自分で稼ぐため、城下町の外に出てスイートフラワーやググプラムなどを拾い集めるといふ呑気な日々を送っていた。

「——とうっ！」

僕が突き出した槍を胸に受けて、小型のヒルチャールが地面に倒れた。ヒルチャールの死骸は、しばらくすると黒い煙のようになって消えていく。あたりに脅威がなくなっただけを確認すると、僕は槍を元素の状態に戻して空間にしまった。

「ふくむ」

自分でやっておいてなんだが不思議なもんだ。アンバーに教えてもらった通りにやったらできてしまったのだが、一体どうなっているのだろう。「神の目」とかいうやつが僕にあるお陰らしいけれど、原理が良く分からない。改めて首をひねっていると、後方で僕を援護していたバーバラが駆け寄って来た。

「おじさま、お疲れ様っ、かつこよかつたよっ、怪我してなあいつ？」
今日はアンバーが西風騎士団の仕事でいないので、バーバラだけが僕に付き添っている。僕は大丈夫だよと言ったけれど、バーバラはわざわざ僕の身体のあちこちをぺたぺたと触って、僕が負傷していないかどうかを確認めた。その確認が終わり安心すると、バーバラは胸をなでおろしながら僕に言った。

「本当にこんなところにヒルチャールたちがいるなんて……びっくりしたね」

僕が今日引き受けた冒険者任務は、少しだけ危険なものだった。街道にバリケードを作ったヒルチャールの討伐である。と言っても、小

型ヒルチャールが五匹ほど群れていただけなのだが……それでも危険であることには変わりない。

冒険者協会受付のキャサリンさんによると、最近モンドのあちこちで、こんな風にヒルチャールや「アビス教団」とかいう奴らの目撃情報相次いでいるそう。

ちなみに、僕が槍を操るようになっていて、タイマンなら小型ヒルチャールくらいには勝てるようになってるのは、きちんと訓練したからだ。訓練をつけてくれたのは何を隠そう、他ならぬ西風騎士団のジン団長である。実は先日、こんなことがあった。

「あなたは最近、バーバラと城下町の外に出かけているそうですね？」

あれはアンバーにくっついて騎士団の建物を訪れた時だった。通路で偶然すれ違ったジン団長が、何を思ったか立ち止まって振り向くと、僕に声をかけてきたのだ。バーバラのことについて尋ねられ、僕は思わずドキリとした。彼女を無理やりレイプしてメス堕ちさせ、それからもお部屋やお外でハメまくっていますなどとこの人に知られたら、腰に差さっている長剣で一刀両断間違いなしだ。

とりあえず、もっともらしく誤魔化さなければならぬ。

「あゝ、いやゝ、まあそうですね。実は僕が冒険者の仕事を始めたので、バーバラちゃんが心配して付いてきてくれてるんですよ。本当に優しい子ですよ。」

「なるほど……そうでしたか」

おっと、僕の白々しい言い訳を素直に信じたみたいだぞ。どうやらこの人は、見かけよりもチョロいところがあるのかもしれない。と言うか、バーバラのことなら本人に訪ねれば良さそうなものだが、それをあえて僕に聞いてくるというのは、前から思っていたが、この姉妹の距離感は少し複雑なようだ。

「そうなんです。僕は特に剣とかが使えるわけじゃありませんからね。というか、バーバラちゃんがああ見えて強くて驚きました。元素魔術も使えるし、僕なんかよりずっと……どうしました？」

「……剣も使えないのに、冒険者になろうと？」

しまった。ジン団長からの好感度が露骨に下がった気がする。そ

りやあそうだ。今の感じだと、ジン団長からしてみれば、このオッサンが妹を盾にしているのだと受け取ってもしかたない。発言の選択を間違えた。修正しなければ。

「——そう！ それなんです！」
「ん？」

「僕が今日ここに来たのは、実はそのためなんですよ！」

その場をもっともらしく取り繕うのは、生まれた時からの僕の得意技である。その特技を生かし、僕は口が動くままに喋った。

「冒険者としてやっていくって決めたのに、剣も振れないなんて情けないですよ。だから、アンバーに頼んでここに来たんです。ここには、武器の訓練をする施設なんかもあるそうじゃないですか」

「ふむ……そういう訳でしたか」
「そういう訳なんです」

よしよし、また納得してくれた。やっぱりこの人は少しチョロいぞ。などと内心でほくそ笑んでいたら、話が妙な方向に転がった。

「では、私が基礎を訓練してあげましょう」
「……え？」

「僭越ですが、私が剣技の手ほどきをして差し上げます」

「——い、いやいや、それは悪いですよ」
「何か問題でも？」

「いや、だってジン団長はお忙しいでしょうし——」
「私の予定くらいは何とでもなるので」

それは絶対に嘘だ。アンバーが、「ジン団長っていつ寝てるんだろう」と首を傾げていたから知っている。マズいな、妹のためにできることがあると知って、ジン団長のお姉さん心に火がついてしまった感じだろうか。

「それでは、裏手の広場に来てください。私は訓練用の武器などを用意してきますから」

「今からですか!?!」
「やるなら早いほうがいいでしょう?」

「いやしかし、僕は今日はアンバーの付き添いで……」

「彼女には伝言を残しますから大丈夫ですよ」

「……………はい」

完全に逃げ道を塞がれてしまった。訓練したいと言ったのは僕だし、これは逃げられそうにない。僕は諦めると、少し肩を落として頷いた。

という訳で、僕はジン団長じきじきに武器の扱いの手ほどきを受けたのだ。ジン団長が得意とする剣ではなく、槍の使い方を教えてもらったのは何となくである。槍のほうが相手から離れて戦えるから、それだけ危険が少なそうだと考えたのだ。

どうせ汗をかくなら女の子との交尾で……と思っていたけど、西風騎士団代理団長による個人トレーニングは、短期間でも確かに僕の身になっていく気がした。お陰で僕は、闘争とは無縁の現代日本から来たオツサンでありながら、何とか小型ヒルチャールと渡り合えるくらいには成長したのだ。

それに、ジン団長の指導はキツかったけど、考えようによつては悪くない。彼女と個人的に話す機会を得られたというのは大きい。お願いすれば、彼女はまた僕に訓練をつけてくれるだろう。

ジン団長はバーバラのお姉さんだけあって、バーバラを一回りか二回り大人っぽくしたようなスタイルと顔立ちをしている。モデルかよと言いたくなるような脚の長さで、剣で鍛えられた身体はバーバラよりも引き締まっている。開いた胸元から見える胸はぷるんと柔らかそうだ。訓練中、隙を見てたつぷりと視姦してやった。というか、騎士団の団長があんなスケベな衣装を着ていていいのだろうか。脚はぴっちりしたタイトのように見えるし、腋も丸見えで、お陰で僕は勃起を抑えるのに苦労した。

腕力では絶対に敵わない。しかしいつかはぜひ、ジン団長も僕のメスに墮としたものだ。ああいう責任感の強い子をメス墮ちさせたら、意外にチンポに依存してしまうかもしれない。バーバラとの姉妹井にも夢がある。その機会をうかがうためにも、僕はこれから定期的にジン団長の訓練を受けるつもりだった。

「おじさまスゴイね！ このあいだよりずっと強くなってる！」

それに、女の子からこういう称賛を受けるのも、男として悪い気はしない。物思いから意識を戻すと、すぐ目の前でバーバラが僕を見上げていた。

ああ、ジン団長を犯すことを考えていたせいで、その面影のあるバーバラの顔を見ると、なんだかチンポがむずむずしてきたぞ。「……あつ、おじさまのズボン、膨らんでる……」

バーバラも、僕が獣欲に支配された血走った眼で彼女を見ていることに気付いたようだ。彼女はぽつと頬を赤らめると、恐る恐るといった感じで僕の股間の膨らみに指を沿わせた。

「苦しいの……？　パンパンで痛そうだよ……？　治さなくて、いい……？」

純粹無垢な少女の顔に混じる、何かを期待するメスの色。こんなのを見せられたら、レイプしたくなるのは当然だ。

「ねえ、おじさま……♡　——きゃっ！」

辛抱たまらなくなった僕は、バーバラの手首をむんずと掴むと、彼女を強引に街道脇の茂みに引っ張っていった。

|| ||

「いやあく、モンド地方も久しぶりだなあ、蛍。アンバーやジンは元気かなあ？」

「元気だと思うよ。パイモン。そんな長いあいだ離れてたわけじゃないし」

肩を露出した白いドレスのような服を着た少女が、フワフワと飛行する妖精のような生き物を連れて歩いている。その金色の髪に、白い百合のような花をあしらった少女の名は、蛍。彼女は双子の兄といくつもの世界を渡り、このテイワットを訪れた際に、謎の「神」の力によって封印された。

つい先日目覚めた彼女は、同時期にモンドを襲った災厄を解決し、西風騎士団の「荣誉騎士」の称号を得た。今は主に璃月方面で兄の手がかりを探している。

彼女の周りにまわりつくように飛んでいるのは、パイモンという出自不明の生物だ。その航跡に星座のような光を残しながら、パイモ

ンは蛭に色々たわいもない話しをしている。蛭はそれを適当にあしらいつつ、街道を歩いてモンドの城を目指していた。

「モンドのお城に着いたら、『鹿狩り』でスイートフラワーの漬け焼きを食べようぜ！ それからアップルサイダーも……どうしたんだ？ 蛭」

「——しっ。……静かに、パイモン」

柔らかかった蛭の表情が急に厳しくなり、パイモンも口をつぐんだ。蛭の手には、既に空間から取り出した片手剣が握られている。既に蛭は戦闘態勢に移行していた。

パイモンはおずおずと囁くように蛭に聞いた。

「何かいるのか……？」

蛭は何も答えない。ただ、街道の周辺に目を凝らし、周囲の気配を探っている。

華奢な少女の見た目だが、蛭の戦闘能力は折り紙付きである。それこそ、フェアデュイの執行官と戦っても引けを取らない。パイモンには何も感じられなかったが、蛭は警戒に値するだけの何かに気付いたのだ。この一見平穏に見える街道に潜む、未知の脅威に。

（動物……？ ううん、魔物……？ ヒルチャール？）

蛭は元素視覚も活用しつつ、脅威の居所を探った。どこかに何か居るのは確かだ。その気配は人間ではなく、もっと原始的な、野生の動物に似ている。ヒルチャールかもしれないと思ったが、それとも違う感じがする。

（……？）

蛭の警戒心は、少しずつ弱まってきた。どうやら、相手は自分とパイモンの存在に気付いていない。待ち伏せされているのではなさそうだ。魔物でもない。それほど邪悪な気配はしない。やはり、動物か何かだろうか。

（あの茂み……？）

街道を少し逸れると、草や木が繁茂している。目を凝らすと、その中にガサガサと揺れる茂みがあった。蛭は念のため警戒を続けながら、足音を立てずにそこに接近していった。

「——っ♡ ～っ♡ ——っ♡ ～っ♡ ～っ♡」

その茂みの中から悲鳴に似た声が聞こえて、蛍の警戒レベルは再び上昇した。誰かが何かに襲われているようであり、しかしそれとはどこか違う声。声を上げている者が命の危機にさらされているとしたら、こんな甘い色は音に混じらない。

では、悲鳴でなければ何なのだろう。蛍はむしろ好奇心に誘われて、その茂みをそつとかき分けた。

「あっ♡ あっ♡ ひっ♡ おじさまっ♡ いいようっ♡ すごいよおっ♡ あっ♡ いっ♡ いっ♡ んうっ♡」
「……………?!?!?!」

蛍は目の前で何が起きているのか理解できず、一瞬固まった。それからしばらくして、彼女は声にならない悲鳴を上げかけ、とつさに両手で口を塞いだ。

蛍が覗いた茂みの奥には、二人の人間が地面の上に折り重なるようにしていた。蛍と同じ年ごろの少女の上に、それよりずっと年上の男のしかかつて、身体全体で少女を押し潰すようにしていた。

蛍の側からは、二人の下半身しか見えない。しかし、茂みの隙間から二人を除く蛍の頬は、見るからに赤らんでいた。蛍も、あそこで行われている行為が何なのか、実体験は無くとも知識として知っていたからだ。

「んっ……………？ なあ蛍、あの二人、あんなとこで何やってんだ……………」
「——っ!!!」

横に出てきたパイモンに問われて、蛍は心臓が口から飛び出るほど驚いた。声を出すことだけは防いだが、腰が抜けたようになり、そのままそこにへたり込んでしまう。パイモンはあそこで行われている行為の意味が分からないようで、眉をひそめて首を傾げている。

「なんか……………股のところは棒が刺さってる？ あんなに抜き差しして……………痛くないのかな——ぶわっ!!」

頼むから黙っていてと、蛍は右手でパイモンを捕まえると地面に押し付けた。パイモンはモガモガともがいている。その間も、蛍の目は茂みの奥の二人から離れなかった。

声。あんなものを挿入されたら、女の子は誰でもみんな——蛭自身を含めた全員がああなってしまうのだと、蛭は頭ではなく身体で悟っていた。

初めて経験するどうしようもない疼きに苛まれて、いつの間にか、蛭の左手は自身の太もものあいだに差し入れられていた。蛭の太ももはじつとりと汗ばんでいる。だが、彼女の左手を包んだ熱と湿度は、必ずしも汗のせいだけではなかった。

「んむっ♡ んちゅう♡ ちゅうう♡ じゅるっ♡ んはっ♡
ちゅう♡ はあっ♡ ちゆるるるっ♡」

声が聞こえなくなつて、代わりに水音が響いてきた。あの二人の上半身がどうなっているのかは、蛭にはよく見えない。頭部がもぞもぞと動いているようだから、あの二人はキスをしているのだろうか。しかし、キスでどうして、こんなに何かの液体を吸うような音がするのだろうか。あそこでは、一体どういう行為が行われているのだろうか。蛭の脳内で、妄想だけが先走っていく。

ただ一つ分かるのは、男にのしかかられて身体の自由を奪われているかに見える少女は、確かに男から受ける行為で悦んでいるのだ。それは、頭のほうに見える二人の手が、五指を絡めて硬く握られていることからすぐに読み取れた。

(ああ……す、すごい……。セックス……。これがセックスなんだ……)

初めての本格的な行為を見せつけられて、蛭という少女の中に眠っていた「女」は、急速に目覚めつつあった。胸や膣、そして子宮や卵巣といった、子どもを孕み、産み育てるための器官が、役目を思い出したように活発に疼きだす。太ももに差し入れていた左手は、ショーツ越しの割れ目に沿って、恐る恐る指を這わせていた。

やがて蛭は、茂みの向こうで犯されている少女が、まるで自分自身であるかのような幻想に浸り始めていた。あんな風に服をはぎ取られ、身体の自由を奪われて、「ここ」にあの太いモノを突き入れられたら、一体どんな感覚が待っているのだろうか。

(——んっ♡ ——んっ♡ ——んっ♡ ——んっ♡)

少年少女が、どのようなきつかけで自慰に目覚めるかは予測できないものだ。今の蛍が左手でしている行為は、紛れもなく、己の内側から湧き上がる性衝動を鎮めるための自慰——オナニーだった。

(何これっ♡ 何これっ♡ ジンジンするっ♡ お股のどこピリピリするよおっ♡)

蛍はセックスというものを生で見ても、実際にオナニーをする方法も学んだ。この短時間で、少女は色々なことを学んで大人に近づいた。彼女のオナニーは、ショーツの上から恥丘をなぞるだけの可愛らしいもので、向こうで行われている生ハメ交尾とは比較にならないおままごどだったが、それでも、それによって味わう快楽は、蛍が今まで感じたことのないものだった。

数多の世界を渡り歩き、人々を救うための戦いに明け暮れてきた少女として、いや、それゆえにこそ、蛍はこのような世界があることを知らず、恐怖と恍惚とが同時に伴った未知の体感に翻弄されていた。

同じころ、男に犯されている少女のほうも、蛍と共に果てを迎えつつあった。男と絡め合った両手をより強く握り、口は男の唾液を求め、両脚は男を逃がさないように彼の腰に巻き付いた。女性器からチンポが引き抜かれようとするたび、マン肉が名残惜しそうに吸い付き、逆にチンポが突き入れられると、奥から新しい愛液を垂れ流し、子宮口が自ら出迎えて悦んでいた。

男と、男に犯されている少女と、そして蛍。三者の肉体は繋がってシンクロしているかのようにはっきりいき、やがてその時が来た。

「——んむうっ♡♡ ～～～おっ♡♡ ～～～♡♡」

茂みの向こうにいる二人が、今までになく身体を密着させた。抽挿を繰り返していた肉棒は、完全に少女の胎内に収まったところで停止し、腰のピストン運動は、かき混ぜるようなグラインドに変わった。男と少女の腰は別の生き物のようにガクビクと痙攣し、男から少女へ、何かがドクドクと注ぎ込まれている気配が、蛍にも伝わって来た。

(——んっ♡♡ ふぐう～～～～♡♡)

蛍もまた、二人と同時に声を殺して絶頂していた。

(な、なにこれえっ！ 腰、ビクビクって——！ 浮いちやう——！)

落ちちやうよお——っ♡)

重力から解き放たれ、方向を失って飛ばされていくような衝撃。視界が一瞬真っ白に染まって、自分がどこに居るかもわからなくなる。動物みたいに思いつきり叫びたい。目の端から涙が零れる。

茂みの向こうでは、絡まり合った二人の結合部から、収まりきらなかった白濁が逆流して漏れ出していた。ふうんとあたりに漂った生臭い匂いが、蛍の鼻にも届く。初めて経験する絶頂の感覚と一緒に、その匂いは蛍の脳内に摺り込まれていった。

「はあ……はあ……はあ……はあ……」

ようやく波が引いた時、蛍は息も絶え絶えになっていた。今まで彼女を突き動かしていた衝動は、波と共に去っていた。凄まじい罪悪感に襲われて、ここから逃げ出したい気持ちだった。

そして、先ほどの絶頂は、決して蛍の肉体を満足させなかった。ただひたすら、切ない後味が残っただけだ。茂みの向こうで幸福そうな余韻に浸っている二人とは対照的だ。

(何やってるの私……のぞき見なんかして。——！ あの二人、まだするつもりなんだ……！)

蛍が罪悪感に苛まれていたところ、茂みの向こうの二人が腰の動きを再開した。さつきよりもねっとりとした、お互いの愛情を確かめ合うような動作が、見ている蛍の身体に、再び例の疼きを灯しそうになる。

そして、それを恐れた蛍は、このままあの二人を見ていたいという欲望を振り切って、その場から情けなく逃走することにした。

「——んぶうっ！ ほ、蛍！ なにすん——ぶぐっ!？」

小脇に抱えたパイモンの口を塞ぎ、後ろも見ずに脱兎のごとく逃げ出した。幸いにして、相手のことだけに夢中になっている茂みの向こうの二人には、蛍のことは最後まで気付かれなかった。

だが、慌てていた蛍は、そのときに不覚をとった。小枝に髪をかすられて、二つ付けていた花飾りのうちの一つを、その場に落としてしまったのだ。しかし、蛍がそのことに気付いたのは、もつとずっと後になってからのことだった。

その時の蛍は、街道を走って一目散にモンドの城下町を目指し、逃

げ込むように宿の部屋に入ると、そのまま布団をかぶって寝てしまった。

しかし、そんな彼女を心配するパイモンも寝静まった深夜、蛍のベッドからは、くぐもった甘い音色とかすかな水音が、しばらく途切れることなく響いていた。

元素視覚【アンバーイチャラブ&ノエルメス墮ち】

窓の外から、チチチつと鳥の音がする。瞼が明るいのは、もう朝だからだ。僕はパチリと目を覚ますと、ベッドの上で気分爽快に背伸びをした。

「う〜んっ！ 快眠快眠、やっぱりこの世界はいいなあ」

前の世界と違い、この世界は時間というものに強く縛られていない。仕事をしている人たちも、毎日毎夜働きづめという感じではなく、どこかのんびりと適当な感じで働いている。それがモンド特有の気風なのかは分からないけど、日が沈んだら寝て、日が昇ったら起きるという人間としての「当たり前」ができるのは、前の世界ではほとんど許されない贅沢であることは違いない。

「アンバーは……まだ寝てるな」

隣を見ると、アンバーがまだすうすうと寝息を立てている。彼女も僕も真っ裸で、二人の身体を隠しているのは薄い白いシーツだけだ。起きている時は元気いっぱいアンバーの寝顔は、あどけなくも整っていて、この子も本当に美少女だなあと改めて僕に思わせた。

そんな眠り姫の股のあいだからは、僕が昨晚何度も吐き出した白濁がドロリと溢れ出ている。自分が種付けした美少女のむっちりとした肉体を抱き枕にして眠る。これも僕の安眠の秘訣だ。

僕は慈しむ表情でアンバーの寝顔を眺め、その髪を優しく撫でた。僕のチンポはガチガチに朝立ちしている。寝ているアンバーに突っ込んで処理させてもらっても、彼女はきつと怒らないだろうけれど、こんなに穏やかに寝ているところを起こすのは忍びない。今はそっとしておいてあげよう。

僕はベッドから立ち上がり、アンバーの裸体にシーツを掛けなおすと、ごく簡単な朝食を用意し始めた。

「……ん。……………おじさま?」

「おはようアンバー」

「ごはん……作ってくれたの?」

朝食の匂いに釣られて、アンバーは目を覚ました。まどろんだ表情

で上半身を起こし、木のテーブルに並べられた二人分の目玉焼きとトーストを見ている。目玉焼きはテイワット風ではなく日本風だ。寝ぼけたアンバーは、上半身からシャツが滑り落ちていることに気付いていない。露出した柔らかいおっぱいが魅力的なのは当然だが、肩の丸みやくびれた腰のラインが、なんともそそる。種付けしたいが、やっぱりここは我慢だ。

「ほらアンバー、顔を洗っておいで。そしたら朝ご飯だよ」

「うん……」

アンバーの偵察騎士の仕事も今日は非番である。むにやむにやとベッドから脱出したアンバーは、僕の言う通りに顔を洗い、それから朝食の席に着いた。その時には一応、全裸ではなく上にゆるゆるのシャツを着ていた。下は丸出しのままだったけれど。

それから僕らは、ほとんど会話することなく食事に集中した。ご馳走様を言ったのはほぼ同時だった。食べ終わると、僕は自分の膝を叩いてアンバーに言った。

「——ほら、おいでアンバー」

「あ……♡」

我慢の時間は終わりだ。寝ている間に生産された精子を一発吐き出さないと、ムラムラして外出もままならない。椅子に座る僕の股間にそそり立つチンポを見て、アンバーは頬を染めた。

「おじさまの……カチカチ……♡」

「うん、痛いくらいさ。だからアンバーのマンコに種付けさせてもらうよ。いいね？」

「はい、おじさま……♡♡」

ご主人様のチンポが臨戦態勢に入っているのを見ただけで、アンバーは表情をトロトロにして発情した。明るく無垢な彼女が、こういうメスの表情をできると知っている男は僕だけだ。

朝交尾には手ごころなことに、アンバーの下半身は丸出しで、僕はもとより全裸だった。アンバーは椅子に座る僕の傍に寄ると、正面から僕の上に乗ってきた。僕は座ったままアンバーを抱っこして、シャツ越しのお腹にガチガチの肉棒を擦り付けながら、彼女とキスを始め

た。

「んちゅ……♡ ちゅ♡ ふぁ……♡ おじさまのお口、目玉焼きの味と匂いがするね……♡」

「アンバーもだぞ」

「ふふ……♡ つ♡ ちゅ……♡ はぁ……♡ ちゅう♡……♡ おじさま……♡」

小鳥の声をBGMにアンバーのような美少女と抱き合つてキスするのは、最高の気分だった。心が穏やかな幸福感に満ちていくと同時に、チンポにはムラムラが溜まっていく。僕のチンポも、このメスを確実に仕留めて僕のお嫁さんにしなければならいと分かっているのだ。そう、アンバーもバーバラも、いつかは僕のお嫁さんとして孕ませ、可愛い赤ちゃんを産んでもらう。これは願望ではなく、決意だった。

僕とアンバーは椅子の上で抱き合いながら二十分以上もキスを続けた。アンバーの着ていたシャツの前面は僕のカウパーでびしょびしよだ。でも、アンバーの股からも熱い本気汁が漏れて、僕の太ももを濡らしているからおあいこだろう。

窓の外で、小鳥の声以外に元気な子供たちが笑いながら走っていく音がした。人々が目覚め、街が動き出しているのだ。そんな時間に、こんな若くて可愛い女の子と交尾をしようとしているのだから、僕は本当に果報者だ。

キスを中断すると、アンバーが両腕を上げてシャツを脱ぐ。適度にハリのある美乳がぷるんと揺れて、美味しそうな腋も丸見えになった。乳首は既にツンツンに勃っている。僕はアンバーに許可も取らず、その片方にしゃぶりついた。

「——きゅ♡ あんっ♡ ふふっ♡ おじさま、おっぱいが好きなのは赤ちゃんなんだよ……♡」

そんなことは無い。男はいくつになってもおっぱいが大好きだ。僕はアンバーの乳首を舌で舐め転がしながら、彼女の腰を抱きしめた。アンバーの手は僕の両肩に置かれ、僕が愛撫するたびに、快感を堪えるように両手に力を籠める。肩もみされているようで、それも心

地い。

「——んっ♡ ああっ♡ やあんっ♡ おじさま、おっぱいばかりいじめないで、わたしのおマンコにも、おじさまをちょうだい？♡
もう準備できてるんだよ……？♡ ——あっ♡ ねえ、お腹におじさまが欲しいよお……♡」

僕はアンバーの望みをかなえてやることにした。アンバーの腰を支え、彼女が椅子の上で腰を浮かせる手助けをしてやり、挿入を補助する。膨れ上がった亀頭とアンバーの割れ目がキスをしたかと思うと、そのままずっとゆうつと飲み込まれていく。まるでアンバーのおマンコが、自分から僕のチンポを食べているかのようだ。

アンバーの中は相変わらず最高だ。入り口が僕の竿を甘噛みしてきて、中もぎゅぎゅに締め付けてくる。初めて犯した時に比べると、ずいぶん柔らかくこなれてきた。内部の形状が僕のモノにフィットしたことで、僕を感じる快楽はより増大した。

「はいっ……たあ♡ おじさまの、やつぱり大きすぎるよお……♡」

奥まで挿入が完了すると、アンバーは僕の背中に腕を回し、目一杯の力で抱きしめてくる。おっぱいが僕の胸板に押し付けられ、コリコリとした乳首の感触が伝わる。僕とアンバーは、しばらく互いの性器の形を楽しんでから、二人一緒に腰を動かし始めた。

「んっ——♡ んうっ♡ んっ♡ んっ♡ んっ♡ ふあっ♡ すごっ♡

昨日もあんなにしたのに——♡」

「ごめんね、アンバーがエロ過ぎるから、どれだけザーメン出しても収まらないんだ」

「——ふふっ♡ 褒められちゃった♡ うん、いいよ♡ おじさまが作ったせーし、全部わたしの中にだしちゃお♡ 作るたびに出して、わたしのお腹におじさませーしが入ってるのが当たり前にしちやおうね♡」

わずかのあいだに、アンバーは本当にエッチな娘になった。僕は彼女の成長を喜びながら、お望み通り彼女の子宮を精液で満たすため、朝一番搾りの濃いヤツを、ドクドクと膣内に吐き出してやった。

「んっ……♡ あっ♡ んうっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡

「っ♡」

「ああ……出る出る……アンバーのマンコも喜んでるぞ。僕のザーメンごくごく飲んでる」

「んいつ♡ いう……♡ おじさま♡ セーしどくどく♡
あ……♡ 真っ白になるう……♡ はあ……♡ はあ……♡
……♡ はあ……♡」

アンバーとの朝セックスは、それから僕が二発射精するまで続けられた。よく眠り、よく食べて、よく交尾する。若々しい肌に触れ、その生気を分けてもらう。三大欲求を完璧に満たした生活で、僕のメンタルと体力は常に完調だ。イキ疲れて二度寝してしまったアンバーをベッドに横たえると、僕は街へと繰り出した。

||

「今日はあなたに、元素視覚を学んでもらう」

「元素視覚?」

ジン団長が発した聞きなれない言葉に、僕は首を傾げた。

「心配いらぬ。あなたも神の目を持っているから、きつと簡単にできる」

「何かの技ですか?」

「まあ、そんなものだ」

僕らが居るのは西風騎士団の建物の裏の広場である。ここは訓練スペースを兼ねていて、打ち込み用のダミー人形なども設置されている。僕がジン団長の手ほどきを受けるときは、たいていここでということになっている。

ジン団長の僕に対する話し方は、前に比べるとかなり気安いものになっていった。距離が近づいたというよりも、僕に対して敬語を使う必要など無いということに、ジン団長が気付いたというほうが正しそうだ。まあ、僕は彼女より年上だけど、彼女は騎士団の代理団長というモンドでも偉い立場で、しかも今は僕の武術の先生でもあるのだから、特にそれに不満はない。

僕はジン団長から槍の訓練を受けながら、時にはそれ以外の技術も学んでいた。主に、元素の扱い方だ。

「私が扱えるのは風元素で、あなたは岩元素に適性があるようだから、本来なら私以外の者が教師になるのが適任なのだが……騎士団で岩元素の使い手という……ああ、彼女がいるな」

そしてありがたいことに、ジン団長以外の指導役も付けてもらった。ノエルちゃんという騎士団メイドの女の子だ。ノエルちゃんはメイドだけど、いつかは正式な騎士になることを目指していて、それ故に剣も使えるし、元素も扱える。面倒見が良く岩元素に適性のある彼女を、僕のもう一人の指導役に据えようというジン団長の配慮には、本当に頭が下がる思いだ。

とまあ、そんなこんなで元素についても学んでいる今日この頃、ジン団長が教えてくれたのは「元素視覚」の使い方だ。読んで字のごとく、この世界に流れる元素を、視覚的に感じる技術である。大層に聞こえるが、コツを教えてもらったら意外にあっさりできた。

「それで、これは何に使ったらいいんですか?」

「騎士団では、主に人探しや物探しに使っているな。例えば、落とし物に付着した元素を頼りに、持ち主を探すことなどもできる」

「ほほう」

「冒険者として生活するなら、あなたにも役立つだろう」

「そうですね、便利なものを教えてくれてありがとうございます。――で、ジン団長、次は何の訓練をすればいいですかね? また打ち込みですか?」

「ああ、いや、今日はこれで終わりにさせてもらおう。すまない」

「――?」

元素視覚について教えてもらっただけで、ジン団長はそう言った。てつきり今日も彼女のスパルタ指導が待ち受けていると思っていた僕は、意外な成り行きに首を傾げた。怪訝そうな僕を見て、ジン団長は柔らかく微笑むと、実はと言った。

「今日は騎士団の会議があるんだ。だから少し忙しい」

「ああ、そういうことですか」

僕は納得した。そもそもジン団長は、忙しい職務の合間を縫って僕に指導をしてきている。のんびりしたモンドにあって、ジン団長だ

けは元の世界のブラック企業も顔負けの長時間労働を行っている。アンバーとバーバラによれば、眠気覚ましにジン団長が消費するコーヒーの量は半端ないそうだ。

責任感が強い——というより、自分を上手く甘やかすことができない人なのだろう。

「モンドに続いて、璃月でも問題が起こっているそうだね。……ファデュイの連中は、一体何を企んでいるんだろうか」

「ファデュイ？」

ジン団長の呟きに、僕はついつい割り込んでしまった。でも、彼女が関わっているであろう政治やなんかのことについては、僕などが茶々を入れたり首を突っ込む話じゃない。聞かなかったことにしてくれと言おうとすると、ジン団長は普通に答えてくれた。

「氷の国……スネージナヤの擁する組織だ。この間まで、モンドにもその執行官の一人が来ていた。璃月には『公子』が現れたそうだが、奴らの意図は一体何なのだろう。……ああ、すまない。独り言になってしまったな」

「いえいえ、気にしないでください。というか、ジン団長は色々と氣を使い過ぎですよ。もうちよつと肩の力を抜かれては？」

「——ふふ、よく言われる」

おお……なんだ、この人、こんな風に可愛く笑えるんじゃないか。ジン団長が不意に見せたあどけない笑みに、僕はついつい引き込まれてしまった。

「という訳で、すまないが今日はこれでお開きにさせてくれ。ああ、でも日課はしっかりこなすように。成果は後日見せてもらうからな？」

最後にジン団長は、少し悪戯な先生っぽい口調になって、僕が与えられた自主訓練のメニューをこなすように、しっかりと釘を刺した。僕ははつきりと頷き、それで今日は彼女と別れた。

（ふむふむ……やっぱりこれは、誰かの落とし物だったみたいだな）

ジン団長とのやり取りの中で、ファデュイとか執行官とかいった部分には、特に僕は興味が無かった。それよりも、ジン団長に教えてもらった「元素視覚」のほうが重要だ。ちようどまさに、僕はこういう

能力を欲していた。

僕が手に持っているのは、先日拾った髪飾りだ。まるで本物の花のように見えるデザインである。これはこの前、僕が屋外でバーバラとイチャラブしていた時に、近くの地面で発見したものである。どうも誰かに見られているような気がしていたのだが、やっぱりそうだったのだ。

こんなアクセサリを付けるのは女の子に違いない。もしも持ち主を見つけたら、人のプライベートなシーンをのぞき見するとはどういうつもりかなと問い詰めて、それが可愛い子ならしつかりとお仕置きしてあげるつもりだった。

そこでこの元素視覚の出番である。視界を切り替えて見たところ、この花飾りには、かなり強い元素の痕跡が残っていて、どうやら持ち主は、相当優れた元素の使い手らしいということまで分かった。

（うくん、これは風元素かな？ それとも岩元素？ 何種類か混じってる感じがするなあ）

不思議なことに、通常は一種類しか使えないはずの元素が、この髪飾りには二種類付着していた。不可能ではないそうだが、そういう人は限られるそうだ。しかし、今の僕が読み取ることができたのはそれだけで、この花飾りから持ち主までたどっていくことは無理そうだった。

（まあいいや、いずれ持ち主を見つけたら、その時に役立てるとしようか。それよりも、せっかくだからノエルちゃんに会っていくかな）

僕は気持ちを切り替えると、この騎士団の建物のどこかにいるノエルちゃんを探した。

＝

「おっ、おじさま困りますっ、このような場所で、このようなこと——あっ♡」

「このようなことってなんだい、ノエルちゃん。僕に教えてくれないかな？」

「——そ、そんなっ、あっ、ダメっ、そこはダメですうっ♡」

僕がとぼけながらスカートの中を手でいじくると、ノエルちゃんは

涙目で身をよじった。

うん、まあこうなるよね。こんなおつとりとした、しかもメイドの美少女から二人つきりで個人指導を受けていれば、襲いたくなるのは仕方ない。だから僕は悪くない。

ここは西風騎士団の建物の中にある物置の一つである。団員の宿舎で使っているシーツなんかが積まれた、布団部屋のようなところだ。そこで僕は、騎士団メイドのノエルちゃんとの距離を縮めるためのスキンシップに勤しんでいた。

「あつ♡ —— やんつ♡ おじさまつ♡ あの時の一回だけって言ったのにつ♡」

「そうだったかな？ でも一回だけで我慢できるわけないだろう？ ノエルちゃんが可愛すぎるのがいけないんだぞ！」

「——んっ♡ やめっ♡ スカートの下で、お尻さわさわしないでくださいいっ♡」

僕は先日、ノエルちゃんを押し倒してやってしまった。彼女の処女膜は僕のチンポでいただき済みだ。彼女のようなタイプは男の権幕と勢いに弱い。律儀な彼女は、ジン団長直々に指導を頼まれた僕のことを跳ねのけてぶちのめすこともできず、流されるまま僕のオツサンチンポに処女を捧げてしまった。

そして、いったんこうなってしまったら、ノエルちゃんは他の人にもこの話を打ち明けられない。つまり、彼女はこれから一生涯、僕のおマンコペット決定だ。いずれ孕ませて騎士団を寿退社させ、僕専用の性処理メイドになつてもらおう心づもりである。

「ノエルちゃん、いいだろ?! ノエルちゃんのせいで、もうチンポガチガチなんだ！ もう破裂しそうなんだよ！」

「——あつ♡ そんなっ、やめてくださいいっ♡ おじさまあつ♡ んうっ?!♡♡」

僕が首筋に顔を埋めて唇で吸い付くと、ノエルちゃんはしつかりとメスの声で鳴いた。口ではイヤイヤ言っているけど、彼女も僕に再び抱かれるのを期待していたのだ。やがてノエルちゃんの息はハアハアと荒くなり、首や鎖骨にむしやぶりついている僕の頭を、痛くな

い程度に手で抱きしめてきた。

「ノエルちゃん、好きだ！ 僕のモノになってくれ、ノエルちゃん！」

「そ、そんな……！ 私に騎士団に仕えるメイドで……！ ——あつ♡」

「そんなこと関係ないよ！ ノエルちゃんが嫌がっても、無理やり僕の女にするからな！」

既にアンバーとバーバラというメス奴隷兼お嫁さんがいるのに、よく白々しくそんなことを言うと思われるかもしれない。しかし、僕は120%混じりっ気無しの本気だ。僕は寿命の問題さえクリアできるなら、この世にいる全ての美少女を僕のメスにし、僕の子種で孕んでほしいと真剣に思っている。そこに偽りなどない。だからこそ、ノエルちゃんも僕の気迫に圧されて、僕の身体を自分の上からどけることができないでいるのだ。

僕はノエルちゃんのメイドスカートをめくりあげ、ガーターを着けた太ももをまさぐり、ショーツ越しにおマンコを愛撫した。

「あつ♡ あつ♡あつ♡あつ♡ ダメっ♡ おじさまいけませんっ♡ ——んうっ♡」

悪いけど、そのハートマーク付きの「ダメ」は、男の性欲を煽る効果しかない。ノエルちゃんのメイドマンコは既にしっとり濡れていて、厚い生地スカートの下には、むせかえるくらいのメスのフェロモンが満ちていた。これでダメとかどの口が言っているんだろう。

「ノエルちゃん、挿れるからね！ 挿れるぞノエルっ！！ 僕の女になれ!!」

「あつ♡ ダメっ♡ おんななんて——あつ♡ ああ………っ♡」

「ふう……ノエルのメイドマンコ、おじさんのモノを飲み込んでいくよ……。ちゃんと僕のチンポを覚えててくれたんだね……。熱くてチンポ溶けそうだ……」

「あ……ああ………ダメって言ったのに……またおじさまにセックスされちゃった……」

「泣かないでいいよ、ノエル。ノエルはこれから、騎士団メイドじゃない

くておじさんのお嫁さんになるんだ。おじさんのチンポでおマンコ気持ち良くなつて、おマンコでおじさんのチンポ気持ち良くすることだけ考えればいいんだ」

「——あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ おじっ、さまあっ♡ あっ♡」

片脚を抱え込んだ立位でピストンすると、ノエルはすぐに甘い声を上げ始めた。ノエルはメイドさんだけあって、奉仕の精神を体現したようなおマンコの持ち主である。チンポにねつとりとむしやぶりついて、隙間なく甘やかしてくる優しいおマンコだ。恥丘はぷっくり肉厚で、むちゅうつと吸い付いてくる感触がたまらない。

薄暗い物置でメイド少女とセックスする。これも僕が、少年のころからいつか叶えたいと思っていた願いだ。それが叶ったことをどこかの神に感謝しつつ、僕は夢中で腰を振った。ノエルもしっかりと感じてくれている。あんあんという鳴き声が、耳に心地よい。突きたびに従順になつていく彼女は、やはり僕のようなオスに支配されるために生まれてきたのだ。

「ノエル、舌を出して」

「ふあい……あ……♡ れろお♡ ああむ♡ ちゅう♡ ちゅ……♡」

舌と舌を交わらせてからキスハメし、ポルチオを亀頭でトントンと叩いて、ノエルの心に残った僕への抵抗感を失わせていく。やがて彼女も積極的に快楽を受け入れるようになって、僕らは物置でのラブラブイチャ交尾にふけた。

「——ううっ!!!」

「んんうっ♡♡ あっ……♡♡ 出てる……♡♡」

「ごめんねノエル。ノエルのナカが気持ち良すぎるから、ザーメン出ちゃったよ」

「もう……♡♡ 本当は……いけないですよ……♡♡ メイドのおマンコに無理やりせーえき出すなんて……♡♡ おじさまは私のご主人さまじゃないのに……♡♡」

「じゃあご主人様にしてよ。僕がノエルのご主人様になる」

「え……？ あ……♡ そんな……♡」

「ご主人様という言葉の響きに反応して、ノエルのおマンコは、さらに強く僕のチンポを求めて引き締まった。子宮が自ら墮ちることを望むように、チンポのほうに降りてくる。そんなメスを前にして、僕のチンポもイライラがマックスだ。」

「ノエル、今日から僕がお前のご主人様だ。ご主人様チンポ気持ち良くして、ご主人様のザーメンで孕みなさい」

「そ、そんなあ……♡ ダメですう……♡ ダメえ……♡」

しかし、その返事とは裏腹に、ノエルの身体は既に僕の前に全面降伏していた。あとは、彼女の頭にもそれを理解させてやるだけだ。僕はノエルの唇を自分の口で塞ぐと、彼女を騎士団メイドから、僕専用の性処理メイドに生まれ変わらせるべく、執拗に腰を振って彼女を鳴かせた。

||

「ふう〜、八発は出したかな……。流石にちよつと疲れたよ。どうだい？ 墮ちたかい、ノエル」

どれくらい時間が経っただろうか。ようやくチンポの怒りが収まったところ、ノエルはおマンコからドロドロと白濁を垂れ流しながら、物置の床でへばっていた。彼女の瞳は朦朧として、顔にもザーメンがかかっていたが、それでもはつきりと返事をした。

「……はい♡ わたしは、ごしゅじんさまのおチンポの、せんぞくメイドでしゅ……♡ これからも、かわいがってください……♡」

「よしよし、やっぱり女の子は素直じゃなきやね」

「ふあ……♡ ごしゅじんさまの手……♡ おつきい……♡」

少し時間はかかったけど、これでようやくノエルも僕のモノになった。精液まみれで幸せそうな彼女の顔を見ると、彼女を犯してあげて、本当に良いことをしたと思う。

しかし、彼女の「説得」のために、騎士団の物置をぐちゃぐちゃにしてみました。綺麗に積まれていたシーツも床に散乱しているし、ザーメンの匂いで酷い有様だ。どうしようかなと僕が悩んでいると、倒れたままのノエルが言った。

「わたしがおそうじしますから……♡ ごしゅじんさまは気にしないでください……♡」

なんと、やつぱりノエルは優秀なメイドだった。僕は彼女の髪をもう一度よしよしと撫でると、服を整えて何事も無かったかのように物置の外に出た。

「……………ん？」

だが、そこで僕は異変に気付いた。何かは分からないが、妙な感じがする。でも、物置前の廊下には誰も居ない。そうだ、こういう時こそあれの出番だ。僕は視界を切り替えて、元素の流れを追ってみた。(……………また、誰かここに居たのか?)

物置の扉の前に、元素の痕跡が残っている。またしても誰かにのぞき見されていたらしい。しかも、この元素の特徴には見覚えがあった。

(この花飾りの持ち主が……………騎士団にいるのかな?)

風と岩の元素が混じった、特徴的な痕跡。それは、例の花飾りに付着した元素の特徴と同じだ。僕は床にしゃがみこむと、石畳をそつと撫でた。

「……………ふむ」

この、微妙に床を濡らしている液体には心当たりがある。どうやら花飾りの持ち主は、人のセックスを覗いて自分を慰めることが癖になってしまったらしい。

ノエルを墮として3匹目のメスにしたばかりであるが、どうやら僕に墮とされるのを待っている少女が、すぐ近くにまだいるようだ。僕は一人の廊下で、ニヤリと笑った。

世界への感謝【バーバラ&アンバー&ノエル4P】

「お………お願いします………♡ ご主人さまにメロメロになった、ノエルのメイドおマンコ………♡ どうか、遅しいおチンポさまで舐けてください………♡」

銀髪ボブヘアの美少女メイドにベッドの上でM字開脚させて、その小さく可愛い口でいやらしい言葉を紡がせるのは、実にチンポにク。ノエルはまだ羞恥心を捨てきれず、淡いエメラルドグリーン。の瞳を潤ませて、顔を耳まで真っ赤にそめているが、それがまた奥ゆかしい。ノエルのおねだりに応えるため、僕は彼女のおマンコに、バキバキになった勃起チンポをあてがった。

「ハア………♡ ハア………♡ ハア………♡ ご主人さまにセックスされちゃう………♡ バーバラちゃんとアンバーさまの見ている前で………♡」

ノエルは、単に僕との生セックスを恥ずかしがっているだけじゃない。ノエルの両サイドには、彼女にとつての先輩性奴隷であるバーバラとアンバーが居て、僕に挿入されようとしている彼女を見守っていた。

「アンバー、ノエルちゃん、とつてもエッチだね………♡」

「うん………おマンコ濡れて光ってる………♡ おじさまのメスになりたいよ………♡」

「バーバラもアンバーも、ノエルがメスになる瞬間をよく見ておくんだよ。これからも4人で、仲良くセックスするんだからね」

「はあい♡」

「分かったよ、おじさま♡」

ティワットに来てからこれで3人の美少女をメスに堕とした僕は、彼女たち全員を自分の部屋に招待し、当然のように4Pすることにした。何しろ、みんな平等に僕のお嫁さんでありチンポケースなのだ。ハーレムの主としては、彼女たちが仲良くやっていけるよう、自分たちの絶対的ご主人様が誰であるかを改めて認識してもらおう必要があった。

ここはモンドの城下町で、僕がアンバーの部屋の隣に借りている部屋である。僕は普段はアンバーの部屋で彼女と半同棲しているから、この部屋はほとんど使っていないかった。それだけに、ヤリ部屋としては都合が良い。

これから始まる遠慮なしのガチ交尾の予感に、少女たちはみんな肌を上気させ、期待に身体を震わせている。しかしまず僕がハメ犯すのは、一番最近僕のメスになったノエルである。バーバラとアンバーには、ノエルがどんなふうに乱れるのかを、すぐそばでつぶさに観察してもらおう。そして、自分たちがチンポを受け入れるときのことを想像してもらおう。

「ご主人さま、どうか優しくお願いします——っ」

「分かっているよ、ノエル。優しくお前を壊してあげる。僕のチンポのことしか考えられない、オナホールメイドにしてあげるよ」

「そんなっ、そんなあっ……——あっ♡ ずぶずぶって、ご主人さまが入ってきますっ……♡」

「すごおい……♡ ノエルちゃんのおマンコ、おじさまのでこんなに広がってる……♡」

「見ないで、見ないでバーバラちゃん……！ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ 私がお主人さまのオナホールにされちゃうところ、見ないでえっ♡」

バーバラとノエルは、以前からかなり親交があったそうだ。誰にでも「さま」付けて礼儀正しいノエルが、バーバラには「ちゃん」付けて親しく振舞う。そんなかけがえのない友達の前で、おっさんチンポにマンコを貫かれるというのはどんな気分だろう。ノエルは涙を浮かべながらイヤイヤと首を振っているが、おマンコはきゅつきゅと締めまり、僕のチンポに熱烈に媚びている。

「おじさまのおチンポ、ノエルちゃんの一番奥まで入ってる……♡」
「うん……♡ おチンポにどちゅどちゅされて、お腹が膨らんでるね……♡」

「ノエルちゃん、赤ちゃんのお部屋の入口、おじさまにノックされるの気持ちイイ？ 気持ちイイから、そんなにいやらしく鳴いてるんだよ

ね……♡ おじさまにメスにされたノエルちゃん、可愛いなあ……♡

「あっ♡ あっ♡ あっ♡ ああっ♡ イヤっ♡ 見ないでっ♡ 見ないでえっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡」

正常位でピストンされるノエルの両耳に、バーバラとアンバーがヒソヒソと囁きかけている。メス穴調教される自分の姿を実況されているノエルは、歯を食いしばった口の端からよだれを垂らしながら、目の奥にバチバチと弾ける快感の電流によって理性を焼き焦がされているようだ。

バーバラとアンバーも余裕なように見えて、ノエルが感じている性を想像して発情しているのだろう。両者とも、モジモジと擦り合わせた太ももに、とろりと本気汗を垂れ流している。僕は二人に、ノエルのお腹に手を置いてみるように指示した。

「今からノエルに種付けするからなっ！ 僕の精子がノエルの子宮で泳ぎ回るのを、手のひらで感じるんだっ！ おっ！ おっおっおっ！！ 出すぞっ！！」

「あひっ!?♡♡♡ おくくくっ?!?!♡♡♡ いっ♡♡♡ あくくくくっ!?!?!♡♡♡♡♡」

「わあ……ドバドバって……奥に……」

「ノエルちゃん、おじさまにママにされちゃってる……」

「うん……それで、その次は私たちも……」

ノエルに種付けし終わると、僕は彼女の中から、ずるずるとチンポを引き抜いた。子宮を押し潰すくらい奥まで入っていた長大な肉の竿が抜けていくたび、ノエルの腰はビクンビクンと跳ねて痙攣する。オスによる本気の種付けがメスにもたらすアクメというのは、これほどまでに凄まじいものだ。少し休ませてやらないと、本当にイキ死んでしまうかもしれない。

それに幸いなことに、ここにはノエルの他にも、僕がチンポを突っ込むべき穴が有る。

僕が睨みつけると、バーバラとアンバーは何も言わなくても動いた。四つん這いになった二人は、ノエルから引き抜かれたザーメンと

愛液まみれのチンポに、恭しくキスを捧げる。そしてそのまま、竿や亀頭についばむようなバードキスの雨を降らせながら。小さくてスベスベの手のひらを使って、玉をやわやわとマッサージし始めた。

多分いまのこの子たちの頭の中には、ノエルのように生ハメ射精されたら本当に孕んでしまうかも……という考えはない。ただ本能に従い、絶対の忠誠を捧げた僕に対する、メスとしての当然の義務を果たしているだけなのだ。すなわち、全身を使ってチンポを気持ち良くし、子宮を完全に明け渡して、孕ませ汁をたっぷり注いでもらうという義務を。

なんて健気なんだろう。彼女たちの想いに応えなければ、男が廢る。

愛液とザーメンを完全に舐めとってピカピカになると、バーバラとアンバーは、激しく呼吸をしているノエルの両脇で、ころんと仰向けになった。そして自ら脚を上げてM字開脚すると、瞳を潤ませて僕におねだりした。

「お願いです、おじさま……♡」

「私たちにも……おじさまの熱いせーしを、いくつぱいください……♡」

言われなくてもそうしてやる。僕はまず、アンバーにのしかかった。愛撫もせず、無言でいきなり挿入する。アンバーのマンコは、いつもよりキツく感じられた。

「おっ♡ あっ♡ かはっ♡」

アンバーは、チンポを挿れただけで背筋を弓なりにのけ反らせ、後頭部だけをベッドにつけてブリッジしたような状態になってしまった。目を大きく見開き、瞳孔も開いている。両脚はガシッと僕の腰に絡められ、ちよつとやそつとじや引き剥がせそうにない。ザーメンを子宮に注いでやるまで、この脚は取れないだろう。

アンバーの両手が、僕を探すかのように宙をさま迷っていたので、僕はその両手を捕まえて指を絡ませた。そして小刻みに腰を揺すりだす。

「いっ♡ おっ♡ あぎっ♡ ぐっ♡」

「アンバー……っ」

明らかに異常な喘ぎを漏らすアンバーを、バーバラはM字開脚したままハラハラと見守っている。アンバーが苦しんでいるのは僕にも分かった。アンバーはいま、僕と僕のチンポを愛する以外の「余計」な思考を、まさに奪われている最中なのだ。十数年間生きて培ってきた価値観が根本からひっくり返るのは、さぞ辛いに違いない。

だからこそ、僕は彼女に、奪ったものに値するだけのメスの喜びを与えてやらなければならないのだ。

「アンバー出すぞ……!!　お前にも種付けする……!!　僕の子を孕め……!!」

「おっっ♡おっっ♡おっっ♡うっぎっ♡♡あっっ♡」

言葉で返事をする代わりに、アンバーは僕と握り合った両手に力を籠め、マンコをさらに締めてきた。アンバーの了承を得たことで、これは単なるセックスではなく、愛し合う二人のラブラブ子作り交尾になった。僕の金タマは、アンバーを孕ませるための新鮮な精子をフル活動で生産し、こうしている間にもずっしりと重量を増していく。ここに溜まったものを全部、彼女の子宮に吐き出すのだ。

「出るっ!!　出るぞっ!!　一番奥で——もつと奥で出すっ!!」

「——あひゅっ!!♡♡♡」

子宮口にグリグリと亀頭を押し付けていると、チンポがズブンともう一段階奥へと入った気がした。それと同時に、アンバーの口からヤバ目の呼吸音が漏れる。アンバーの下腹部は、僕の亀頭の形がポツコリと浮かんでいた。亀頭の先が、どこか懐かしい場所に還って来たような感覚に包まれる。

「アンバー、子宮に直に出すからな……!!　排卵しろ……!!　受精して着床しろ……!!　——ウううっ!!!」

「~~~~~~~~っ♡♡♡　~~~~~~~~っ♡♡♡　~~~~~~~~っ♡♡♡

アンバーのイキ声は、もはや声になっていなかった。子宮内に侵入した亀頭から、直に凄まじい量の種を蒔かれているのだ。排卵していれば妊娠不可避である。玉から尿道を通して吐き出されるザーメン

は、ほとんど小便と変わらない勢いだ。しかもそのザーメンはマヨネーズのように濃く、液体糊のように粘っこい。僕も尻の穴を引き締め射精しながら、魂が抜けてしまうような快楽を味わっていた。

「フーっ……いー！ フーっ……いー！ フーっ……いー！」

アンバーに射精し終えた時、僕は野生の獣のような呼吸をしていた。実際、思考の度合いも獣のそれと変わりなかった。獣になった僕は、繁殖本能に従って、もう一匹の種付け待ちのメスをギロリと睨んだ。僕と目が合ったバーバラは、ひっと息をのむ。しかし、決断したように目を硬くつぶると、M字開脚したおマンコを指でくぱあと押し広げた。

「お願いします……おじさま……っ。バーバラにも、あなたの愛をください……っ」

僕は震えるバーバラの上に移動すると、チンポを挿入する前に、彼女を抱きしめた。これは決して彼女への思いやりではなく、目の前のメスを絶対に逃がさないための行動だ。少女の身動きが取れないようにして、彼女の赤ちやん部屋を僕の精子プールにするまで、絶対に許さないという決意だ。

バーバラは僕の背中に両腕を回した。隣でハメ潰されてしまったノエルやアンバーと同じように、脚を僕の腰に絡めた。

「おじさま……あっ♡ ……え？」

彼女が僕を呼んだ瞬間、挿入は果たされていた。ドツチュンと一気に奥まで、僕のデカマラが一瞬でバーバラの中に埋没する。バーバラは、何が起こったのか一瞬理解できていないようだった。

「……いっ！♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡
????? ———いっ！♡♡♡♡♡ おっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡
♡」

遅れてきた挿入感とチンポ快楽が、バーバラの脳を焼き焦がす。

「あゝーっ!♡♡♡♡♡ おゝゝゝゝっ!?!?!♡♡♡♡♡ いっ♡あゝっ♡おゝっ♡おゝっ♡おゝっ♡」

亀頭がバーバラの子宮口にハマったまま、僕は容赦なく腰を振った。バーバラにとって、その快楽は悦びというよりも拷問だった。早く種付けして終わらせてあげるのが、せめてもの慈悲というやつだ。

どざりと倒れて仰向けになった。

「はあ……はあ……はあ……」

荒い息を吐きながら天井を眺める。同じベッドには、種付けしてハメ潰した三人の美少女が眠っている。今回の種が当たるかどうか分からないけれど、彼女たちのカラダの所有権は、既に僕のモノだ。これから何度でも種付けし、絶対に孕ませる。

「——ははっ」

ああ、僕はなんて幸せ者なんだろう。そういう思いが込み上げてきて、僕の口からは爽やかな笑いが漏れた。

かけがえのない友情【蛍調教】

「ふうくん、君は蛍ちゃんっていうのかあ、可愛い名前だね」

「あ♡ あっ♡ あっ♡ あああっ♡ やめっ♡ もうやめてっ♡」

「それで？ その蛍ちゃんが、どうして覗き見なんかしてたんだい？」

「あっ♡ ひつう♡ ダメっ♡ せつくすダメっ♡ もうおチンチンでアソコ虐めるのやめてえっ！ うっ♡ あっ♡♡♡」

「あゝあ、またいつちやったね。蛍ちゃんのおマンコは本当に弱いなあ。そんなにおじさんのおチンポ奴隷になりたいのかい？」

「な、っ、なりたぐないっ！ 奴隷なんてっ、お、っ♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡ あっ♡♡♡♡♡ や、めええっ♡♡♡♡」

突然だけど、僕はいま、新しいお嫁さん候補の女の子と生ハメしている真っ最中だ。

ここはモンドで僕が借りている部屋だ。普段の僕は隣のアンバーの部屋で寝泊まりしていて、ここはもっぱらバーバラやノエルが遊びに来た時、彼女たちに種付けするヤリ部屋として使用している。僕はその部屋のベッドに、アンバーたちに勝るとも劣らない美少女をうつ伏せにさせて、体重をかけて押し潰すようなバツクハメを行っている。

彼女は蛍ちゃん。金色の髪がふわふわで柔らかく、名前の響き通り、どこか蛍の光のような儚さも漂わせる美少女である。僕が元居た世界の基準で言うと、JCかJKってところだろうか。感度が良くて、おマンコの締まりもとてもいい、孕ませがいのある女の子だ。

そんな彼女が、どうして僕とガチセックスしているのかというと、そこにはやむを得ない事情があった。

なんと蛍ちゃんは、僕と女の子たちのラブラブ交尾を覗き見した犯人なのである。ここ最近、西風騎士団の物置や教会の裏なんかで、僕がノエルやバーバラをハメ犯していると、どうも誰かに見られている気配を感じた。

それが何度も続いたので、ジン団長から教えてもらった「三元素視覚」

を頼りに犯人を捜してみると、蛍ちゃんを見つけたのである。僕に見つかったときの蛍ちゃんは、顔を真っ赤にし、全身を薄っすらと汗で湿らせ、そのうえ小動物のようにプルプルと小刻みに震えていた。

元素視覚なんかを使わなくても、そのときの蛍ちゃんが漂わせていた濃い「メス」の香りを嗅いただけで、僕はピンときた。

「ふうん……君、オナニーしてたでしょ？」

「——!?!」

「他の女の子がおじさんにセックスされてるのを無断で覗いて、オナニーしてたんだよね？ 違う？」

蛍ちゃんの真っ赤な顔は、一転して蒼白になった。あとはもう、彼女は僕の言いなりだ。僕は大人として、悪いことをした彼女に「お仕置き」するために、この部屋に連れ込んだ。手マンとクンニで何時間かイカせまくって、彼女が疲労困憊したところで、処女を美味しくいただいたのだ。

蛍ちゃんのおマンコはキツキツだったけど、今ではもう、すっかり僕のチンポに馴染んでいる。

「蛍ちゃん、わかってるかい？ 人のセックスを覗き見するのは、立派な犯罪なんだからね？ そういうことをしちゃう悪い子は、おじさんのおマンコペットにされても仕方ないんだよ？」

「あゝっ♡♡ あああゝっ♡♡ うゝっ♡♡ イっ♡♡ ダメっ♡♡
死んじゃうっ！ このままじゃ死んじゃうよおっ!! あゝっ♡♡
ぐ、ううゝゝゝっっ♡♡♡♡」

「大丈夫。女の子は、いくらおマンコでいっても死なないようにできてるから。代わりに、いつもおチンポのことが忘れられないエッチな子になっちゃうかもしれないけど……蛍ちゃんは最初からそうだもんね？」

「ひっ♡ ちがつ、わたし、えっちじゃないもんっ！」

「はははっ、エッチじゃない子のおマンコは、こんな風におじさんチンポに吸い付いてきたりしないんだよ？ フンッ!!」

「おゝひゅっっ♡♡♡♡♡」

言葉では抵抗しているけれど、蛍ちゃんには、もともと強いレイプ

願望があったようだ。僕みたいなオスに無理やりお嫁さんにされた
いという、女の子なら誰もが少なからず持っている潜在的欲望であ
る。

その証拠に、蛍ちゃんのおマンコは、僕がイジメたらイジメられた
だけ新しい愛液を漏らして悦んだ。彼女のマンコにぶつ刺さってい
る僕の肉竿には、ドロドロの熱い液体が絡みついでいて、そのお陰で
狭いメス穴を乱暴に往復するのに何の支障もない。あまりに愛液の
量が多すぎるせいで、蛍ちゃんの純潔が散った証も、生々しい赤色か
ら淡いピンク色に薄まってしまっていた。

「ああああっ!!! 蛍ちゃん!! 蛍!! ザーメン昇って来たぞ!! たっ
ぱり種付けしてやるからな!! 自分のご主人様のザーメンの味を、き
ちんと子宮で覚えるんだ!! わかったね!!」

「えっ、やっ、やだあっ!! たねつけなんてやだあっ!! そんなのされ
たら、おじさんの赤ちゃんできちゃう!!」

「ごらっ!! お仕置きされてるのに逃げるな!!」
「あつぎゅ?!」

僕がしようとしていることをちゃんと理解して、蛍は僕の身体の下
から這って逃れるように、シーツを両手で掻きむしった。僕はそんな
彼女の四肢を拘束し、さらに強く体重をかける。もちろんその最中
も、ピストンは一切緩めてあげない。

蛍には、自分が悪いことをしたという自覚を持ってもらわないとな
らない。だから僕は心を鬼にする。心を鬼にして、彼女を立派なおチ
ンポ奴隷に生まれ変わらせてあげるんだ。

「蛍はおじさんのメスになるんだ!! お前はこれから、おじさんと可
愛い赤ちゃんを作るんだ!! 逃げるな!!」

「いやあっ!! 助けて空っ!! 助けて、お兄ちゃん!!」
「——っ!!」

蛍が叫んだのは、どうやらお兄さんの名前らしい。

僕はガラにもなく、本気でカチンときてしまった。だってそうじゃ
ないか。赤ちゃんを作るために種付け交尾している最中なのに、他の
男の名前を出すなんてマナー違反だ。それとも、蛍は僕をわざと煽る

ためにそんなことをしたんだろうか。

僕の金タマは怒りでグツグツ煮え滾り、中では大量の精子が生産されている。何億の精子たちが「早くこのメスを孕ませろ」と急ぎ立てるせいで、これ以上射精を我慢できそうにない。

生出しする直前、僕は蛍の耳に口を寄せて囁いた。

「蛍、お前はおじさんのメスだ……!!」

「あつ……」

「おじさんの女になれ、蛍……!!」

蛍の四肢をガツシリと押さえ込んだまま、僕は射精を開始した。

新しいメスを我が物にするための膣内射精。これに勝る快樂はこの世に無いと断言できる。蛍の一番奥までハマりこんだ肉棒が、消化ホースのようにドクドクと精液を吐き出していく。

「あ……ああ……」

蛍は絶望で顔を青ざめさせていたが、それは彼女がまだ、僕のメスになる喜びを理解していないからだ。——一方で、彼女の身体はちゃんとその喜びを知っている。彼女のおマンコはと子宮は、僕の肉棒にちゅうちゅうと継り付いて、大量の精液を飲み干そうと精一杯頑張っていた。

「蛍、お前はおじさんの性奴隷だ……!!」

射精が続く間、僕は蛍の耳に、彼女が何者であるかを理解させるための言葉を囁き続けた。蛍は今から僕のメスで、性奴隷で、お嫁さんだ。彼女は今日から、僕に気持ち良く射精してもらうことを最優先に考えて生きなければならぬ。僕は彼女が愛情を捧げるべき唯一の相手で、健やかなときも病めるときも、常にお互いを愛し合い、生ハメ交尾に勤しまなければならぬのだ。

「う、うう……うええ……ぐすつ……」

蛍は涙を流し始めた。——分かっている。この涙が喜びの涙じゃないってことは、僕も知っている。彼女を悲しませている責任は、完全に僕にある。僕にもっと力があれば、彼女を泣かせずに済んだんだ。

「蛍……」

僕は射精しながら、蛍の金色の髪を撫でた。そして自分の精液を彼女の奥に塗り込むように、腰をグリグリと動かす。

「あゝっ♡♡♡ ぐっ♡♡♡ んいゝっ♡♡♡ はあっっ♡♡♡ ひうっ♡♡♡」

僕は蛍のお尻に腰を密着させたまま、丹精込めて彼女に種付けした。重たいアクメが蛍を襲う。彼女はきつと、自分の腰が溶けたんじゃないかと錯覚しているはずだ。脚をジタバタとさせているのは、快感のせいで腰から下の感覚がなくなってしまったせいだろう。

数分経って、蛍のキツマンの中で暴れまわっていた僕の息子は、ようやく落ち着きを取り戻した。——といっても、それはただ射精が一段落したというだけで、肉棒は萎えることなくガチガチの勃起状態を保っている。

僕は細長い息を吐いた。

「ふゝ……」発目の種付けは終わりだよ、蛍。ちゃんとおじさんのメスになれたかい？」

「あ……ぐ……♡♡♡ ひ……♡♡♡」

「……まだみたいだね。まあいいさ、まだまだこれからだ。蛍が素直になれるまで、おじさんはいつまでも付き合っただけよ」

「う、あ、ああ……♡♡♡♡♡」

幸い、時間はいくらでもある。僕は再び、長いストロークでの抽挿を開始した。

「蛍、そろそろおじさんのメスになったかい？」

「あゝゝゝっ♡♡♡ ひっ♡♡♡ うっ、あゝゝゝゝゝっ♡♡♡♡♡」

数時間後、僕と蛍はまだセックスを続けていた。

カーテンすら閉め切った室内では時間経過も曖昧だ。ただ辛うじて、外が暗くなっている事だけはわかる。薄暗闇の中で、僕は蛍の正面から、いわゆる種付けプレスで彼女を愛していた。

僕は敢えてゆっくりと、それこそ一度の抽挿に数十秒の時間をかけて、蛍のマンコのナカで竿を往復させていた。

僕は彼女に自分のカタチを覚え込ませるために、念入りに時間をかけて、ズルズルと肉竿を引き出していく。マン肉がチンポを追いかけ

てきて、亀頭が抜けないようにムチュウつと吸い付く。抜ける寸前になると、逆に腰を前に突き出す。そのときもじつくりゆつくり、決して焦らず進んでいく。

「んっ、お、~~~~っ♡♡♡ お、~~~~っ♡♡♡」

乱暴な獣ピストンよりもこちらのほうが、蛍にとつてはキツイお仕置きかもしれない。僕のチンポに膣壁をゆつくり削られて、彼女は白目をむいて口から舌をピンと突き出しながら、長い長いアクメ声を晒していた。

「そろそろ素直になりなさい。おじさんのメスになったら幸せになれるって、お前も十分わかっただろ？」

「~~~~っ!!」

しかし蛍は強情だった。もう堕ちて見も心も委ねるように僕が勧めても、歯を食いしばって首をぶんぶんと横に振る。なんでも彼女はこの若さで、モンドを救った「荣誉騎士」として讃えられているそうだから、見た目以上に芯の強い子なのだろう。その健気さは僕の中で、なおのこと、この子をモノにしたいという欲求を大きくさせる。

僕は蛍の奥の奥までチンポを突き刺し、亀頭で子宮を持ち上げると、ポルチオを執拗に刺激した。

「はうっ♡♡♡ いっ、あ、っ♡♡♡ お、っ♡♡♡」

「もう一回種付けするぞ。子宮口を開けて飲みなさい」

僕は優しく蛍に囁いてから、種付けを開始した。ぼびゅぼびゅと音を立てて、まるで饅飩のようなぶっといザー汁が鈴口からひり出されていくのがわかる。これで抜かすの七発目くらいだろうか。種付けし過ぎたせいで、蛍の下腹部はポツコリ膨れてしまっていた。

「う、~~~~っ♡♡♡ あ、っ、うう、~~~~っ♡♡♡」

蛍は僕の首にしがみつきながら、種付けアクメで全身を激しく痙攣させた。彼女の脚が僕の腰に巻き付いているのは、意志とは関係のない本能によるものだろう。——いや、というよりも、本心では彼女も僕のメスになることを望んでいるんだ。

しかし、その回の種付けが終わりかけたころ、蛍の身体から、ふっ

と力が抜けてしまった。手も脚もパツタリとシーツの上に投げ出して、何の声も発さなくなつた。

「蛍？ 蛍？ ……気絶しちゃつたか」

やれやれ、と心の中でつぶやきながら、蛍の胸が呼吸で上下しているのを確認して安心する。一瞬、本当にイキ死んでしまつたかと思つた。

ぶつ続けでガチハメし続けるつもりだつたけど、こうなつてしまつては、小休止を取らざるを得ない。そう考えて引き抜こうとした僕のイチモツを、蛍のマンコが「行かないで♡」と追いかけてくる。なんて愛くるしいんだらうか。やっぱりこの子は、僕のメスになるために生まれてきた女の子だ。

チュポン、と音を立ててチンポが抜けた割れ目から、ドロドロの白濁が逆流してきて、シーツを汚す。それに伴い、妊娠初期のように膨れていた蛍のお腹が、元通りスツキリとへこんでいく。我ながら、よくもこんなに出したものだ。

「おじさま、終わったー？」

ちようどそのタイミングで、アンバーが部屋に顔を出した。彼女は僕に朗らかな笑顔を見せてから、ベッドで失神している蛍を見て、呆れたような感嘆したような声を出した。

「あつちやく……蛍、おじさまのでドロドロだね。ねえねえおじさま、蛍もおじさま専用の女の子になつたの？」

「ああ、それはまだだよ。あと一息つてところかな」

「ふくん。おじさまの女の子になつちやえば、すつごく幸せになれるのよね」

僕の所有物になる幸福を知っているアンバーには、蛍が強情を張る理由がわからないようだ。僕は自分の傍に寄ってきたアンバーの髪を撫でてやつた。

僕がこの部屋で蛍の調教を行っていることを、アンバーとバーバラとノエルは知っている。というか、蛍をここに連れてくるにあたっては、彼女たちにもかなり協力してもらつた。三人とも、蛍が自分たちと同じ僕のメスに堕ちることを望んでいる。それが蛍のためである

と、誰よりも彼女たちが良く知っているのだ。

その友情の美しさに心を打たれ、僕はついつい慈しむ微笑みを浮かべてしまう。

「アンバー、蛍の身体を拭いてあげてくれるかい？ 調教は一旦休憩だ」

「うん、わかったよ。……おじさまのおチンポは、そのままでもいいの？」

「ああ、これか……」

アンバーがモジモジと身体をくねらせる。彼女の視線の先には、ギンギンにいきり立ったままの僕のペニスがある。精液や蛍の愛液でグチャグチャのドロドロになって、えらいことになっている。

せつかくだから、僕はアンバーのお言葉に甘えることにした。

「じゃあ、こいつも綺麗にしてもらおうかな」

「うんっ！」

アンバーが表情を綻ばせる。彼女はそそくさとベッド下に跪くと、あぐんと口を開けて、ベッドサイドに腰掛けた僕のイチモツをぱっくりと啜えた。

「じゅるるるっ♡♡♡ じゅぶっ♡♡♡ じゅるるっ♡♡♡」

「お、おお……っ」

思わず声が出てしまう。アンバーのお掃除フェラは格別だ。他の子をたっぷりハメ犯した後始末を、嫌な顔一つせず、むしろ進んでやってくれるなんて、この子も最高のお嫁さんだ。

「アンバーの口マンコ最高だよ……！ もつと奥で喉フェラしてもらってもいいかい？」

「——んぶっ♡♡♡ じゅっ♡♡♡ ぶぼっ♡♡♡ じゅぶるるるっ♡♡♡」

「ああ……そうそう……その感じ」

僕はアンバーの頭をガツシリ掴んで、チンポを包む彼女の口や喉の粘膜を堪能する。遠からず射精欲求が昇ってきて、僕は彼女の胃の中に自分のザーメンを遠慮なく吐き出した。

「んぶぶっ?! んっぐ?! んっ♡♡♡ んくっ♡♡♡ んくっ……んくっ

……」

「ふう〜ふう〜……」

「——ぷはあっ♡ ……おじさま、スッキリした？」

「ああ、最高だったよ、アンバー」

「えへへ……♡ ……ね、おじさま」

はにかむ笑顔を見せてから、アンバーは物言いたげに僕を見つめる。その身体から漂ってくるメスフェロモンを嗅げば、彼女が何を言いたいかは明白だ。

「アンバーも、蛭みたいに生ハメされなくなったのかい？」

「うん……だって、まだわたし、おじさまの赤ちゃん妊娠してないんだもん。蛭ばっかり、ずるいよ……」

「仕方ないお嫁さんだなあ」

僕は苦笑しながら、アンバーのぷにぷにの頬を撫でる。アンバーは僕の手にくっつきとりと身を委ねてから、もう一度おねだりした。

「おじさま、お願いします……アンバーの、おじさま専用お嫁さんおまんこに、今日もたくさん、赤ちゃんの種を入れてください……」

アンバーは本当に幸せな表情をしている。彼女は心の底から、僕の種で孕むことを望んでいる。そのためには、他の全ては後回しにできると言う顔だ。僕はアンバーに生ハメするため、彼女の服を脱がせ、前より少し膨らんだ形のいい胸に舌を這わせる。

僕はアンバーと背面座位で交わるために、背中から彼女を抱っこして、まんこに龟头をあてがった。そして僕にハメられる瞬間、アンバーは優しい声でつぶやいた。

「蛭も、早くおじさまのメスになれるといいね……♡ あっ♡」

失神した蛭の前でアンバーを犯しながら、僕はアンバーのために、早く蛭を僕のお嫁さんに墮とそうと誓いを新たにしました。

墮ちる幸福【蛍メス墮ち】

「あっ♡ あっ♡ ひあゝゝっ?!?!?♡♡」

「おゝ出る出る。嘘みたいな勢いでザーメン出る。蛍は細いけどムツチリしてて抱き心地が良いし、マンコの締めりも最高だなあ」

「はっ♡ はひえっ♡ ほっ♡ おゝ…っ♡ おゝっ♡ んおおゝっ!?!♡」

トパーズのような瞳が見開かれ、その奥で、小さな星が激しくぶつかり合っては弾けている。舌を突き出し、小柄な身体を精一杯痙攣させながらの、のけ反りガチアクメ。僕はいま、モンドの「荣誉騎士」である蛍ちゃん、と、駅弁ファックの真っ最中だ。

「それに蛍は軽いから、このカッコでもピストンしやすく助かるよ。まるでおじさんのオナホになるために生まれてきたような身体だね？」

「ほ…っ♡ おゝ…っ、おゝっ♡ いぎっ♡♡ うあっ♡♡ あゝゝっ?!?!♡♡」

「おやおや、脚がピーンってしちゃってるぞ？ そんなに中出しアクメ気持ちイイのかい？ マンコもめちやくちやチンポに吸い付いておねだりしてるし…やれやれ、蛍の頼みなら仕方ないなあ。もつとザーメン種付けしてあげるよ」

「ひいあっ♡♡ おゝゝゝっ♡♡ おゝゝゝっ♡♡」

僕は蛍の背中に腕を回し、サバ折りするみたいな体勢でぎゅゝと力強く抱き締めている。ちよつと乱暴に見えるかもだけど、蛍はさすが荒れ狂う風魔龍を撃退した荣誉騎士だけあって、とても丈夫な身体をしている。これもオナホとしては高得点だ。

僕との生ハメ交尾で重たいイキかたを続けたせいで、どうやら彼女の身体は、絶頂から降りる方法がわからなくなってしまうらしい。さつきからアクメしっぱなしだ。こんなにイつたら、もしかしたら日常生活に戻れなくなるんじゃないだろうか。——でもまあ、そうなたらそれで構わない。

「イっ♡♡ イっ♡♡ イっ♡♡ あゝゝゝっ♡♡ あゝゝゝ

「っっっ♡♡♡」

「心配しないで、おじさんのチンポでもつとイきなさい。蛍が交尾中毒のバカマンコになっても、責任をもって僕が飼ってあげるから」

「ヤダっ♡ ヤダヤダっ♡ おにいちゃんっ！ おにいちゃんっ！」

これも流石だ。今日でもう五日間くらいぶっ通しでメス快楽を仕込んであげているというのに、彼女の心はまだ完全には折れていない。蛍は生き別れの兄弟に助けを求めると、僕の背中にぎりつと爪を立てた。

「ああ、蛍……っ」

蛍をメスに墮とす調教の最中なのに、彼女の健気さを目の当たりにした僕は、つい胸を打たれてしまう。

蛍のマンコは僕のオッサンチンポに媚びりつき、小さな子宮は、龟头からびゅくるびゅくると噴き出す精液を、ごくごくと懸命に飲み干しているというのに。マンコが墮ちても、心が墮ちていないんだ。

蛍は生き別れの兄弟を探しながら、モンドや隣の溜月の問題を解決するのに奮闘している強い子だ。でも、どんなに強かったって、この子は一人の女の子に過ぎない。きつと蛍も初めから強かったんじゃないかって、強くならざるを得なかったんだ。

でも、だつたらなおのことだ。だからこそ、この子を隣で支えてあげる存在が必要なんじゃないか？

「安心しなさい、蛍」

蛍の爪でくじられた僕の背中には、じわつと血が滲んでいる。でもこんな痛みは、蛍の寂しさに比べたら大したことはない。

「これからはおじさんが、蛍と一緒に、お兄ちゃんを探してあげるからね」

「ひあっ♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡ おチンポっ♡ おじひやまのおチンポ太いっ♡♡太くてふかいよおっ♡♡」

「蛍が寂しくないように、子宮もおじさんのザーメンでパンパンにしてあげる。どんなときも、君が僕の存在を感じられるようにね」

「ひぎっ♡ はあおっ!?!♡♡ イくっ♡♡ イクイクイクっ!?!♡♡

あつきゅ!?!♡♡♡ お……っ♡♡♡ ほ……♡♡♡ ああ……っ

♡♡」

一発目の射精を終えた僕は、すかさず蛍の子宮に追い射精をキメた。僕のチンポでびっちり広げられたマンコの隙間から、入りきらなくなつたザーメンが、ぼたぼたと溢れて床に落ちる。それは蛍が嘔き出したイキ汁と混じり、酷い有様を作り出していった。

蛍のキツマンの中で、ビクンビクンとチンポが跳ねる。駅弁スタイルでハメているから、蛍はどこにも逃れようが無い。まんじりと、自分がオツサンチンポで種付けされる感覚を味わわなければならぬのだ。そしてそれが、まだ折れない蛍の心の中に、「僕のモノになつた」という自覚を育ててくれるに違いない。

それにしても、なんてハメ心地の良い、ラブラブ種付けレイプしがいのあるマンコなんだろう。僕の元居た世界と照らし合わせてみても、顔もスタイルも極上中の極上だ。こんなに若い美少女に、警察権力の介入も気にせずハメ放題だなんて、このテイワットはやっぱり最高過ぎる。

僕はこの世界で、アンバー、バーバラ、ノエル……もうすでに3人の綺麗なお嫁さんを獲得した。でも、まだまだ足りない。蛍もそうだけど、この世界には、まだまだ僕のチンポでメスにされるのを待っている美少女がいるはずだ。

蛍の中で最高に気持ちのいい射精を終えると、僕は彼女からチンポを引き抜いた。ずるずると引き抜かれていく長竿を、むちむちのマン肉が追いかけていく様子が、微笑ましくも目に心地よい。最後に亀頭がちよつと引つかかかってしまい、抜けたときは「ちゅぽんっ♡」と良い音がした。

「は……♡ はひ……っ♡ はひえ……っ♡」

「ほら蛍、せっかくお腹に注いであげたザーメンが零れちゃつてるぞ？ しつかりマンコ締めなさい。種付けされて、妊娠するまでが交尾なんだ。わかつたね？」

「うあ……っ♡ あ……っ♡」

蛍は目をチカチカ、口をパクパクさせていて、とても返事ができる状況じゃなかった。けど、僕の言っていることは理解したみたいで、

マンコの入り口がきゅつと閉じ、ナカに僕の精液を封じ込めた。
今ごろ、彼女の子宮の中では、数億数兆のオタマジャクシが、運命の元素反応する相手を探してうようよと蠢いていることだろう。
僕は満足して微笑むと、ぐったりした蛍の身体をお姫様抱っこし、共に浴室へと消えた。

|| ||

「うーん、蛍のやつ、いったいどこに行つたんだあ？」

蛍が異世界から来た中年に種付け調教されている頃、モンドの道を、彼女を探してふよふよと飛び回る謎の生物がいた。彼女？の名はパイモン。相棒である蛍が突然行方をくらましてから早数日、最初はそういうこともあるだろうと高をくくっていたパイモンも、流石に不安にかられていた。

しかし、暴走した風魔龍が鎮められて以来、モンドの城下町は相変わらずにぎやかで、不穏な様子などまるでなかった。

パイモンは噴水の近くに浮遊すると、腕を組んで考え込んだ。

「こんな探してもいないなんて……。ジンやガイアも知らないって言つてたし……。まさか、ファデュイの奴らが？ それとも……。オイラのが嫌になつて、一人で旅することにしたんじゃないだろうな……。ぶるぶるっ、そんなはずない！」

パイモンは頭を振つて、恐ろしい想像を打ち消した。

さればと言つて、蛍の行き先は、やはり思い浮かばない。

大きなため息をついたパイモンは、疲労感と共に、自分が空腹であることに気付いた。同時に、どこからか良い香りが漂つて来て、彼女の鼻をくすぐった。そう言えば、ここは「鹿狩り」のすぐ近くだ。

「うう……。なんだよオイラ！ 食事なんてして居る場合じゃないだろ！ でも、蛍を探すためにも、腹ごしらえは必要だよな……」

葛藤するパイモンだったが、改めて思い直すと、お金を持っているのは蛍だけで、パイモンは一文無しだった。再びため息をつき、がっくりと項垂れるパイモンの耳に、知り合いの声が届いた。

「あれ？　そこにいるの、パイモンじゃない？」

「本当だ、どうしたの？」

「えっ？　アンバー！　それにバーバラも！」

偶然そこに通りがかったのは、偵察騎士のアンバーと、教会牧師のバーバラだった。

暗かったパイモンの顔色が、一気に明るくなる。アンバーは、いつものお日様のような笑顔を浮かべ、パイモンに尋ねた。

「なあに？　その様子だと、お腹が空いて困ってたみたいだね」

「失礼な！　オイラはそんなに食いしん坊じゃないぞ！　……でも、そうなんだ」

「ふふっ、じゃあ、わたしたちと一緒に、鹿狩りでご飯にする？」

「いいのか!？」

アンバーとバーバラに食事に誘われて、パイモンは目を輝かせた。そして有難くご相伴に預かることにし、二人と一緒に鹿狩りのテラス席に座った。

「ぶはあく、美味しかったあ！　やっぱり鹿狩りの料理は最高だな！」

「パイモンったら、よっぽどお腹が空いてたんだね、そんなにいっぱい食べるなんて」

「もつとおかわりする？」

「おうっ!!　——じゃなくて、オイラは蛍を探してるんだよ！」

「蛍を？」

「そうだよ！　二人とも、蛍がどこに行ったか知らないか？」

満腹になったパイモンが、自分の使命を思い出して大きな声を出す。と、アンバーとバーバラは顔を見合わせた。そして彼女たちは、パイモンにとっては意外な反応を示した。——すなわち、二人の少女は、意味深で妖艶な微笑みを浮かべたのだ。

「そっか……そういうことだったんだね。うん、わたしたちなら知ってるよ？」

「ホントか、バーバラ！」

「うん。と言うより……蛍なら、もうすぐここに来るはずだもん」
「えっ？」

パイモンがバーバラの発言に面食らったかと思うと、横合いから、パイモンの知らない男の声が出た。

「やあ、待たせたね。思ったより時間がかかっちゃったよ」

「あつ、おじさま♡」

「ううん、全然待つてないよ♡」

「おじさま……誰……？　つて蛭！　蛭じゃないか！」

パイモンが振り向くと、そこには見知らぬ脂ぎった中年が立っていた。それだけでなく、中年の隣には、頬を染めたうつむき加減の蛭が立っていたのだ。

「どこに行つてたんだよ！　オイラ心配したんだぞ！」

「ごつ、ごめんねパイモン。……ちよつと、急な用があつたから」

「用事……？　このオッサンとか？」

「そ、そうなの。——んひゅつ!!♡♡　おつ、おじさま♡　今はダメ

……つ。パイモンが見てるからつ。おつ、おねがいますつ」

「????」

パイモンは首を傾げた。久しぶりに顔を見せた蛭は、どこか様子が妙だった。まるでトイレでも我慢しているかのように、モジモジと太ももを擦り合わせ、歩き方も何か変だ。しかし、蛭の様子が変わる理由を理解していないのは、どうやらこの場ではパイモンだけのようだった。蛭の身に何が起こったのかを承知しているアンバーとバーバラは、自分たちの時のことを思い出しながら、「メス」の先輩として、蛭に慈しむような妖艶な微笑みを向けている。

そう、蛭がこの中年によってぶつ通し生ハメ調教されていたことを、アンバーとバーバラは知っている。知らないのはパイモンだけだ。

どうやら、蛭の調教は一段落ついてしまったらしい。あれだけメス堕ちに抵抗していた蛭が、明るい青空の下につれだされて、脂ぎったオッサンに馴れ馴れしく腰を抱かれているというのに、逃げるそぶりすら見せないのがその証拠だ。

いまの蛭は服を着ており、男に犯された痕跡は完全に消されているが、アンバーとバーバラの目には、汗ばみ火照った蛭の身体が、この

中年のチンポでオンナの悦びを教え込まれた、彼専用の「おマンコペット」になっっているのがハッキリと見えた。

（蛍だったら、いいなあ……♡　きつとおじさまに、たくさん「交尾」してもらったんだろうなあ……♡）

（うう……♡　我慢したぶん、私もおじさまにおマンコして欲しい……。お腹にトロトロのせーし欲しい……っ。おじさまっ、バーバラのおマンコにおチンポしてください……っ）

蛍の「ヤられちゃった♡」っぷりを目にしたアンバーたちは、瞳にハートマークを浮かべ、蛍と同じように発情した。三人の美少女は一樣に無言になり、顔を赤らめてうつむいてしまった。

パイモンは、何が起こっているのかわからず、ますます困惑する。

「なんなんだあ……？」

「君はパイモンちゃんだね？　蛍から話は聞いてるよ」

「えっと、オツサンは……誰だ？」

「僕は冒険者さ。アンバーたちとは『友達』なんだ」

「へく、そうだったのか。どおりで蛍とも仲が良さそうなんだな！」

「っ——！」

基本的に疑うことを知らないパイモンの言葉を耳にして、蛍の肩がビクッと震える。中年冒険者の手が蛍の腰をさわさわと撫でて、蛍はますます赤くなり、深くうつむいていく。

「パイモンちゃん、その調子だと、蛍のことを探していたのかな？　すまない心配させて。彼女はずっと僕と一緒にいたんだ。ちよつと『冒険』に付き合ってもらってたんだよ。——な、蛍？」

「はっ、はいっ、そうですっ。おじさまとっ、一緒に冒険してましたっ。私っ、おじさまにっ、色んなところに連れてってもらったのっ」

「そうなのか……。でも、出かける前に、オイラに教えてほしかったなあ」

「ご、ごめんねっ、パイモンっ。——えへへっ♡」

パイモンは、蛍がついさっきまで、この男のデカマラをマンコにずっぷりハメ込まれていたなどは、微塵も想像していない。白く穢れの無い衣装の下に、オツサンの手でベタベタと撫で回された少女の

肉体が隠されており、さらにその奥の子宮には、中年男の遺伝子を載せた精子がパンパンに詰め込まれているということなど、想像できるはずもないのだ。

だが、蛍は既に、この男の「オンナ」だった。

ハメられ直後の身体を男に抱き寄せられ、こうやって人々の視線がある道を歩かされる。それは、「私はこの人に犯されちゃいました♡この人に逆らえないおマンコペットにされちゃいました♡」と高らかに宣言して回るに等しい。まだギリギリのところまで完堕ちしていないものの、こうやって衆目の前に「オンナ」にされた自分の身体を晒すことを了承してしまうくらいには、男のチンポによって肉体と魂に快楽を刻み込まれていた。

メスにされたばかりの蛍が発散する濃厚なフェロモンにあてられて、アンバーとバーバラが、見るからにソワソワとします。やられたい盛りの若い肉体を抱えた彼女たちも、ご主人様の逞しいオスチンポで種付けしてもらいたくて仕方なくなってしまうたようだ。

しかし、男は残酷に、彼女たちに「待て」と指示した。

「それじゃあ、僕と蛍はもうちよつと用があるから、アンバーとバーバラは、パイモンちゃんの相手をしてってくれるかな?」

「えっ、そ、そんな」

「おっ、おじさまっ!」

「——いいね?」

ご主人様の命令は、メス奴隷にとっては絶対である。男が低い声を出すと、二人は叱られた犬のように、しゅんと首を垂れた。

「ははは、心配しなくても、蛍の次は二人の番だよ。ノエルも呼んできて、五人でパーティーでもしようか」

そのパーティーとは、当然のことながら、墮とした四人のメスを侍らせての、夜通し種付けセックスパーティーのことである。その意味がわかっていないパイモンは、「オイラはパーティーに呼んでくれないうのか?」と怒っていたが、アンバーとバーバラは、「わかりました」と返事をし、追加のデザートを注文してパイモンの気を逸らせた。

デザートの前で瞳をキラキラさせているパイモンの横で、中年男は、蛍の耳にぼそつと囁く。

「……それじゃあ、蛍」

「っ——♡♡♡♡」

「部屋に戻って、続きをしようか?」

「はっ、はっ、はっ、はい……っ♡♡」

「いい返事だ。気絶するまでアクメさせて、蛍がおじさんのモノになったってわかるまで、しっかきハメ潰してあげるよ。覚悟しなさい」

「わ、わかりましたっ♡ ハメ、潰してっ♡ くださいっ♡」

拒否しなければならぬ。自分はお兄ちゃんを探さなければならぬのに。こんな人のおマンコペットになんかなりたくないのに。——そう思っても、言葉には出てこなかった。逆に蛍の口から紡がれるのは、男に媚びるメスの言葉だ。

男はニヤリと微笑むと、人目を盗んで蛍の胸を揉みしだき、その唇に吸い付いた。

「——んっ♡ ちゅう……っ♡♡ ぷあ……っ♡♡」

「行くぞ蛍」

「は、はひ……♡」

荣誉騎士の威厳など微塵もないフラフラとした足取りで、蛍は男の身体にしなだれかかり、ヤリ部屋になっている宿へと帰っていった。

部屋に入ると、蛍と男はさっさと服を脱ぎ捨て、肌を剥き出しにした動物——本能に従うケダモノに戻った。

「じゅぽっ♡ じゅぽっ♡ じゅぽっ♡ じゅるるうっ♡」

「よし、フェラも上手くなってきたな。女の子は、そうやって下品に種請いする方法も覚えなきゃな、蛍」

「じゅるるっ♡ じゅぞっ♡ ぷはあっ♡ は、はいっ♡ ちうううう……っ♡」

蛍を足元に跪かせ、オナニーしながらのひよつとこフェラで、上下関係を教え込む。これも調教には必要な過程だ。真っ白い肌に生える芸術のような金の髪を揺らしながら、あごが外れそうなくらい口を

大きく開けた蛭は、中年男のデカマラをさも旨そうに舐めしやぶる。先端に愛情の籠った誓いのキスをし、形の良い鼻を動かして、ご主人様の匂いを脳髓の記憶領域に刻み込む。

「うああ……射精するぞー！ 全部飲みなさい！ うううっ!!!」

「んぶっ?!?!?」

マヨネーズを絞るように鈴口から噴出し、蛭の喉奥を焦がす粘り汁。顔をしかめなくなる生臭さが鼻腔を抜けていく。しかし蛭は、ご主人様の射精と同時に、腰をガクビクと震わせてクリイキしていた。(イツ、イクっ♡♡ おじさまの精液飲んでイクっ♡ イクううううっ♡♡♡)

オッサンチンポを口に啜え込み、股をおっぴろげたエロ蹲踞のポーズをとっていても、蛭は不思議に清らかな雰囲気を保っていた。白い肌が恐ろしく綺麗で、ピンク色のマン肉も見惚れてしまうほど美しいからだろうか。

と言っても、今の彼女がドスケベなことは変わらない。蛭は男の射精を全て口で受け止めると、チンポから口を離し、荒い息をついた。

「はあ……♡ はあ……♡ ひ……♡ はあ……♡」

「よしよし、よく我慢したな。偉いぞ」

「えへへ……♡」

フェラチオの上達を褒められて、男に頭を撫でられただけで、蛭の心にじわりと暖かい感情が湧き出てくる。心臓が、トクトクと心地よい早鐘をうつ。生き別れの兄を探して見知らぬ世界を放浪し、数多の死闘で傷ついてきた乙女にとって、この幸福感は、余りにも危険な毒を含んでいた。

「それじゃあ次は生ハメだ。蛭はどんな姿勢で犯されたい?」

「た、立ったままっ♡ 立ったまま後ろからがいいですっ♡ おじさまの力で壁に押し付けられてっ♡ おチンポから逃げられなくなりたいのっ♡」

「ははは、注文が細かいなあ。——でも分かった。蛭の望み通り、たっぷりレイプしてあげるよ」

「はっ、はいっ♡ レイプお願いしますっ♡」

蛍が初めて目撃した性交も、バーバラが男に種付けプレスされて、まるでレイプされているように犯されている場面だった。それ以来、逞しいオスにレイプされたいという願望を、蛍は心の奥底で育てていたらしい。

蛍は男に壁に押し付けられた。ハリのある美乳がぐにゅうつと潰れ、蛍は恐怖に目をつぶる。しかし、そうやって男に「支配されている」ことを実感することで、彼女はようやく、自分の寂しさを忘れることができる気がした。

「んおっ♡ おっ♡ おお……っ♡」

男は蛍の腰を掴み、少し膝を折り曲げると、前置き無しで、美少女マンコにチンポをぶち込んだ。チンポが奥までぶっ刺さると、小柄な蛍の尻は下から男に持ち上げられて、不安定なつま先立ちになってしまう。

「あく……めっちゃハメ心地いい……！ チンポが全部、熱いヒダヒダに包まれてるぞ……！ やっぱ……絡みついて射精煽ってくる……っ！」

「ふおっ?!♡♡ おっ♡ おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡ んおおっ♡」

「幸せそうないキ声出して……！ そんなにレイプされたかったのか……！ 望み通り、蛍のオナホマンコでチンポ抜いて、子宮にオッサンザーメン捨ててやるからな!!」

「おひっ♡♡ はおおおっ♡♡ おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡」

「中出しされながら誓うんだぞ!! 蛍は僕のお嫁さんだ!! 一生僕のザーメンコキ捨て穴だ!! 僕の精子と蛍の卵子で結婚式するぞ!! オラっ!! アへってないで返事しろ!!」

「おっ♡おっ♡おっ♡おっ♡——はっ♡ はひいつ♡♡ けっこんしまひゅっ♡♡ おじひやまのおちんぽとけっこんひまひゅっ♡♡ おじひやまにきもひよくなってもらうたためにつ、おまんこがんばりまひゅっ♡♡」

「良い子だ蛍!!」

ボチュボチュボチュと乱暴に抽挿されているにも関わらず、
蛍はマンコからイキ汁を噴き散らしながら、幸せそうに連続アクメし
ていた。快樂の電流で脳神経が焼き切れて、どんだん頭がバカになっ
ていく。チンポと、生ハメと、ご主人様にラブラブ種付けしてもらっ
ことしか考えられなくなっていく。

蛍のつま先は完全に床から離れ、彼女は壁と男の身体にサンドイツ
チされる格好で犯されていた。

(れっ、レイプ凄いつ♡ おじさまのオナホになるの気持ちイイっ♡
こんなカツコで種付けされたら、絶対にんしんするっ♡♡ おじさ
まに一生飼われちゃうっ♡♡ はううううっ♡♡)

蛍はイキまくりながら、どこか平和な土地で庭付きの家を買い、男
と毎日生ハメして、彼の赤ん坊をポコポコと産む幻を見た。ぽっこり
膨らんだ孕み腹を抱え、そこから聞こえる小さな心音を男に聞かせる
蛍は、とても幸せそうな表情をしていた。

「出すぞ蛍!! 堕ちろっ!! 孕めっ!!」

「ふぁ……♡♡♡♡♡」

「ううおおおおっ!!!」

「♡♡♡♡♡♡♡♡」

その種付けの瞬間、蛍は、自分の身体がふわりと宙に舞い上がった
気がした。

降りてきた子宮が、精子を一滴も逃さないように、亀頭にデーパー
キスする。

火口から粘度の高いマグマが噴出するように、ドボドボと、熱い生
命力の塊が、蛍の下腹部に満ちていく。

「堕ちろ蛍!! 孕めっ!! 孕め……っ!!」

(はらめって……おじさま……♡ ほんきでわたしのこと……♡)

「孕め……!! 僕のお嫁さんになれ……!!」

(はい……なります。わたし、あなたのおよめさんになります……♡

あ……っ♡)

心の中で、蛍は男に誓いを立ててしまっていた。そしてその瞬間、
蛍の心と身体に、劇的な変化が起こった。

(イク……っ、いままでより、ずっとすごい……くる……っ。あ……あ……っ♡♡)

アンバーやバーバラやノエルが、男のオンナにされて、あんなに幸せそうな顔をしていた理由が、ようやくわかった。

これが、「メス」になるということなのだ。

(からだのなか、ぜんぶひっくりかえる……っ♡ おかしくなる……っ♡ あたまくるう……っ♡ うあああ……っ♡♡♡♡)

意識の外で濁点付きのアクメ絶叫をあげながら、意識の内側で、自分が本当に男のモノに変えられていく瞬間を目の当たりにする蜚。体内の元素が暴走して感覚過敏になった蜚には、卵子にゾワゾワと精子がまとわりつき、その中の一つが、ぷちゅんと内部に入り込んだシーンまで、はつきりと見えてしまった。

(あ……っ♡♡♡♡ 私……孕んじやった……♡♡♡♡ おじさまの……赤ちゃん……♡♡♡♡)

男が射精を終えても、二人は繋がったまま動かなかった。

とっかえひっかえ【とっかえひっかえ】

パンパン、パンパン、パンパンと、肉と肉をリズムカルに打ち付け合う音が響く。僕は今日も、モンド城下町の愛の巣で、朝っぱらから美少女のメス穴をチンポで犯している。

「ふくん、それじゃあ蛭は、風の元素だけじゃなくて、岩の元素も使えるのかあ」

「うっ♡ うんっ♡ そうですおじさまっ♡ あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡」

蛭の両手首を掴み、自分のほうに引き寄せながらの立ちバック交尾。部屋のご真ん中で、僕らは誰に憚ることもなく、性器同士を繋げて愛を確かめ合っていた。

「すごいね。それって、僕にもできるようになるかな?」

「わっ♡ わからないよおっ♡ あっ♡ おチンポっ♡ 深いいつ♡

お、奥にキイちゃう……っ♡ イクの我慢できないっ♡ ふ、ううゝゝっ♡♡♡」

「おっ、締まる締まる。僕も射精するよ、蛭」

蛭が歯を食いしばってイキ散らかすと、僕もそのタイミングに合わせて、彼女の胎内にザーメンを蒔き散らした。自分のお嫁さんになった美少女のマンコに種付けするのは、何発やっても止められない。

「おっ、おっ、おっゝヤベエ。無防備なマンコにザーメン出すの気持ちええわあ……」

調教の成果もあつて、蛭のマンコはすっかりこなれ、僕のチンポのカタチになってきた。けど、キツキツに絡みついてくるのは相変わらずで、僕はいちいち面倒なことを考えなくても、思う存分射精快楽を堪能することができる。既に蛭は僕のお嫁さんだから、子宮に無責任にドピュリ散らかしても、「それが僕の権利だから」の一言で済むわけだ。

中に出すだけじゃなく、蛭の白い肌にもマーキングしておきたくなった僕は、射精の途中でマンコからチンポを引き抜いた。

「——んおっ♡♡♡♡ おじさまの太いのっ♡ ぬ、抜けちゃった

♡ せ、せなかに精液かかるっ♡ あっっ、あっついよおっ♡」
「ふいっ、どっばどば出るなあ。チンポめっちゃビクついて止まらな
いよ」

桃のような蛍のお尻の割れ目に肉竿を添えて、ずりずりと前後させる。「ぼびよっ♡ ぶびよびよっ♡」と重たい音を立てて嘔き出るザーメンが、蛍の白い背中を次々とデコレーションしていった。

オスとメスで交尾して気持ち良くなること。これぞ生命の本質だ。誰もこの快樂には抗えない。かつてはあれだけ抵抗していた蛍も、今ではすっかり素直になった。口調もよそよそしいものじゃなくて、打ち解けた、彼女の素が出たものになっている。

「はあ♡はあ♡はあ♡はあ♡ ——んっ♡♡ ンんっ♡♡」

「あく出した出した。蛍もきちんとイケたかい？」

「は、はいっ♡ い、いまも——んっ♡♡ イ、イってるのっ♡♡ えへへっ♡」

「どうだい、セックス楽しいだろう？」

「うんっ♡ すっごく楽しくて気持ちいい♡ おじさまにレイプしてもらって、メスにしてもらって、本当に良かったのっ♡」

「ごっち向きなさい。キスしてあげよう」

「うわあ♡ やったあ♡ ——んっ♡ ちゅう……♡」

僕と蛍は、素っ裸で正面から抱き合って、物凄く濃厚なディープリキスに没頭した。蛍はつま先立ちになり、両腕を僕の首に巻き付けて、自分から積極的に舌を絡めてくる。僕が蛍の手のひらサイズのおっぱいを揉むと、さらに頭を押し付けてくるのだ。

「ちゅば……っ♡ ちゅ……♡ おじさまあ……♡ ちゅ……♡」

ハメ快樂に依存した女の子は可愛い。蛍もこれからさらにチンポで調教してあげて、より僕好みのメスになるよう、丹念に躡けてあげよう。

「蛍、愛してるぞ」

「うん……♡ わたしも愛してる……♡」

「お前は一生おじさんのチンポケースだからな？ 僕の種で孕んで赤ちゃんを産むことだけを考えて生きるんだ」

「ふあ……♡ 赤ちゃん……♡ うれし……♡ そしたら寂しくないよね……？ むちゅ……♡ ちゅぱ……♡ お兄ちゃんも喜んでくれるよね……？」

「もちろんだよ」

僕は自信をもって頷いた。蛭が生涯愛し合う伴侶を得たと知れば、彼女の生き別れのお兄ちゃんも、きっと喜んでくれるに違いない。そのときはぜひ、ボテ腹になった蛭をお兄ちゃんに見せてあげようじゃないか。

アンバーも、バーバラも、ノエルも、そして蛭も、僕がモンドでお嫁さんにした四人は、きつともう孕んでいる。元素視覚で確かめると、僕から流れ込んだ元素が、彼女たちの子宮のあたりにとどまって、薄っすらとハート型を描いているのが見えるのだ。

僕の子を孕んだ四人のことが、僕は愛おしくて仕方ない。彼女たちのためになら、一日中ぶっ通しで交尾してザーメンを出し続けることもできるだろう。——でも、交尾ばかりでは生活ができないのも、また事実だった。

「蛭、そろそろお風呂に入ろうか」

「うん♡ また洗いつこしようね♡ おじさま♡」

「ははは、蛭は洗いつこが好きだなあ。いいとも。——で、それが済んだら、冒険者協会に行くぞ？」

「ちゅ……♡ ちゅぱ……♡ 冒険者協会……？」

蛭はチンポを手で扱きつつ、僕の乳首に吸い付きながら尋ねてきた。「もう今日のセックスはおしまいなんですか？」とでも言いたそうな顔だ。僕は蛭の柔らかな金髪を撫でつつ、いま考えていることを彼女に教えてあげた。

「ああそうさ。これから『家族』が増えるんだから、もつとお金を稼ぐ方法を考えておかなきゃならないだろ？ 家だつて、いつまでもこの部屋じゃ狭いしね。——おつ、おつ、おつ、おつ、蛭の乳首舐め手コキヤバい……っ！ 出るっ……！」

「んちゅう……っ♡ あは♡ おじさま、すっごいビクビクしてる……♡」

当たり前のように美少女たちとの性行為が組み込まれたこの生活を、守り通していく必要がある。それだけじゃない。僕がまだ知らない、僕のチンポを待っている新しい美少女たちのことも考えてあげなければならぬ。その子たちのお腹にも種を蒔いて、新しい命を育むんだ。それが、この世界にやってきた僕に与えられた使命なんだろう。

「はあ、はあ……ふうく。蛍、やっぱりお風呂でもう一発、お前の中にザーメンコイてから出発しようか」

「んちゅ……♡ ふあい♡ わたしもそれがいいと思うな、おじさま♡」

そのあと僕と蛍は、浴室でお互いの身体を使って洗いっこしながら、たつぷりラブラブセックスした。お陰で、出かける時間は予定よりもだいぶ遅れた。

「そうですね、モラを稼ぎたいということでしたら、璃月港に行ってみるのはどうでしょうか？ 璃月は、モラを司る岩神の国ですから」

「璃月……？ ああ、そう言えばジン団長も言ってたなあ」

冒険者協会のキャサリンさんは、「お金を稼ぎたいんだけど、どうすればいいと思うか」という僕の質問に、この世界で最も商売が盛んだという港町の名前を挙げた。

「蛍もそこに行ってたんだよね？」

「うん、ファデュイが執行官を送り込んで——色々あったの。おじさまは、執行官のことは知ってる？」

「それもちよつとだけ、ジン団長に聞いたよ」

「私もまだ璃月でしなきゃならないことが残ってるから、おじさまと一緒に来てくれると嬉しいけど……」

「なるほど」

きつとお兄ちゃんの手がかりとかが色々あるんだろう。期待するような蛍の視線を受けて、僕は納得した。ずっとモンドの城下町にいて、そろそろ他の町の風景を見たいと思っていたところでもある。

「でもなあ……」

「おじさまっ……」

「ああ、虫は心配しなくてもいいよ。こっちの話さ」

モンドを離れるなら、最後にやっておきたいことが有る。

それは他でもない、ジン団長のことだった。

＝

「あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡あつ♡ おじさま♡ おじさま♡
いつ♡」

夜、僕は自分の部屋でバーバラを犯していた。

小細工抜き、正常位での甘々恋人セックスだ。

僕の力強いピストンで、ベッドがギシギシと激しく軋む。バーバラは両脚で僕の腰をガッチリホールドし、とても気持ち良さそうにヨガっていた。

僕らの隣では、さつきまで僕にハメ潰されていたアンバーが、割れ目からこぼこぼ精液をこぼしながら、ちよつとだらしない格好で寝ている。

「おじさま♡ キス♡ もつとバーバラにちゅーして♡
ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡ ちゅ♡」

モンドのアイドルをチンポでトロトロにするのは、何度やっても最高だ。密着正常位で僕の胸に当たってひしゃげたバーバラのおっぱいは、すつかり発情して乳首をツンツンに尖らせている。

「出すぞバーバラ！ 中出しで奥イキしろ！ うううっ!!!」

「んんんんん!!!♡♡♡♡♡」

この世界に来てから、僕の性欲はますますアップしているようだ。朝から何発も美少女マンコにザーメンをぶっコイているというのに、射精の勢いが衰える気配が無い。というか最近わかったけど、どうやらこれは、僕が元素の力に目覚めたからだろうだ。

僕はバーバラに種付けすると、視覚を通常モードから元素視覚に切り替えた。

ほら、やっぱりだ。バーバラのお腹に、僕の元素がハートマークを描いている。ひよつとして、これって元素スキルってやつじゃないか？

「はあ♡はあ♡ はあ♡はあ♡ 中出しえつちでイクの、す、すごかつ

たよお……♡♡」

「うくん、でもまだ良く分からないな。試しにもう何発か中出ししてみるか……」

「あおっ!?!♡♡ おっ、おじひやまっ♡♡ あうううっ!?!♡♡♡♡」

僕はバーバラの右脚を持ち上げて、松葉崩しの体勢にしてから、腰の前後運動を再開した。

全然疲れない。チンポは怖いくらいギチギチだ。バーバラは口を大きく開けて、はしたないのけ反りアクメに陥っている。

「奥を突きながら、この元素を……こう弄って。どうだいバーバラ？何か変化はある?」

「はおおおっ♡♡♡ んいつぎっ♡♡♡ イクっ♡♡♡ イクイクイクっ♡♡♡ あゝゝゝっ!?!♡♡♡ ほ、おゝゝゝっ!?!♡♡♡」

「うわっ、めっちゃイキ潮噴いたね? そんなに気持ちいいの?」

ふーむ、元素セックスはなかなか奥が深いぞ。バーバラのイキマンガが喰いちぎる勢いで僕のチンポに噛みついてくるから、僕のほうも油断するとすぐに射精してしまいそうだ。

そうやって腰を振っていると、コンコンと、控え目にドアをノックする音がした。このノックの仕方には心当たりがある。

「入っいいいよ」

「はい、失礼します」

「ああ、やっぱりノエルか。——うっ!!!」

「ひぐうっ!?!?!♡♡♡♡ ふあ……♡♡♡ ああ……♡♡♡」

僕に種付けをキメられて、バーバラは一段と深い絶頂に陥った。騎士団の仕事を終えてから、僕にハメられるために急いで来たらしいノエルは、声にならない絶叫アクメで痙攣するバーバラに、少し先の自分の未来を見たらしい。ノエルはポツと顔を赤らめると、その場ですっむいてしまった。

「うっ、ふっ、おお……! ノエル、騎士団メイドの仕事は終わったの?」

「は、はい……(主人様)」

「そっか、お疲れ様だったね。うああ……! バーバラの子宮、めっちゃ

くちや吸い付いてくる……!」

「……………」

僕はノエルに見せつけるように、腰をブルブル震わせてバーバラの膣内にザーメンを「排泄」した。

「それで、今日はどうしたんだい?」

「えっ」

「何かここに来る用事でもあったのかな? おおっ! まだ出る……!」

強すぎる快感の余り、バーバラは半ば失神してしまっていた。そんなバーバラの子宮を自分の色に染め上げながら、僕は白々しくノエルに問いかけた。ノエルが何を望んでここに来たのか、わかりきっているというのにだ。

そんな僕の意地悪に、ノエルはしばらくモジモジしたあと、鎧風のエプロンスカートの前を、おずおずとたくし上げた。

「わ、私も……ご主人様に種付け交尾していただきたくて」

そこまで口にする、羞恥に耐え切れず、ノエルは唇を噛んで目を伏せた。ガーター付きの白い清楚な下着が、この距離からでもわかるくらいぐっしよりと濡れている。

こんな状態で仕事をしていたなんて、とんだスケベメイドだ。バーバラへの種付けの最中だというのに、僕はノエルへのムラムラを抑えきれなくなりそうだった。

「おお、おお、おお……ふう……出したあ」

「あ、あの……」

失神してもなお絡みついてくるマン肉から、僕は肉棒を無理やり引き抜いた。そして、アンバーの横にバーバラを寝かせると、チンポを雄々しくおっ勃てたまま、ベッドから降りてノエルの前に立った。

「ご、ご主人様」

「ノエル、メイドならどうすればいいか、言わなくてもわかるだろう?」
「はっ、はいっ! 失礼します」

メイドにとっては、自分が気持ち良くなることよりも、ご主人様の気持ち良い射精のほうが優先される。ノエルは優秀だから、すぐに僕

の言葉の意味を理解した。ノエルはいそいそとガーター以外の鎧を脱ぎ捨てると、僕の足元に跪いた。

「ノエルのお口とメイドおっぱいで、ご主人様のおチンポを、綺麗に清めさせていただきます……♡」

「そうだ、それでいいぞ」

「はむ……♡」

ノエルは口に僕の亀頭を含み、肉棒をおっぱいで挟み込んで、献身的なパイズリフェラ奉仕を始めた。バーバラの本気汁とザーメンでぬちゃドロになった長竿を、文句ひとつ言わずにお掃除する様子は、まさにメイドの鑑である。

ノエルもバーバラたちと同じ、僕のお嫁さんだけど、同時に彼女は僕専用のオナホメイドでもあるから、より上下関係がハッキリしたセックスを好むんだ。だから僕は、ノエルに対し、敢えて高圧的に振舞っていた。

「ん……♡ ふ……♡ ちゅば……♡」

既にバーバラとアンバーがハメ潰されて転がっているヤリ部屋に、ノエルの苦しそうな呼吸の音と、淫靡な唾液音がかすかに響く。尿道に再装填された種汁が、この若くてエロいメスの胎内に入りたがって、ぎゅるぎゅると渦巻いているのがわかる。

僕が元居た世界基準だと、ノエルはきつとJC後半かJK前半というところだろう。バーバラとアンバーも同じだ。——でも、彼女たちは既に、僕のチンポに一生を捧げる誓いを立ててしまっているのだ。

「掃除はそれぐらいでいいぞ、ノエル」

「ふはあ……♡ はい♡」

「チンポ美味かったか？」

「とつても美味しかったです……♡ お掃除してるだけで、おへその下が、キュンキュンって熱くなってしまうましたあ……♡」

僕が指で顎下をくすぐると、ノエルは恥ずかしい告白をしながら、ぶるぶるっと全身を震わせた。

「お願いします。おチンポ……♡ はしたないメイドのノエルに、おチンポください、ご主人様あ……♡」

「どこに欲しいのかちやんと言わないと、伝わらないぞ?」

「おマンコにください……♡ ご主人様のおチンポに躡けられたことを忘れられなくて、明るい時間から、ずっとうずうずしてた、ノエルのおマンコに……♡」

「やれやれ、欲しがりなメイドだな」

少し前までセックスのセの字も知らなかった純真な乙女を、ここまですケベに変えてしまった責任というものがある。僕はおもむろに絨毯に寝転がると、腰が抜けたみたいへたり込んでいるノエルに、上に跨るように促した。

「そんなにチンポ欲しかったら、自分で腰を振ってごらん」

「あ……♡」

マンコにオツサンチンポを咥え込み、スケベに腰を振る自分の姿を想像して、それだけでノエルは軽イキしてしまったらしい。ゾワゾワと背中を震わせると、彼女はおぼつかない足取りで立ち上がった。

そして、僕の出っ張った腹の上に乗ると、笑顔で言った。

「そ、それでは、ご主人様のおチンポで、お、おマンコさせていただきます♡ スケベメイドのノエルが、みつともなく腰を揺らして、イキ散らす有様をご覧ください♡」

やっぱりノエルは優秀なメイドだ。僕がどんな台詞を求めているのか、この子はちゃんとわかっていた。僕がニヤリと口元を歪めると、ノエルも嬉しそうに、でも恥ずかしそうに涙目で微笑んだ。

「いいぞ、だったら自分で挿入するんだ」

「は、はい♡ あ♡ ふああ……♡」

「うお……! むっちりメイドマンコに、チンポ喰われる……! いいぞお……!」

ノエルが腰を沈めていくと、僕のチンポの先端が、綺麗な割れ目に食い込み、ずにゆうつと滑り込んでいく。濡れまくって挿入に不都合はないけれど、何重にも甘噛みされているような極上の締めりだ。

「お……♡ ほっ♡ はひっ♡ では、こしを振らせていただきますしゅ……♡ ンおっ♡ ンっ♡ ンっ♡ ンっ♡ ンっ♡ ンっ♡」

挿入しただけで膝から下がガクガク震えているっていうのに、ノエルは一生懸命に腰を振った。前後にクイクイとグラインドさせてみたり、はたまた、両ひざに手を置いてお尻を上下させてみたりと。

「ほ……お、お……っ♡♡♡ ごしゅじん、さまっ♡♡ ごしゅじんさま専用の、メイドおマンコの入り心地はどうでしゅかっ？♡♡♡」

「ああ、とつてもいい湯加減だぞ。あつたかくてチンポ溶けそうだ」

「よ、よかった♡♡ うっ、うれしいですっ♡♡ っ♡♡ っ♡♡ っ♡♡」

自分で動かなくていいから、僕は自分のチンポがノエルのマンコにずっぷりハマり込んでいる景色を、楽な姿勢で堪能できた。

汗がじんわり浮かんだ白い肌のおっぱいが、たぶんと丸を描くように揺れる様子なんかは、まさに絶景だ。騎士団の訓練で引き締まったお腹の奥を、オッサンチンポがミツチリ埋め尽くしていると思うと、つい慈しむ表情になってしまう。

「すごいっ♡♡ すごいっ♡♡ これすごいっ♡♡ わたし、ご主人さまのおチンポでオナニーしてるっ♡♡ メイドのくせに、ご主人さまで勝手に気持ち良くなってるっ♡♡ あああっ♡♡」

感極まったノエルは、自分のおっぱいを手に掴み、乳首をクリクリと弄りながら甘イキを繰り返した。ゾワゾワと蠢くマンコの肉ヒダが、チンポをめちやくちや気持ち良くしてくれる。

「イクっ♡♡ イクっ♡♡ あっ、アクメしますっ♡♡ ご主人さまっ♡♡ ノエルに絶頂の許可をくださいませっ♡♡ ご主人さまっ♡♡」

「よし、イっていいぞ。その代わり、きっちりマンコ締めて、ザーメンを一滴残らず子宮で飲み干すんだ」

「は、はいっ♡♡ 承知いたしましたあっ♡♡ んんんっ♡♡♡♡♡ イっ、くう~~~~っ♡♡♡♡」

「うあああ……」

僕の可愛いオナホメイドは、自分の乳首をきゅっつと摘み上げ、下半身をとつともなくビクつかせながら、顔を天井に向けて大きなイキ声をあげた。

僕は寝っ転がったまま、射精に集中するだけでいい。そうしていれ

ば、亀頭に吸い付いたノエルの子宮口が、勝手にザーメンをゴクゴク飲み干してくれる。

「ああ、最高だ……!!」

こうやって、美少女マンコを好きなようにとつかえひつかえしながら、超絶気持ちいい射精をする毎日が。

そしてこのハーレムの輪を、もつともつと大きくしていきたい。僕はそう思いながら、ノエルのイキマンに、熱い精子を止めどなく流し込んでいった。